
魔法少女まどか マギカ～銀の海辺～

CENTER

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ〜銀の海辺〜

【Nコード】

N8653U

【作者名】

CENTER

【あらすじ】

大好きな家族がいて、親友がいて、時には笑い、時には泣く。そんな、どこにでもある日常。

けれど、その日常の裏では、魔女と魔法少女の熾烈な戦いが繰り広げられていた。

己のために、誰かのために、世界のために――

あるいは、たった一人の少女のために戦う、魔法少女たち。

そして、ここに新たに一人。

魔法少女たちの戦いの軌跡に紛れ込む、銀色の魔法少女。

それは、新たな物語の始まり――

第1話「夢の中で逢った、ような……」

少女——かなめ鹿目 まどかは走っていた。

走るリズムに合わせて、頭の左右で括られた桜色の髪が跳ね、同じ色の瞳は不安に揺れる。

白と黒の世界。誰もいない廊下、階段。その先には一つのドア。
『EXIT』と書かれたプレートをくぐって、ドアを開く。

——その先では、世界が滅んでいた。

大地は瓦礫に覆われ、人工の光は消えうせて。

高層ビルがへし折られ、その残骸が宙に浮かぶ。

天空を覆う曇天の下、巨大な呪いの塊が空に嗤う。

齒車にドレスを着た人形を載せて、逆さまにひっくり返したよう

な——異形。

自然災害の如き威容に、しかし、それでも挑む人影があった。

小柄な影——少女。

ヘアバンドで止めた長い黒髪。紫紺の瞳。

空に身を躍らせ、絶望に挑む彼女を、呪いの炎が焼く。

「ひどい……」

「仕方ないよ。彼女一人では荷が重すぎた」

惨状に声を上げたまどかに、答える声は傍らから。

少女か、あるいは幼い少年のような声。

しかし、声を主を探したまどかが見たのは、人間ではなく、白い

——テレビのチャンネルを変えるように、視界が切り替わった。

「聞こえますか、——」

「聞こえますか、どこかにいる——。」

語りかけてくる声は、ノイズに塗れて明瞭には聞こえない。語りかけてくる誰かは、砂嵐の向こうで明瞭には見えない。髪を長く伸ばした、おそらく女性。わかるのはそれくらい。

「聞こえますか、どこかにいる——」

「聞こえますか、遠くにいる——」

「聞こえますか、たくさんの——」

彼女は何かを訴えていた。

必死に。

きつと、本当なら声の届かないような、遠くから。

「聞こえるなら、どうか、救ってあげてください」

「聞こえるなら、どうか、幸せにしてあげてください」

「私が苦しめてしまった、あの人を」

「私が呪いをかけてしまった、あの人を」

あの人とは誰だろう、とまどかと思う。

きつと、この誰かにとって、大切な人だったんだろうとも。

誰かの姿が見えた気がした。

助けられるのだろうか。

——こんな、わたしにでも。

「どうか、どうか」

「私から、——へ託します。」

託されることは、できるだろうか。

——再び、視界が切り替わる。

そこはベッドの上だった。

彼女の通う中学校の制服を着ていたはずだが、今はクリームイエローのパジャマになっている。

枕元には沢山のぬいぐるみ。まどかの腕の中にも一匹いた。

まどかは、寝惚け眼で起き上がり、数秒かけて現実を認識した。
すなわち——

「夢オチいゝ？」

魔法少女まどか マギカ／＼銀の海辺／＼
第1話「夢の中で逢った、ような……」

「おはよう、パパ」

目を覚ましたまどかはリビングへ向かい、窓の外の家庭菜園で野菜を収穫している父に声をかけた。

鹿目 知久^{ともひさ}。眼鏡の似合う、優しい風貌の専業主夫である。

「おはよう、まどか」

「ママは？」

「タツヤが行ってる。手伝ってやって」

「はい」

まどかは母——鹿目 詢子^{じゅんこ}——の部屋に向かい、布団の上に馬乗りになって起こそうとしていた弟——鹿目 タツヤ。3歳児——と協力して詢子を起こした。

「最近、どんなよ」

洗面所でまどかと並んで歯を磨きながら、まだ目の覚めきっていない詢子は聞いた。

「仁美ちゃんにまたラブレターが届いたよ。今月になってもう二通目」

「ふん、直に告る度胸のない奴はだめだ」

歯を磨き終わり、髪にドライヤーを当てながら、話題は詢子の友人でもあるまどかの担任——早乙女 和子——の恋へとシフト。

「まだ続いてるみたい。今週で三ヶ月目だから記録更新だね」

「さあどうだか。今が危なっかしい頃合だよ」

「そうなの？」

「本物じゃなかったら、この辺りでぼろが出るもんさ……よしっ、完成」

そんな不吉な予言をしている間に目も覚めたのか、化粧を終えた詢子はやり手そうなキャリアウーマンへと変貌していた。

まだ中学二年生のまどかには、母のように複雑な工程を必要とする化粧は縁がない。

せいぜい、髪を束ねるリボンの色で迷うくらいだ。

「リボン、どっちにしよう……」

「こっち」

赤と黄色のリボンを持って悩むまどかに、詢子は赤いリボンを指した。

「えー、派手過ぎない？」

「それくらいでちょうどいいんだよ」

「いいのかなあ……」

半信半疑でまどかは赤いリボンをつける。

「うん、いいじゃん」

鏡に映ったまどかの姿に、詢子は太鼓判を押した。

家族四人で朝食を済ませると、もう出発の時間だ。

詢子は幼い息子と夫に軽いキスを。

最後にまどかとハイタッチした。

「おっし、じゃ、行ってくる」

「いつてらっしやい」

手を振って出て行く詢子を声を揃えて見送る。

「まどかももう行かないと」

「あ、うん」

知久の言葉に頷いて、まどかは食べかけの食パンを口に運んだ。

「行つてきまーす」

家を出て、道路を小走りに進む。

まどかの住む、ここ見滝原市は、近年大きな開発が行われた地方都市だ。

近代的な都市開発モデルという触れ込みで、時折日本離れた景觀が目に入ることもある。

通学路を辿っていると、いつもの待ち合わせ場所に、二人の少女の姿を見つけた。

「さやかちゃん、仁美ちゃん」

まどかが呼びかけると、二人はまどかの方を振り向いた。

左右で少し長さの違うショートカットの青い髪に黄色のヘアピン

二つ、青い瞳の快活そうな少女——美樹 みき さやか。

若草色のウェーブヘアに緑の瞳の上品そうな少女——志筑 きじ 仁美。

二人ともまどかのクラスメイトで、親友とも呼べる間柄である。

「おっはよー」

「おはようございます」

「遅いぞー、まどか」

「ごめんねえ」

合流した三人は、一まとまりになって歩き始めた。

「でね、ラブレターでなく直に告白できるようでなきゃダメだって」
「おー、相変わらずまどかママはかっこいいなあ。美人だしバリキヤリだし」

身内を真っ直ぐに褒められるのはくすぐったい。

さやかという少女は心にもないことを言ったりしないとわかって
いるからおさらだ。

まどかは、「そうかなあ」と照れ笑い。

「でも、いいなあ、仁美ちゃん。わたしも一通ぐらい貰ってみたい
よ、ラブレター」

「ほほう、まどかも仁美みたいにモテモテになりたいと。それでリ
ボンからイメチェンかー？」

「へ？ 違うよ、これはママが……」

そう言って、まどかは指先でリボンをいじり、

「それに、派手じゃないかな？」

「とつても素敵ですよ」

「仁美ちゃん……ありがとう」

ふにやと相好を崩してお礼を言うまどか。

そんなまどかに、さやかが抱きつく。

「もー、可愛いやつめ！」

「さ、さやかちゃん!？」

「まどかはあたしが嫁にするのだー」

「えええ」

きやいきやいと騒ぐまどかとさやか。

二人を尻目に、仁美はため息を吐いた。

「でも、好きでもない人からラブレターを貰っても、困ってしま
いますわ」

「モテるなりの悩みてやつ？ 贅沢だぞー」

「って言うか、仁美ちゃん、好きな男の子いるの？」

「えっ？」

さやかに背中から抱きつかれたまどかの一言に、仁美は微妙に顔

を引きつらせた。

そこに、すかさずさやかが食いつく。

「お、なになに、その反応。もしかして、マジでいたり……?」

「それは……」

「それは?」

二段重ねになって、興味津々の顔を向ける二人。

妙な迫力に押された仁美は、

「乙女の秘密ですわ」

につこりと、笑って誤魔化した。

「今日は皆さんに大事なお話があります」

始業のチャイムが鳴り響き、ホールルームは和子のそんな言葉から始まった。

「目玉焼きとは固焼きですか? 半熟ですか? はい、中沢君!」

「え? ええつと、どっちでもいいんじゃないかと……」

突然指示棒で指された男子生徒がうるたえながら答える。

「そう! その通り! どっちでもいいのです!

いいですか、女子の皆さん! 卵の焼き方にケチをつけるような男とは付き合わないように!

そして男子の皆さんは、くれぐれもそういう大人にならないように!」

力強く言い切った和子の手の中で、指示棒が二つにへし折れた。

「ダメだったか……」

「ダメだったんだね……」

斜め前の席から話しかけてきたさやかに、まどかは苦笑いしながら返した。

「どうやら、母の不吉な予言は当たってしまったようだ。

「あ、それから、今日は転校生を紹介します」

一瞬で態度を取り繕った和子に、クラスの心は一つになった。そっちが後回しかよ！と。

「曉美さん。入って来てー」
「はい」

返事をした転校生が、教室に入ってくる。

腰を越えるほど長い黒髪を靡かせて歩く姿に、クラスからざわめきが起こる。

「うっわ、すげー美人」

さやかが転校生の容姿を端的に評する。

が、まどかはそれとは全く別のことに驚いていた。

（あの人……夢に出てきた……？）

転校生の少女は和子の隣まで進み、生徒たちに向き直る。

「曉美^{あけみ} ほむらです。よろしくお願いします」

名乗るだけの自己紹介をして、一礼。

それ以上は何も言わない。

前に住んでいたところとか、転校の理由とか、あるいはキャラを立てるためにギャグを言うとか。

そういう、新しい環境に溶け込もうとする努力を、一切省いていた。

「えっと、皆さん、仲良くしてあげてくださいね」

戸惑い気味の和子の言葉に、同じく戸惑っていた生徒たちから拍手が起こる。

ほむらはそれにも表情一つ動かさず、感情を見せない瞳を、少し動かした。

「えっ」

その視線は、まどかを真っ直ぐに捉えていて。

そこに込められている力の強さに、まどかは落ち着かなくなつて視線を彷徨わせた。

最初の休み時間。

転校生のお約束とでも言うのか、曉美ほむらの席の周りには、生徒たちが輪を作って質問をぶつけていた。

「前はどこの学校だったの？」

「部活はやってた？」

「髪綺麗だね。シャンプーなに使ってる？」

矢継ぎ早にかけられる質問に、ほむらは一言ずつではあるが、きちんと答えていた。

「大人気ですわね」

「ふーむ、あたしの見立てだと転校生はクール系の美少女だね」

「さやかさん、それでは見たままですわ」

「あはは、確かに」

ほむらを囲む輪から少し離れて、まどかたち三人は話していた。

「で、まどか。あの子知り合い？ さっきガン飛ばされてなかった？」

「いや、それは……えっと……」

夢で見ましたとは言い辛くて、まどかは言葉を濁していると――

「鹿目まどかさん」

「はいっ!？」

耳馴染みのない声に、まどかはぴんと背筋を伸ばした。

少し目を離している間に、ほむらがまどかの前に立っている。

「あなたがこのクラスの保健係よね」

「え……」

「少し緊張しすぎたみたいで、気分が悪いの。保健室まで連れて行ってもらえる？」

「あの、えっと……うん」

まどかを見下ろして聞くほむらに、まどかは頷くしかなかった。

（何でこんなことになってるんだろう……）

まどかは、先に立って歩くほむらの背中を追いかけながら、そう思った。

どういう経路かはわからないが、美少女転校生の噂は既に学校中に広まっているらしく、廊下にいる生徒の視線はほむらに集中していた。

ほむらは何でもなさそうな顔で歩いているが、普段誰かに注目されたりすることのないまどかは、自分が見られているわけでもないのに落ち着かない。

そもそも、保健室まで連れて行って欲しいって言ったのに、何で先に歩いているんだろう。

「あ、あの！ 保健室……」

「こっちよね？」

「う、うん……」

ちょうど分かれ道になり、まどかが声をかけると、ほむらは当然のように正しい道を選んで進んだ。

だからといって、ほむらを放っておくわけにもいかず、まどかは仕方なく後に続く。

一般の教室を離れて保健室が近づくと、次第に生徒の姿がなくなり、まどかとほむらの足音だけが響くようになった。

「あ、あの、曉美さん？」

沈黙に耐えかねて、まどかが声を出した。

数呼吸分の時間を置いて、ほむらから返事が届く。

「ほむらでいいわ」

「……ほむら、ちゃん？」

「何かしら」

「あ、えっと、その……か、カッコイイ名前だね」

特に何か話題があつたわけでもない。

苦し紛れにそんなことを言ったが、ほむらは無言で足を進めている。

もしかして怒らせたのだろうかと思ったまどかは、慌てて他の言葉を探し、

「え、えつと、あのねっ——私とほむらちゃんって、前にどこかで会った、かな？」

（つて、余計変なこと言っちゃったー！）

「な、なんちゃってー、あはは。そんなわけないよね……」

一瞬、ほむらは何かに耐えるように唇を噛み締め、
刹那のうちにその表情を打ち消した。
足を止めて、振り返る。

「鹿目まどか」

鋭い一言で、まどかがもごもごと重ねていた言葉を一蹴して、
「あなた、家族や友達のこと、大切だと思ってる？」

突然の質問に、まどかは少し驚く。

「えと、私は……大切、だよ。家族も、友達みんなも。大好きで、
とっても大事な人達だよ」

前半は考えながらだったが、話している間に言葉がまとまり、最後ははつきりと言い切ることができた。

「そう。それが本当なら、今とは違う自分になろうだなんて、絶対に思わないことね」

「え……」

ほむらの言葉は、まどかの心を衝いた。

まどかは、極平凡な少女だ。

何か、特筆すべき才能を持ってはいない。

だから、何かができる、誰かのためになれる自分になれるのなら、変わりたかった。

まどかの心の奥にあった願い。

けれど、会ったこともないはずのほむらは、それを否定した。

「ほむらちゃん……どうして、そんなことを言うの？」

「それを望めば、全てを失うことになるからよ」

ほむらは、そう言つてまどかに背を向けた。

「貴女は、鹿目まどかのままでいればいい。今までどおり、これから」

背中越しに言葉を投げかけて、ほむらは廊下を歩いて行つた。

転校生。暁美ほむら。

先ずはその容姿を以つて噂的になつた彼女は、見た目だけの少女ではなかつた。

授業では教師が試しに解かせてみた難問に一度も手を止めることなく正答し、

走り高跳びを行つた体育の授業では、さらりと県内記録を叩き出してしまつた。

かくして、暁美ほむらは、文武両道才色兼備クール系美少女として校内の話題をさらつたのだつた。

噂は他の学年にまで響き、一つ上、三年生の教室にも届いていた。「二年にムチャクチャかわいい子入ったらしいよ。頭もいいし運動もできるって」

「マジで？ 狙っちゃおうかなー」

「お前程度じゃムリだつて」

笑いながら話している男子生徒たち。

それを、教室の隅から冷ややかに見つめる橙色の瞳。

短めの黒髪の少女。呉くれ キリカ。

彼女は、この世の全てがキライだつた——いや、興味がなかつた。

「そうなんだ」で全部返せるような、スカスカの会話。

バカ丸出しの友情ごっこや愛情ごっこ。

（ああ、ぜんぶ、くだらない——）

放課後。市内のショッピングモールに入っているファストフード店で、まどかは、さやかと仁美にほむらから言われたことを相談していた。

「それで、全てを失うことになるからって」

まどかが話し終わると、さやかはぼかーんとした顔で固まる。

「ええ？ 何それ？」

「訳わかんないよね……」

「文武両道で才色兼備かと思いきや実はサイコな電波さん。

くう、どこまでキャラ立てすりゃあ気が済むんだ？ あの転校生は！？」

萌えか？ そこが萌えなのかあ！？」

大げさな身振りで言い切り、テーブルに突っ伏すさやか。

仁美は、さやかの様子に苦笑し、

「まどかさん。本当に曉美さんとは初対面ですの？ やはり、初対面の人に言うようなこととは思えないのですけど」

「うーん……常識的なところでは初対面なんだけど……」

まどかがそう言つと、さやかがテーブルから身を起こす。

「何それ？ 非常識なところで心当たりがあると？」

「あ、のね……昨夜、あの子と夢の中で逢った、ような……」
自信なさそうに尻すぼみになるまどかの言葉。

さやかと仁美はドリンクを一口飲み——笑った。

仁美はまだ控えめな笑い方だが、さやかはお腹を抱えて爆笑している。

「あっははははははは。まどかまでキャラ立て初めちゃったよ」

「わ、笑いすぎですわ、さやかさん。ふふふ……」

「うっ……言っじゃなかった」

まどかはがつくりと肩を落とす。

「ひどいよ二人とも、私真面目に悩んでるのにい」

「あーごめんごめん。まどか、そりゃアレだ、前世の因果だわ。

二人は結ばれた仲で、時空を越えて巡り合ったんだよ。ぷぷっ」
「んもう、さやかちゃんってば」

自分の言葉にウケているさやかに、まどかが膨れる。

そのとき、時計を見た仁美が言った。

「あら、もうこんな時間……ごめんなさい、お先に失礼しますわ」

「あー習い事だっけ。今日はピアノ？ 日本舞踊？」

「今日はお茶ですの」

「うわあ、お嬢様も大変だ」

「そうだよな。わたしたちも行こっか」

仁美と一緒にまどかたちも席を立ち、トレイを抱える。

「あ、まどか、帰りにCD屋に寄ってもいい？」

「うん、いいよ。また上条君の？」

まどかの問いに、さやかは照れくさそうに笑った。

「へへ。まあね」

「それでは、また」

「じゃあね」

「ばいばーい」

エスカレーターに向かった仁美と別れ、さやかとまどかはCD屋を目指して歩き始めた。

チャリンチャリンと、硬いものが床に落ちる音。

そこは、ちょっとした買った買い物があつて、キリ力が放課後に立ち寄ったコンビニだった。

お金を払おうとして取り出した財布の口が開いていて、硬貨が床に散らばってしまっていた。

キリ力は、床にかがんで小銭を拾い始める。

「とつとしろよなー」

「後ろつかえてるんすけどー」

大学生くらいの男たちがげらげら笑いながらキリカを急かす。

そのとき――

キリカの前に屈んで、手を伸ばした少女がいた。

灰白色の長い髪をサイドポニーに束ねた、翡翠色の目の少女。

彼女は、キリカに何か声をかけるでもなく、ただ、一緒に拾い集めてくれた。

拾い終わって立ち上がってみると、少女はキリカより頭一つ分背が高かった。

ついでに胸も大きくて、キリカよりずっと大人びて見える。

けれど、彼女が着ているのは、お嬢様学校として有名な中学校の制服だった。

つまり、キリカとは同じ年か年下ということになる。

「これで全部かしら？」

「う、うん」

集めた小銭を手渡される。

人に優しくされるのにはなれてなくて、ろくにお礼もいえなかったけど、

少女は優しく笑って、自動ドアの向こうへと去っていった。

キリカは、少女が集めてくれた小銭を、ぎゅっと握り締める。全部興味なんてないはずなのに。

その少女には、惹かれる何かがあった。

薄暗い廊下を、まどかとさやかは歩いていた。

まどかは、不安そうにさやかの袖を掴んでいる。

「ねえ、さやかちゃん」

「何、まどか」

「ここ、どこだろう?」

「奇遇だね」

「え?」

「あたしもそれ言おうとしてた」

一度立ち止まり、周囲を見回す。

CD屋までの道は、迷うようなものではない。

それなのに、いくら歩いてもたどり着かず、道に戻っても非常口さえ見当たらない。

「さやかちゃん、変だよここ。どんどん道が変わっていく」

一歩も動いていないのに、道の方が動いていく。

景色が歪み、壁が、床が、天井が、無秩序な書き割りに置き換わっていく。

工事中の看板に赤信号。茨と鉄条網。それらが渾然一体となつて、何だかわけのわからないことになっている。

絵のタイトルにするなら、狂気。

この世のものとは思えない、狂った光景が、そこに広がっていた。
「あーもう、どうなつてんのさ!」

さやかが声を荒げる。

それに答えたのは、奇妙な歌声。

少なくとも日本語ではなく、意味はわからない。

身を寄せ合う二人の前に、節をつけて歌いながら、声の主が現れる。

それは、カイゼル髭を生やしたバレーボール大の毛玉というしかないものだった。

生き物なのかすらもよくわからない。

極彩色の蝶と一緒に現れた毛玉はどんどん数を増し、まどかたちを包囲して押し包んでくる。

「冗談だよな? 私、悪い夢でも見てるんだよね? ねえ、まどか!」

「わ、わかんないよお!」

震えながら抱き合う二人の足元に、毛玉が擦り寄り――

パン、と乾いた破裂音が響いた。

二度、三度、と連続するそれは、銃声。

そして、続いて響いたのは轟音にも聞こえる一斉射撃の音だった。黄色い弾丸が空から雨のように降り注ぎ、着弾点に上がった炎が消えたときには、不気味な毛玉は全て姿を消していた。

毛玉たちがいなくなるのと同時に、不気味な景色がぐにやりと歪み、普通の通路に変わる。

「あなたたち、危ないところだったわね」

呆然としているまどかとさやかの前に、一人の少女が現れた。

特徴的な黄色い縦ロールの髪型。身にまとっているのは、黄色を基調にした、どこかのウェイトレスのような服。

頭に、黄色い宝石のついた羽飾りと、帽子を載せていて、指抜きグローブをはめた手に、装飾の施された白いマスコット銃を握っている。

「魔女は逃げたみたいね。もう大丈夫よ」

謎の少女がウィンク付きで言った言葉で、ようやくまどかたちは茫然自失から立ち直り、

「こ、コスプレ通り魔？」

「さやかちゃん、それはあんまりだよ……」

命の恩人に向かつてのあんまりな言葉にまどかが肘でさやかを突く。

「そりゃあ物騒なものは持つてるけど、コスプレ通り魔じゃないわよ」

少女はそう言うと、マスコット銃をくるりと回す。

すると、銃は溶けるように消えてしまった。

「私は――」

少女の身体を光が包み、その光が弾けると、少女の服は見滝原中

学の制服に変わっていた。

「うわ、変身した！？ いや、解けた！？」

「^{ともえ}巴 マミ。あなたたちと同じ見滝原中の三年生で、魔法少女よ」

「まほう、しょうじょ……？」

鸚鵡返しに呟いたまどかに、マミは頷く。

「そう。魔女を狩る者よ——彼女もね」

マミが物陰に目を向けると、そこからゆっくりと一人の少女が姿を見せた。

「ほ、ほむら、ちゃん……？」

そこに立っていたのは、話題沸騰中の転校生。暁美ほむらだった。来ている服はマミのものよりは地味で、セーラータイプの制服と言いつれば通じそうではあったが、左腕についている菱型の盾と袖口の紫の宝石がその印象を裏切っている。

そして極め付けに、右手に持っている拳銃——ベレッタM92F。

マミのマスケット銃とは違い、映画やゲームで良く見かける実在の銃だ——が、非日常の存在であることを如実に語っていた。

「ほむらちゃんも、魔法少女、なの？」

「ええ」

と、ほむらは頷き、面白くなさそうな顔で一言付け足した。

「クラスみんなには内緒よ」

次回、第2話「一人で生きる術なら、あたしが教えてやるよ」

第1話「夢の中で逢った、ような……」(後書き)

魔法少女まどか マギカ二次創作、始めました。

原作＋おりこマギカ＋オリジナルキャラ一名による本編再構成ものです。

今回、オリキャラどころか、キュウベえすら出てきませんでしたけど。

別にキュウベえのいない世界というわけでもないの、魔法少女たちのろくでもない世界にお付き合いください。では。

断章1「それができたら苦労しないよ」

見滝原市にある、とある一軒家。玄関の表札には、夜櫛やさかきと書かれている。

その家のリビングで、母親と二人の子供が向き合っていた。二人の子供は共に中学校の一年生。双子なのだ。

二卵性の双子なのだが、子供たちの外見は良く似ている。背中まで伸ばし、首の辺りで無造作にゴムで束ねている髪は銀。瞳の色は赤紫。

顔立ちだけを見ればどっちがどっちかわからないが、制服を見れば一目で見分けられる。

女子用の制服を着ているのが姉の汀みぎわ。
男子用の制服を着ているのが弟の渚なみぎさだ。

「今日成績もらったでしょ？ 見せなさい」

「うん」

「……うん」

母親に言われて、二人は鞆から封筒を取り出す。学校のものではなく、大手予備校が主催している学力テストの結果だ。

渚は特に気負う様子もなく手渡し、汀は苦い顔でしぶしぶ渡した。母親はまず汀の封筒を取り、成績表を取り出した。

満点は百点。並んでいる結果の十の位は『8』か『9』。

全教科平均『87.4』。

非常に優秀な成績だ——これだけなら。

次に口を開けられたのは、渚の封筒。

成績表には『100』が並ぶ。

全教科平均『100』。文句なしの全国一位。

珍しくもない、いつものことだった。

「うん、よしよし、凄いよ」

母親は満足気に頷き、子供を褒める。

「良く頑張ったわね、渚」

渚だけを、褒める。

これもまた、いつものことだった。

母に頭を撫でられながら、渚は汀をちらりと見た。

汀に気を使って、心配しているからの行動。

それがわかっていたから、汀は弟の視線を避けた。

こんなとき、自分がどんな顔をしているかは、わかっているつもりだった。

ひとしきり渚を撫でて満足した母親が、成績表を二人に返す。

汀の成績には一度も触れなかった母親だが、封筒を渡すときに、汀にも一言だけ言った。

「汀も渚を見習って頑張りなさいよ」

「……………」

汀は何も答えず、封筒をひったくるように受け取ると自室のある二階へと上がって行った。

部屋に戻った汀は、成績表をゴミ箱に突っ込み、本棚から漫画を適当に抜き出してベッドに寝転んだ。

制服のスカートが皺になりそうだが、そんなことは知ったことではない。

しばらく漫画を眺めていると、部屋のドアがノックされた。

「姉さん、入っていいかい？」

「……………うん、いいよ」

返事をして、汀はベッドの上に起き上がった。

ベッドの縁に座ってスカートの裾を直していると、ドアを開けて渚が入ってくる。

制服のままの汀と違って、渚は私服に着替えていた。

その服と同じものが汀の衣装ケースにもある。

後で着替えておこうと汀は思った。

「それで、何の用だい？」

「うん、一緒に勉強しようと思ったんだけど」

渚は、持ってきた教科書を掲げて見せる。

「ボクも一緒に頑張るから、次のテストでは一緒に満点取るつよ。そうしたら、母さんだって認めてくれるはず——」

ピリリリ、と無粋な電子音が渚の言葉を遮った。

「あ、ちよつとごめんね」

渚は、ポケットから携帯電話を取り出す。

サッカー部に所属している友人から、電話がかかっていた。

「もしもし？」

『あ、渚。悪いんだけど、今から助っ人に来てくれねーか？』

「え、いや、こっちにも都合があるんだけど」

『そこを何とか！ ゴール運んでたら何人か足潰しちまって、練習試合の人数足りないんだわ』

「そう言われてもね……」

乗り気ではない様子の渚。

彼の中では、友人のピンチヒッターよりも姉と勉強する方が優先順位が上らしい。

「渚」

汀が呼ぶと、渚は相手に断って携帯電話を耳から離れた。

「何だい、姉さん？」

「ボクはいいから、行って来なよ」

「でも、ボクは姉さんと……」

「勉強なら一人でできるよ。でも、そっちは渚がいないと困るんだろっ？」

携帯電話を指差してそう言うと、渚は少し考えてから頷いた。

「わかったよ。ごめんね、姉さん」

「そんなのいいから。頑張つて」

「うん。ありがとう、姉さん」

頷いて、渚は部屋を出て行った。

電話の相手と打ち合わせをしている話し声が、遠くへ行くと渚の声が聞こえなくなるのを確認して、汀は持っていた漫画をドアに投げつけた。

音を立ててぶつかった漫画は、頁を開きながら床に落ちる。「勉強して満点取ったら、なんてね……それができたら苦労しないよ」

今回だって必死に、死に物狂いで勉強した。その結果が、あの成績だった。

「勉強したくらいで全教科満点とれるのなんて、渚くらいなんだよ」結局、そこが天才と凡人の違いなのだ。

テストで満点以外を取るのを見たことがない弟。昔、一度だけ満点じゃなかったことがあったが、それは汀に氣を使つて手を抜いていたとすぐわかって、変なことするなと怒鳴ったものだった。

勉強だけではない。

どこの部活にも入ってないくせに、何かあると今回のように助っ人を頼まれて、しかも結果を出してくる。

さらに、楽器を弾けばコンクールに優勝するような腕前と、漫画の中にもいないような完璧超人なのだ。

幼少期に天才と呼ばれた人間が、大人になるにつれて普通の人間になるとするのは良く聞く話だが、あの弟に関してはそんな未来が想像できない。

いつからだろう。

汀が弟のことを、素直に誇れなくなったのは。

弟が褒められるとき、ただ妬みだけを感じるようになったのは。こんな思考はよくないと思う。

それでも、どうにもならない。

何か一つでも、渚に勝っていることがあれば、こんな風に思わないかもしれないのに。

「渚にできなくて、ボクにできることなんて、ないんだよね……」

ベッドに突っ伏して、不明瞭な声で呟く。

「いいや、あるよ。君の弟にじゃなくて、君にだけ、できること」

「誰!？」

突然聞こえた声に、汀は勢い良く顔を上げた。

いつの間にか、汀のベッドの枕元にぬいぐるみのような白い小動物が座っていた。

強いて言えば猫に似ているが、耳が長く、背中に赤い丸の模様がある。

小動物は、ビー玉のような赤い目で汀を見つめて、小首を傾げる。
「僕の名前はキュウベえ。汀、僕と契約して、魔法少女になってよ!」

断章1「それができたら苦労しないよ」（後書き）

第1話にキユウベえもオリキャラも出てこなかったのも、こちらで補給。顔見せ程度ですが。

オリキャラの名前を出しておかないとサブタイトルが意味不明だったのも。

完璧超人の渚君。これは、最初に書こうとしていた話の主人公の名残です。

そのときはチート仕様の主人公が楽勝でハッピーエンドまで行く話を目指していたのも。

まあ、プロット書いてる途中で諦めましたけど。私にそういう話は書けません。

お払い箱になった渚君には汀のコンプレックスを作るお仕事に回してもらいました。

そんなわけで、万能お助けキャラのいなくなった魔法少女たちには、泣いたり打ちひしがれたりしながら頑張ってもらおうと思います。

第2話「一人で生きる術なら、あたしが教えてやるよ」(前書き)

二次創作で一番面倒なのは、原作知ってる人はみんな知ってることを説明する回だと思います。
では、説明回をどうぞ。

第2話「一人で生きる術なら、あたしが教えてやるよ」

世界の滅びを見た。

大地は瓦礫に覆われ、人工の光は消えうせて。

高層ビルがへし折られ、その残骸が宙に浮かぶ。

天空を覆う曇天の下、巨大な呪いの塊が空に嗤う。

齒車にドレスを着た人形を載せて、逆さまにひっくり返したよう
な――異形。

魔法少女の敵であるもの――魔女。

「街が崩れていく……なんて力」

崩壊を導く魔女を見る、少女が一人。

白いドレスにベールのついた背の高い帽子。

灰白色のロングヘアに翡翠色の目。

白い魔法少女。

「これが私の運命と言うなら、何としても止めてみせるわ」
決意を新たに、宣言する少女。

しかし、それではまだ足りない。

街を滅ぼす魔女では、絶望には足りない。

「あ……ああ……」
彼女は見た。

本当の絶望というものを。

それこそが、世界の終わりなのだ。

あれは、誰にも倒せない。

あれを、解き放つては、いけない。

——どんな手段を、使ったとしても。

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺

第2話「一人で生きる術なら、あたしが教えてやるよ」

簡易照明に薄く照らされた店内改装中の看板。

まどかたちが迷い込んだ異空間は、まともな空間に戻れば改装工事中のフロアだったようだ。

「鹿目まどか、美樹さやか」

「は、はいっ!？」

「な、何だよ、転校生」

冷やかな声で呼ばれて、まどかとさやかはびくりと体を震わせた。

拳銃片手に凄まじいと、物凄く怖い。

「出口はあつちよ。早く帰りなさい」

「ちよ、こういうときって、こう、何か説明とかするもんじゃないの!？」

通路の先を指して言ったほむらに、さやかは食って掛かる。

「その必要はないわ。一般人のあなたたちには知る必要のないことよ」

「でもさ、あんなのがいるって思ったら安心して出歩けないよねえ、まどか」

「う、うん…… ちょっと怖い、かな」

おどおどしながら答えるまどか。

ほむらは、まどかを真っ直ぐに見つめる。

「怯えなくていいわ。あなたは、私が守る」

「ほむらちゃん……」

まどかは、ほむらを見返し、

「いやいやいやいや、そういう問題じゃなくってさあ」

「話すつもりはないと言っているでしょう」

「何よその態度。あーもう頭来た。教えてくれるまで、絶対帰らないからね」

「それなら、あなただけずっとそこにいればいいわ」

「何だとお」

横目でさやかを睨むほむらを、負けじとさやかも睨み返す。

「はいはい、そこまで」

二人のにらみ合いに、マミが割って入った。

「実際に巻き込まれてしまった以上、他人事じゃないものね。ある程度の説明はしてあげるわ」

「バマミ。あなた、無関係な人間を巻き込むつもり？」

「だから、実際に巻き込まれたんだから無関係だとは言えないでしょう。何も知らないことがかえって危険を呼ぶこともあるわ」

「……………いいわ。好きにきなさい」

ほむらは、拳銃を持った盾の裏側に突っ込み———という仕組みになっているのか、拳銃はその部分に収納された——腕を組んで壁に寄りかかった。

話す気はなさそうだが、立ち去るつもりもないようだ。

「それじゃあ、話す前に自己紹介してもらっていいかしら。さっきも言ったけど、私はバマミ。マミって呼んで」

「んじゃ、マミさんだ。あたしは、美樹さやか。で、こっちが」

「鹿目まどかです。えっと、二年生で」

「あたしの嫁なのだ」

「もお、さやかちゃん。こんなときに何言ってるの」

「ふふ、仲がいいのね。それで、貴女は？」

「……………曉美ほむらよ」

「見たことのない魔法少女だけど、新人の魔法少女なの？」

「いいえ」

マミの問いにほむらは首を横に振る。

「もう随分、戦っているわ」

「マミさん。ほむらちゃんも転校生なんです」

「ああ、あの噂の。暁美さんのことだったのね」

言葉少ないほむらにまどかがフォローを入れ、マミは納得したように頷いた。

「それじゃあ説明を始めるわね。えーと、何から話そうかしら」

「じゃあ、魔法少女とか魔女って何なのか知りたいです」

さやかが手を真っ直ぐに挙げて質問する。

「そうね、そこから説明しましょうか。二人とも、これを見てくれる？」

そう言つて、マミは二人の前に手を差し出す。

掌の上には、ちょうど握れるくらいの大きさの、卵形をした黄色い宝石が載っていた。

それを見て、まどかが目を輝かせる。

「わあ、綺麗」

「これはソウルジェム。魔法少女の力——魔力の源であり、契約の証でもあるわ」

「それじゃあ、ほむらちゃんも持つてるの？ ソウルジェム」

「ええ」

ほむらは服の左袖についていた宝石を取る。

魔法少女の衣服が光になって解けると、それはマミのソウルジェムと似た形の紫色の宝石になっていた。

ソウルジェムは、魔法少女に変身している間は形を変えて衣装についているのだ。マミの場合は、髪飾りになっている。

「その契約ってのは？」

そう聞いたのはさやかだ。

「私たち魔法少女は、みんなキュウベえっていう子と契約を交わしているの」

「九兵衛……？」

きょとんと首を傾げるまどか。

頭の中には、何故か日本刀を構えた屈強な侍の姿が浮かんでいる。
「鹿目まどか。あなたが何を考えてるか知らないけど、多分それは全く違うわ」

「ふえ！？」

ほむらに突っ込まれ、まどかは頭の上でぶんぶんと手を振って、
『九兵衛』のイメージをかき消す。

その様子を、マミとさやかが不思議そうに見ていた。

「キュウベえは、どんな願いでも一つだけ叶えてくれる。

そして、その見返りとして、私たちはソウルジェムを生み出し、
魔女との戦いを課されるの」

「どんな願いでもって、どんな願いでも？ 金銀財宝とか、不老不死とか、満漢全席とか！？」

「いや、最後のはちよつと……違うような」

「だって、何でもだよ！？ あー、でも、そしたら魔女つてのと戦わないといけないのか」

「そうなるわね」

「マミさん。その、魔女って何なんですか？」

と、まどか。

「魔女というのは、呪いから生まれて、絶望を撒き散らす存在よ。
不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみ、そういう呪いを世界にもたらしている、自殺や殺人事件の原因になったりするの」

「そんなヤバイ奴らがいるのに、どうして誰も気付かないの？」

「魔女は結界という異空間に潜んでいて、人前には姿を現さないのよ」

「結界って、さっきあたしとまどかが迷い込んだヤツ？」

「そうよ。あれに飲み込まれた人間は、普通は生きて帰れない」

「わたしたち、本当に危ないところだったんですね……。マミさん、助けてくれてありがとうございます」

「いいのよ。それに、私がいなくても、暁美さんが助けていたでしょうしね」

「ほむらちゃんが？」

「マミがほむらに視線を送り、黙って立っていたほむらに注目が集まる。」

「ええ。彼女、私より先に撃つてたわよ」

「そうだったんだ……。ほむらちゃん、ありがとう」

「礼には及ばないわ。私は、私のなすべきことをしただけよ」

「うわー、クールだねえ。でもま、助けてくれたんでしょ？　ありがとね」

「……もう話は終わってたでしょう。私は行くわ」

ほむらは長い髪をかき上げて、踵を返す。

そこに、マミが声をかけた。

「あら、もう行くの？　せっかく魔法少女同士なんだからもつと仲良くしようよ」

「馴れ合うのはもう止めたのよ。だいたい、魔法少女同士からと言って、味方だとは限らないわ」

そう言い残して、ほむらは通路の先へと消えて行った。

見えなくなつた後ろ姿を追いながら、まどかが呟く。

「行っちゃった……」

「仕方ないわ。彼女の言っていたことも、あながち間違いではないから」

「魔法少女って味方じゃないんですか？」

「それがね、」

と、マミは少し困った顔になる。

「魔女を倒すとそれなりの見返りがあるの。でも、魔女の数は限られているから、手柄の取り合いで衝突することがあるのよ。」

だから、大抵の魔法少女はそれぞれの管轄する場所で魔女退治を行うの。ルールがあるわけじゃないんだけど、不文律みたいなものね」

「じゃあ、マミさんと転校生がカチ合うつてことも……」

「私は、できれば仲良くしたいと思ってるけど……」

今までのところ、ほむらはとても友好的には見えない。

「そんな……」

マミとほむら。二人が争う様子を想像したのか、まどかの表情が陰る。

それを見て、マミは笑顔を作って明るい声を出した。

「大丈夫。私、これでもベテランなんだから、上手くやるわ」

話を終えて、三人はショッピングモールの前で解散した。

夕焼けの空の下を、まどかとさやかが並んで歩いて行く。

途中でまどかが一度振り返り、マミが手を振ると、ぺこりと頭を下げて先に行っているさやかを追いかけた。

それを待っていたかのように、

「バマミ」

ほむらがマミの前に姿を見せた。

「暁美さん……グリーフシードの取り分を相談にでも来たの？」

「聞きたい事があるのよ。キュウベえはあなたと一緒にではなかったの？」

「キュウベえ？ ええ。確かにキュウベえは大切なお友達だけど、今はいないわ」

「いない？」

「魔法少女になる女の子を教えて貰うから、しばらく空けるって言うってたわね。」

魔法少女の資質を見ることができるようなのはキュウベえだけのはずなのに、こういうことなのかしら？」

「さあ。アレの考えていることになんて興味はないわ」

「そ、そう……。あ、キュウベえに会いたいんだつたら——」
「会いたくなんてないわ」

マミの台詞を遮って、ほむらは冷たく吐き捨てた。

「いないのなら余計な手間が省けて助かるくらいよ」

「手間？」

マミが聞き返すが、ほむらは何も答えず、薄笑いを浮かべながら踵を返した。

そして今度こそ、マミの前から去って行った。

「暁美ほむら……随分と、危険そうな子が来たものね」

去り際にほむらの浮かべた酷薄な表情にぞっとするものを感じながら、マミは呟いた。

理由はわからないが、ほむらはキュウベえに対して敵意を持っているように感じられた。

キュウベえがここにいないくて良かった。

ほっと胸を撫で下ろしながら、それにしても、と思う。

（キュウベえが契約しようとしているのは、どんな子なのかしら）

夕暮れの時間。薄暗くなった黄昏時を、逢魔が時という。

おおまがとき

大禍時から転じた言葉だそうだが、魔に逢う時間とは、妙に的を射ている。

きつと、その言葉が生まれたずっと大昔にも——魔女は存在したのだろう。

炎に似た、赤が踊る。

夕闇よりも黒いリボンで、夕焼けよりも赤い髪を束ねたポニーテールの少女。

身にまとったのはノースリーブのワンピースに似た紅の装束。胸元には赤いソウルジェムが輝いている。

地に伏した、目玉の怪物のような魔女を見下ろす瞳は赤。

戦いの最中だと言うのに、棒付きキャンディを咥えている口元には鋭い八重歯が覗いていた。

「終わりだよ」

赤い魔法少女は、手に持った身の丈を越える槍の上下をくるりと変えて、十字架の切っ先を魔女に沈めた。

血のような体液を吹き出して、魔女が命を終える。

カラン、とぐずぐずに崩れていく魔女の体から、何かが転がり落ちた。

それは、掌に載るくらい——ソウルジェムと同じくらいの大きさの球体で、上下に突起が突き出ている。

ピックにミートボールを刺して黒く塗り潰したものを想像すれば、見た目のイメージとしては正しい。

ただ、その有している禍々しい雰囲気は比するものではないのだが。

赤い魔法少女は、つま先で器用にそれを蹴り上げ、空中で掴み取った。

「一丁あがりつと」

変身を解き、水色のパーカーにデニムのショートパンツという私服姿に変わる。

同時に、畸形の花が咲き乱れていた結界が揺らぎ、消え去った。

——その内に、魔女の犠牲者である一組の男女を抱え込んだまま、両親を殺された、一人の幼い少女を置き去りにして。

その少女——見た目は小学校低学年か、それにも届かないくらい。緑色をしたセミショートの髪に黄色いボンボンをつけて、深緑のワンピースを着ている——は、タイルの張られた地面に座り込み、さつきまで擦じ切られ、引き千切られた人間の残骸があつた場所を見つめていた。

もしかしたら、そこに目を向けているだけで、何も見ていないのかもしれない。

「おい、ガキ。災難だったね。でも、現実なんてこんなもんさ」
赤毛の少女が、彼女に声をかける。

が、その言葉には、両親を喪つたばかりの少女にかけるには、思

いやりとか、そういう類のものが欠けていた。

「震えたって泣いたって、死んだ両親は帰ってこないよ。生き残った幸運に感謝するんだね」

「……………」

幼女は、かけられた言葉にも全く無反応。聞いているのかさえ怪しい。

「フン」

赤毛の少女は、キャンディを咥え直し、少女に背を向けた。

けれど――

おねえちゃん、とそう呼んだのは、誰だっただろう。

少女は、赤い瞳を細める。

過ぎ去った時間を、懐かしむように。

そのいつかを、悲しむように。

「そんな顔したって、誰も助けちゃくれないよ」

立ち去るはずの足は振り向いて、座り込んだ少女の後ろに立っていた。

口からキャンディを抜き、頭上から目の前に突き出してやる。

果たして、数秒の間をおいて、少女はそれを『見た』。

飴から、それを持っている手に、そこから腕に。

最後に赤毛の少女の顔まで辿り、背を反らし過ぎてひっくり返った。

「あぐ、はぐはぐ、もぐ、もぎゅもぎゅ」

少女と幼女は並んでベンチに座っていた。

幼女の方は、少女が調達してきたハンバーガーを凄い勢いで齧っている。

「いいか、お前、それ食ったらどっか行けよ」

赤毛の少女がジュースの缶を片手に言うが、幼女は食べるのに夢中だ。

「うぐっ」

拳句の果てに喉に詰まらせていた。

「何やってんのさ。ったく、しょうがないな……」

缶を渡してやると、ジュースで食べ物を流し込み、また食べ始める。

「お前がつつきすぎだろ。ちゃんと飯食ってるのかよ」

呆れた声を聞きながら、幼女はまたジュースを飲み、ふと、その飲み口に目を留めた。

影はどこにでもあつて、高々二十センチの缶の底さえ、見通せない。

何が悪かったのかと言えば、結局のところ、運とかそういうものだ。

あるいは、間であるとか。魔、であるとか。

その結界は、畸形の花と、牙の生えた鳶でできていた。

「すごい。へんなお花が咲いてるー」

彼女は、その空間の異常性を理解できず、目下の懸念事項は、両親とはぐれてしまったことだった。

「パパとママはどこだろ……」

きよろきよろと、周りを見回しながら、結界の中を歩いていく。と、背後から、何かを引きずるような音がした。

「ママ？」

無邪気に、振り返った少女が見たのは、変わり果てた母の姿だった。

腰から下はどこかになくなり、腕だけで這いずって来てできた血の跡が延々と続いている。

変形して血まみれになった顔の空洞から、悲鳴のような音が響いた。

「いひ……ひいいいい……たす、たすけ……」

ソレが、手を伸ばす。

ソレはもう、母親ではなく、彼女にとって恐怖でしかなかった。

目を見開いて、手から逃れようとして、
『なんで お前だけ 生き残

「お前の両親を殺したのは――」

赤毛の少女の言葉に、幼女ははっとして我に返った。

怪物はもういない。赤い少女が、ソレを倒した。

「魔女っていう化けモンさ」

「まじよ……？」

「そう、魔女だ。それであたしは、それと戦う、魔法少女ってやつ」

「まほう……！？」

驚きを露にする幼女。

魔女とか、魔法とか。それが、実在しないことは知っていた。

実際のところ、実在しないことになっていただけだと、思い知らされたのだけだ。

「まるで漫画みたいだろ？ でも、漫画みたいに愛と勇氣に溢れているわけでも、救いがあるわけでもない」

そう言って、少女は、幼女の手から食べ終わったハンバーガーの包みを引き取る。

包み紙にくつついていたパン屑を指で掬い取って舐め取り、包み紙を折り畳んだ。

「居なくなっちゃった家族も戻ってきやしない。だから、お前はこれから一人で」

「……ゆま」

言葉の途中で、少女が言った。

「『お前』じゃなくて、ゆま」

唐突に名乗った幼女――ゆまは、そのまま言葉を重ねる。

「おねえちゃんは正義の味方なの？」

「は？ そんないいモンじゃねえよ」

心外だと言わんばかりに答える少女。

それを聞いたゆまは、ベンチから飛び降り、自分の顔を指差しな

がら言った。

「じゃあ、わたしも戦えるかな」

「はあ？」

「わたしも魔法少女になって、魔女と戦いたい！」

ゆまがそう言った瞬間、少女は顔を歪めた。

噛み締めた歯が、ぎり、と鳴る。

「くだらないこと言ってんじゃねえよ……！」

ゆまの顔を見据え、睨みつける少女。

見られただけで萎縮してしまいそうな迫力があつた、が、ゆまはそれに激しく言い返す。

「だって、パパもママも死んじゃったんだもん！　わたしもう、どこにも行くとこないもん！」

ねえ！　どうしたら魔法少女になれるの！？　わたし、何だってやるよ！」

「……甘ったれるな」

いっそ静かに言い放って、少女はベンチから立ち上がった。

「文字通り命がけなんだよ」

言いながら、ゆまの横を通り過ぎる。

「同じ命を賭けるなら、真っ直ぐ生きること賭けな」

少女が去っていく。

彼女はゆまを見なかった。ゆまにももう、彼女は見えない。

背中を向け合って、もう二度と交わることのない道を歩かなければならない。

食べたらどこかへ行けと言った言葉のままに。

それまでの、短い関係のつもりだったのだから。

けれど――

それでも、少女に足を止めさせたのは、涙の混ざったゆまの言葉だった。

「でも……だって……わたしひとりじゃ……」

目に浮かんだ涙は、もうこぼれようとしているのに、それに必死に耐えながら、少女に伝えてくる。

「だって、だって……わたし……」

「……ったく、しょーがないガキだね」

嘆息して、少女はガシガシと髪をかき回した。
背負い込むのは厄介ごとだ。

そんなことは、わかっているけれど、

「いいか、よく聞け」

くるりと振り返り、ゆまに指を突きつけた。

「あたしは『おねえちゃん』じゃない。佐倉 杏子だ」

「キョーコ？」

「ああ」

赤の魔法少女——杏子は、片目を瞑って頷いた。

「一人で生きる術なら、あたしが教えてやるよ」

見滝原市にある駅の構内。帰宅中の大勢の乗客に紛れて、一人の少女の姿があった。

灰白の髪に翡翠の瞳。

白の魔法少女でもある少女。

彼女の肩の上には、変わった小動物が乗っていた。

猫くらいの大きさで、真ん丸の赤い目と金色の輪がはまった長い耳を持つ白い動物。

彼——性別が不明のため、便宜上ではあるが——こそが、キュウベえ。

少女の願いを叶え、魔法少女を生み出す、契約の獣。

『織莉子』

少女の頭の中に、直接キュウベえの声が響く。

キュウベえは、肉声を使うこともできるが、テレパシーによって声に頼らずとも会話することができるのだ。

『どうしたの、キュウベえ？』

『君の言う、いい魔法少女の素体とは、いつになったら会えるんだい？』

『焦らないで、キュウベえ。会えないということは、まだ、会う時間ではないと言うことよ。それとも、あなたは私が信じられない？』

『まさか！ 信じているから、僕はこうしてここにいるんじゃないか』

『そうね』

と、思念を返して、少女は柔らかな笑みを浮かべた。

『では、待ちましょう。私たちが出会うべき、その時を』

その夜。

ベッドに入ったまどかは、中々寝付けないでいた。

目を閉じるとすぐ、瞼の裏に結界の中で起きた出来事が浮かんでくる。

恐いのではない。

むしろ、ドキドキしていた。

まどかのピンチに颯爽と現れて、瞬く間に怪物を倒してしまった、魔法少女。

巴ミミ。

まどかの一学年年上の先輩だけれど、とても一つしか変わらないとは思えない、大人っぽい少女。

（かつこよかったなあ、ミミさん。それに、みんなのために悪い魔女と戦うなんて、とっても素敵）

魔法とか魔法少女とか、常識の外にある得体の知れない力ではあるけれど。

それに憧れる。

（わたしも魔法少女になったら、あんな風になれるのかな……）

魔法少女になって、

それで、もし、何の取柄とりえもない自分なんかでも、誰かの役に立てるのだとしたら。

（それは、とっても嬉しいな——）

もしも魔法少女になれるなら、どんな風になるだろう。

衣装は？ 武器は？

まどかは、そんな空想に耽りながら、ゆっくりと、眠りに落ちていった。

次回、第3話「愛を込めてね！」

第2話「一人で生きる術なら、あたしが教えてやるよ」(後書き)

実は、さやかってマミさんに対して敬語じゃないんですね。後輩なのに。

ショッピングモールで別れた後、わざわざほむらがマミを待っていたのは、

キュウベえのことを聞くのを忘れていたからです。

…… 作者が質問させ忘れてました。

杏子の槍もコミック版仕様のクロススパ。

おりこマギカではゆまの両親の死体が残ってたんですが、原作で、結界の中で死ねば死体も残らないとほむらが言ってたので、そちらにあわせて消しておきました。

ゆまの苗字は、千歳。おりこ本編では一度もでてこなかった気がする。

第3話「愛を込めてね！」

逢いたい――

呉キリ力は、街を彷徨っていた。

時間は平日の朝。

一応制服を着てはいるが、学校に行くつもりはなかった。

元々さぼりがちだったのだ。今更少しくらい欠席が増えようと、気にしたことではない。

探しているのだ。あの日、コンビニで出会った彼女を。

何故なのかは、自分でもわからなかった。

いや、わかっているけれど、それに気づかないフリをしている気もする。

あるとき、彼女が着ていた制服は有名だから、どこの学校に通っているかはすぐにわかった。

本当に会いたいのなら、それこそ学校の校門でも待ち伏せているのが一番効率がいい。

けれど、キリ力はそれを選ばず、ただ、当てもなく足を動かしていた。

それは多分、勇気がないから。

もう一度会って、どうするのか、どうしたいのか、どうすればいいのか、それがわからないから。

それでも、諦めることだけはしたくなくて、奇跡みたいな偶然が起きるのを待って、彷徨い続ける。

キリ力は、あの少女に――愛たい。

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺

第3話「愛を込めてね！」

まどか、さやか、仁美の三人は、いつものように一緒に登校した。教室に入ると、最前列にある席の一つに、クラスメイトが集まっていた。

ほむらの席である。

転入してから数日経ったが、彼女の人気はまだ衰えていないらしい。

まどかの席は後方よりの真ん中辺り。

まどかが自分の机に向かっていると、ふと、背後から視線を感じた。

振り向くと、机を囲んでいる生徒たちの間から、ほむらがじっと見つめていた。

（ま、また見られてるよ……）

まどかはぎくしゃくと机に向かい、スクールバッグを置いて椅子に座る。

もう一度ほむらの方を見ると、ほむらは既に前を向いていた。

実はこれ、最近毎朝の光景である。

「不思議な雰囲気の人ですね、曉美さん」

さやかと一緒にまどかの席までやってきた仁美が言う。

「不思議ちゃんって言うか、魔法……」

「魔法？」

「え、あー、なんでもないなんでもない。あはは……」

すっかり魔法少女と言いかけたさやかが、適当に笑って誤魔化す。それを聞きながら、まどかはぐったりと机に突っ伏した。

「わたし、ほむらちゃんが何を考えてるのか、ぜんぜんわかんないよ……」

「――で、今まで勉強してきたみたいなの、動作を行う人や物を主語にした表現は能動態と呼ばれます」

和子が行う英語の授業中。

まどかは、カリカリとノートにペンを走らせていた。

教科書を片手に授業進めていた和子は、それに目を留め、

「鹿目さん？　かーなーめーさん？」

「は、はい！？」

「今はノートをとることはないでしょう？　ちゃんど、先生の話
を聞いてください」

「あ……す、すみません……」

まどかは、小さくなって、ノートを捲った。

和子の授業の後は、昼休みだ。

「まーどかつ」

「うひゃあ！」

休み時間になるなり、さやかがまどかの席にやってきて、まどかの背中に抱きついた。

「さっきの時間、怒られてたでしょ。何書いてたの？　宿題？」

「え、と、宿題じゃ、ないんだけど……」

「じゃあ何だー？　見せろー！」

「わ、さやかちゃん、ダメだって！」

まどかの手から、さやかがノートを奪い取る。

取り返そうとするまどかの手をひいひいひいと避けながらノートを開き、そこに描かれていたものの意外さに固まった。

その隙に、まどかがノートを奪い返し、胸元に掻き抱く。

「み、見た？」

恐る恐る、まどかがさやかに聞く。

「ぶ……くく、まどか、あんたやっぱサイコーだわ」

さやかの漏らす忍び笑いが、その返事だった。

「こんなの描いてるってことはさあ」

場所は屋上。仁美には遠慮してもらって、まどかとさやかの二人きり。

二人の間には、まどかのノートが置かれている。

開かれているページには、デフォルメされたまどかが、フリフリでヒラヒラの衣装を着て弓を構えている絵だった。

言わずもがな、魔法少女の衣装（妄想）である。

「まどかは魔法少女になりたいの？」

「うん……。魔法少女になったら、みんなの役に立てるかなって」

「へー、そっかあ」

さやかは、頭の後ろで手を組んで、空を見上げた。

「じゃあ、願い事は？ 何かある？」

「ううん、そっちは決まってるない」

まどかが首を振りながら答える。

さやかは、空から視線を下ろして、まどかを見た。

「やっぱ、まどかはいい子だね」

「ええ！？ 何で？」

「だって、願いごとがないのに、魔法少女になりたいんでしょ？」

あたしなんて、何を叶えてもらおうかって、そればかり考えたもん」

「あ、さやかちゃんも考えたことあるんだ」

「そりゃ考えるよ。欲しいものとか、やりたいこととかいっぱいあるし。」

でも、命がけの戦いと引き換えにしてまでって言われちゃうとね……」

さやかは、屋上の端にあるフェンスに歩み寄り、フェンスに指をかけた。

キィと、フェンスが軋んだ音を立てる。

「願い事が決まらないのって、多分、バカだからなんだよ」

「バカ？」

「そ、幸せバカ。別に珍しくなんかないはずだよ。命と引き換えに
してでも、叶えたい望みって。そう言うの抱えている人は、世の中
に大勢いるんじゃないのかな。」

だから、それが見付からないのって、その程度の不幸しか知らな
いって事じゃん。恵まれ過ぎてバカになっちゃってるんだよ」

さやかは、フェンスに額を預けた。

フェンスの網目の隙間からは、見滝原市を望むことができる。

さやかは、その光景の中にいる誰かに、想いを馳せていた。

「だから、あたしが望んじやいけないのかもね。こーゆーチャンス、
本当に欲しいと思っている人は他にいるはずなんだし」

「……うん、そうかも」

普段おちゃらかしていることの多い、さやかの珍しく真面目な言
葉にまどかは頷いた。

そのとき、

「ちょっといいかしら」

靴音を立てて、ほむらが屋上に上がってきた。

「ほ、ほむらちゃん!？」

まどかは、慌ててノートを伏せる。

ほむらは二人に歩み寄りながら伏せられたノートを一瞥し、見な
くても中身は知っているとばかりに、その話題を口に出した。

「鹿目まどか。私が転校してきた日の話、覚えてる？」

「う、うん。……あ」

まどかは頷く。

違う自分になることを、望んではいけない。変わってはいけない。
ほむらは、そう、まどかに言った。

「もしかして、あれって魔法少女のこと……？」

「そうよ」

「どうして? どうして魔法少女になっちゃいけないの?」

「それも、言ったはずよ。全てを、失うことになるって」

「ちょっと転校生、それってどういう意味？」

と、さやかが横から口を出す。

ほむらは、まどかからさやかに視線を動かし、

「それを知る必要はないわ。ただ、私の言葉を覚えておいて。

鹿目まどか。それに、美樹さやかも。忠告が無駄にならないことを祈っているわ」

ほむらはそう言うと、髪を翻して去っていくとする。まどかは、その背中に「待って」と声を上げた。

ほむらは足を止めなかったが、構わずに続ける。

「ほむらちゃんは……どんな願い事をして魔法少女になったの？」

聞いた瞬間、ほむらはぴたりと足を止めた。

肩越しに振り向いた紫紺の瞳が、まどかの目を射抜く。

だが、ほむらは結局何も語らないまま、屋上を出て行った。

「なんなんだ？ あいつ……」

さやかの声だけが、屋上に空しく響いた。

その日の放課後。

巴マミは、一人、街を歩いていた。

掌にソウルジェムを載せていて、ソウルジェムは弱弱しく明滅していた。

今、ソウルジェムが果たしている役割は、リーダー。

まどかたちが遭遇した魔女の残した魔力を追っているのだ。

ソウルジェムの反応が大きくなるところに、魔女は結界を張って潜んでいる。

そこまでは、自分の足で歩き回って探すしかなかった。

ただし、全く手がかりがないというわけでもない。

魔女の呪いの影響で多く発生するのは、交通事故や傷害事件。

そのため、大きな道路や喧嘩が起きそうな歓楽街がまず候補に挙

がる。

他に候補に挙がるのは、自殺に向いていそうな人気のない場所だ。マミは、後者を狙って、街の寂れた方へと足を進めていた。

「あ……」

ソウルジェムの光が、不意に強くなる。

「かなり強い反応……この近くね」

マミはその反応を頼りに、足を速めた。

町外れにある、無人の廃ビルに、一人の女性が入っていった。

服装からすると、どこかの事務員か何かのようで、とてもこんな場所に用があるようには見えない。

彼女は、ふらふらと覚束ない足取りで廃ビルの奥へと進み、階段を見つけては上がっていく。

そして、たどり着いたのは、夕日に照らされた屋上だった。

ヒールを揃えて脱ぎ、屋上に張り巡らされたフェンスを登って乗り越える。

屋上の縁から見下ろすと、遥かに遠い。落ちればまず助からないだろう。

しかし、その女性は、全く躊躇することなく空中へと身を躍らせた。

「廃ビル……間違いない、ここね」

ソウルジェムの輝きに導かれて、廃ビルまでやってきたマミ。

全景を見ようとして上を仰ぎ見る、と、逆光になったビルの上から、黒い点が落ちてくる。

いや、それは、点ではなく

「——人!？」

確認した瞬間、マミはその落下点へと駆け出した。

走るマミの体を光が包み込み、魔法少女の姿へと変身する。

マミが落ちてくる人影に向かって手を伸ばすと、空中に十本ほど

の光のリボンが張り巡らされた。

魔女と戦う魔法少女の武器は、当然魔法だ。

魔法少女は、契約の願いによって、それぞれが特有の魔法を持っている。

後天的に他の魔法を身に着けることもできるのだが、やはり、最初の願いに応じた魔法は強力であり、各々の魔法少女を象徴するものと言えるだろう。

マミの願いから生まれた魔法は、リボンを用いて結びつけるというもの。

普段は拘束魔法として使われるが、やり方によっては別の用途にも用いることができる。

魔力のリボンが網のような役割を果たし、落ちてきた女性を優しく受け止める。

女性をゆつくりと地面に降ろし、役目を果たしたりリボンは消滅した。

マミは、横えた女性の様子を確認する。

目を閉じてぐったりとしているが、どうやら気を失っているだけのようなのだ。

その女性の首筋には、赤い蝶のような痣が浮かんでいた。

「口付け……やっぱり、魔女のせいね」

と、マミが呟く。

その痣は、魔女の口付けと呼ばれるもので、魔女の標的となり、影響を受けていることの証拠だ。

ちなみに、この痣の形は、魔女によって異なっている。

「急がないと……」

マミは、一丁のマスケット銃を作り出して、廃ビルの中へと駆け込んでいった。

ビルの中に入ると、マミは髪に飾ったソウルジェムに指先で触れる。

すると、ソウルジェムが光を放ち、マミの前にある階段の上に、

魔女の口付けと同じ形の紋章が浮かんだ円形の扉ができた。

魔女が潜む異空間、結界の入り口だ。

実は、魔女そのものは、魔法がなくても普通の武器で倒すことができるのだが、外部から結界の入り口を開けることは魔法少女にできない。

それゆえに、魔女を倒せるのは魔法少女だけなのだ。

「今度は逃がさないわよ」

そう言うと、マミは結界の中へと飛び込んだ。

魔女の結界は、発生している地点の現実空間にあるものを取り込む形で形成されている。

前回は工事中のフロアだったが、今回はビルの中。結界の中も、それに応じて形を変えていた。

もっとも、魔女の結界に取り込まれた時点で、歪んだり薔薇が生えたりしていて、とても現実のビルと同じ場所とは思えないのだが、結界の中には魔女の配下である使い魔が蠢いていて、魔女から与えられた役割を果たしている。

遠くの方では、先日見た髭毛玉の使い魔が、鋏で薔薇を切り取ってはどこかへと運搬していた。

ふわりと、それとは別の使い魔がマミの前に飛んでくる。

胴体に六つの目とカイゼル髭を持つ、人の頭ほどの大きさがある蝶のような使い魔だ。

その使い魔は、六つもある目でマミを見止めると、リンリンと鈴のような音を鳴らした。

警戒の役割を持つ使い魔だ。さしずめ、動く警報装置ということだろうか。

マミは、マスケット銃を構えて、銃撃。一発で使い魔を仕留める。だが、使い魔は後から後から湧き出して、マミの前に現れる。

マスケット銃は先込め式、つまり、銃口から弾丸や炸薬を入れるという装填方法の銃であるため、連射ができない。

マミは使い終わった銃でちょうど目の前に来た使い魔を殴り飛ば

し、そのまま投げ捨てた。

さらに、新しいマスケットを召喚し、撃ち終わるやそれも躊躇なく捨てる。

単発という欠点を数で扱って戦うのが、マミの戦闘スタイルなのだ。

使い魔を撃ち、殴り、ときに蹴りながら、魔女の潜む最深部へと走る。

やがて、マミは他より豪華な装飾が施されたドアの前にたどり着いた。

「ここね」

同時に六丁のマスケット銃を作り出し、一斉に射撃。マミの銃は、彼女の思惟によって、自在に撃ち出せる。

扉の前に集まっていた毛玉の使い魔がまとめて穴開きにされ、魔女への通路が開いた。

ドアの先には円形のドームがあり、その中心にそれはいた。床に敷き詰められた薔薇の花の上に馬鹿でかい椅子を置き、その上に座っている。

その見た目は、現実に存在するいかなる生物とも違う。

全高が十メートルもありそうなところに目を瞑れば、全体としてのシルエットは人に似ていると言えなくもない。

しかし、一つ一つのパーツの不気味さが、その印象を打ち消して余りある。

緑色の苔を髪の毛のように垂らし、その上に薔薇の花を飾った頭。そこから続く胴体は生白く、スカートのように皮膚が垂れ下がっている。

背中には蝶の翅が生えており、足の部分は無数の触手からできていた。

この怪物こそ、結界の主。薔薇園の魔女である。

使い魔が役割を持つように、魔女は性質を持つ。

薔薇園の魔女の性質は、不信。

結界の中に咲く薔薇だけを信じ、何よりも大切にしている魔女。彼女が育てる薔薇の栄養分は、人間から奪う生命力だ。

マミは、ドームの中に踏み込み、足元でふよふよ飛んでいた使い魔——ミニサイズの警戒の使い魔。目も三つしかない——を一匹踏み潰した。

その瞬間、薔薇園の魔女はびくんと頭を震わせ、頭を巡らせてマミを見る。

マミはスカートの裾を掴み上げて挨拶。するのと同時に、スカートの中からマスケット銃が落ちてくる。

薔薇園の魔女は下半身の触手で座っていた椅子を持ち上げ、マミへと放り投げた。

自分の体の何倍もある椅子を、マミは後方へ飛び退いて躲し、両手の銃で撃ち壊した。

その間に、薔薇園の魔女は壁に飛びつき、壁を駆け回る。

マミは、地面に二十丁を超える銃を突き立て、魔女へと連射。

魔女はその巨体からすれば意外な敏捷さで銃撃を回避し、壁に次々に弾痕が穿たれた。

撃ち終わった銃を捨て、新しいものを取ったところで、マミは足元に群がっていた小さな使い魔に気づいた。

使い魔たちは足からマミの体に這い上がり、薔薇の蔓に姿を変えた。

足からお腹辺りまで蔦が絡みつき、マミの体を持ち上げる。

「っ、この！」

吊り上げられながら、マミは銃を撃つ。

その弾は床に穴を開けただけに終わり、薔薇園の魔女が逆さ吊りにされたマミにじり寄った。

しかし、マミの表情にはまだ余裕がある。

「余所見をされていていいの？」

その声と共に、床に撃ち込まれた外れ弾から黄色いリボンが伸びる。

大切な薔薇を荒らしながら伸びたりリボンは、魔女に巻きついて縛り上げた。

「惜しかったわね」

マミは襟のリボンを解いて、それを投げる。

リボンは空中に浮かび上がってマミを捕らえていた蔓を切断した。自由になったマミは、落下しながら新しい武器を作り出す。

現れたのは、口径がマミの身長の上にもある巨大な大砲だった。

それは、マミが持つ中で、最も高い攻撃力を持つ魔法。

「ティロ・ファイナーレ！」

大砲の口から光の束が撃ち放たれ、薔薇園の魔女を撃ち抜く。薔薇園の魔女は、身震いしながら光に変わり、消えて行った。

魔女がいなくなったことで結界も消滅し、元のビルの中に戻る。廊下の少し離れた場所には、黒い、魔女の落し物が落ちていた。

マミは、歩み寄ってそれを拾い上げる。

こうして、一人の魔女がその命を終えた。

『織莉子。君の魔法は便利だけど、全知とまではいかないようだね』

夜の、駅構内。

キュウベエの思念が、織莉子の頭の中に響いた。

肩に乗っていたキュウベエが、床に飛び降りる。

『先に帰っててよ。ちよつとやる事ができたからね』

『キュウベエ？』

織莉子に伝えると、キュウベエは尻尾を揺らしながら人波の中に消えていった。

呼び止める暇もなく去られ、織莉子は引きとめかけたポーズで固まっていたが、すぐに気がついて姿勢を正した。

キウウベえが何をしに行ったのかはわからないが、ここで立ち止まっても仕方がない。

乗ろうとしていた電車は、もうすぐ出てしまう。

織莉子は一人で改札を通り、電車に乗り込んだ。

電車の中は込んでいたため、織莉子は手すりを掴んでドアの前に立った。

「間もなく発車します。閉まるドアにお気をつけください」

定型の放送のあと、発車のベルが鳴る。

ドアが左右から閉まり――

「ちよつと待ったー！」

誰かが、閉まりかけているドアの間に手を突っ込んだ。

安全装置が作動して、ドアが開く。

開いたドアの先には黒髪の少女が立っていて、電車に一步踏み込み、織莉子を電車から引つ張り出した。

織莉子の背中で改めてドアが閉まり、電車がホームを出て行く。

「貴女、何を」

織莉子が言いかけた言葉の途中で、その少女が織莉子の顔にぐつと自分の顔を近づけて来て、織莉子は思わず言葉を呑んだ。

至近で見た橙色の瞳は、キラキラと輝いている。

「ねえ、私のこと、覚えてる？」

「え……」

聞かれて、織莉子は自分の記憶を辿る。

ひっくり返すまでもなく、その記憶は上の方に眠っていた。

何日か前に、コンビニでお金を拾うのを手伝ってあげた女の子だった。

「貴女は、コンビニの……」

「そう！ そうだよ！ 私は呉キリカ。君は、私の恩人なんだ」

「そんな……あのくらのことで、大げさだわ」

『君はそう思っている、彼女の方はそうではなかったということだよ。織莉子』

いつの間にか、キリカの足元にキュウベえが座っていた。

キリカは、明らかに声が聞こえた様子で足元のキュウベえを見て、すぐまた織莉子に目を戻した。

「キュウベえ、まさか……」

『キリカから素質を感じたからね。契約を持ちかけたんだよ』

「うん、そうなんだ。私は魔法少女になったよ」

「魔法少女に……」

魔法少女、呉キリカ。

この出会いは知らなかった。

世界の終わりばかりに気を取られて、他に気を回していなかったのもあるが、確かにキュウベえの言う通り。

イレギュラーは、どうしても存在するのだ。

織莉子の目的を達成するには、やはり、一人では厳しいかもしれない。

「だって、私は君と話して、恩を返したかった——ううん、違うんだ。恩なんてもんじゃないんだ」

キリカは勝手に話を進めて、頭をぶんぶん振っている。

そして、何か思いついたらしい。手を打って、大きく腕を広げた。

「恩、じゃ、なくて……愛、だ！」

それがしつくり来たようで、織莉子のテンションは天井知らずに上がっていく。

対して、織莉子からすると、ほぼ初対面の謎のキャラだ。理解が追いつかなくて、若干引いていた。

その織莉子の様子に気づいたキリカは、一瞬で情けない、泣きそうな顔になる。

「ダメだった？ 私の愛は死んじゃうの？ 君の世界に、私はいないの？」

「世界……」

キリカの口にした言葉は、織莉子の琴線に触れた。

織莉子が成し遂げようとしていること、それは——

「キリカ」

「な、なに？ 何でも言つてよ！」

織莉子にすがりつくように、キリカが言う。

「私には、何としても成し遂げたいことがあるの。あなたはそれを手伝つてくれる？」

救いのない絶望を知ることになるとしても、逃げないで受け容れられる？」

「結構！」

キリカは、一瞬の時間も必要とせず、断言した。

「それで君の役に立つことができるなら、私は、絶望さえ安らかに迎えられるよ！」

「……そこまで熱烈に受け容れられたのは、初めてだわ」

織莉子は、キリカの前に右手を差し出した。

握手のつもりだったその手を、キリカは両手で握って胸元に抱く。捧げる剣も、交換する指輪もないけれど、それは誓いだった。

「私はどこまでも、そうさ、無限に君に尽くすよ」

「本当、熱烈だわ」

織莉子は、キリカの手に、自分の残った手を重ねた。

「私の名前は、織莉子。……三国、織莉子よ」

「そうか、じゃあ、織莉子だ。うん、私はそう呼ぶことにするよ、愛を込めてね！」

その言葉を聞いて、織莉子は嬉しそうに、笑った。

「嬉しいわ、キリカ。では——」

手を重ねあつたまま、宣言する。

滅び行く世界への、挑戦を。

「私たちが、救済を成し遂げましょう」

『織莉子。君は一体、何を識っているのかな。君の言う絶望とは、何だい？』

手を取り合う少女たちに、キュウベえが尋ねる。

織莉子は答えた。

「この街に現れる、強大な魔女のことよ」

次回、第4話「味方だからね」

第3話「愛を込めてね！」（後書き）

<あとがき>

おりこマギ力編、本格始動。今後はまどかたちのほのぼの学園生活と二本立てで進む予定です。

愛たい、は単なる誤字だったのですが、ヤンデレ系狂気キャラのキリ力には実はあってるんじゃないかね？ と思ったのでそのまま採用。

織莉子とキリ力の出会い（再会）は、原作ではそんなに詳しく語られてないのですが、まあ、最初は協力者くらいの関係で（織莉子からすれば）始まったんじゃないかという想像。

私の中では「マミさん」なので、地の文で「マミ」って書くと違和感が酷くて困ります。

原作とは違ってまどかたちがキュウベえに勧誘されていないので、マミさんのドキドキ 魔女退治ツアーはありませんでした。

一人で魔女相手に必殺技を叫んでるところを想像すると、何だかすごく寂しい図だと思います。

早く後輩ができることを祈って、ティロ・フィナーレ！（挨拶）

断章2「だから、願いを叶えてよ」

「う——五月蠅いよっ！」

どんな理由だったのか、それは些細なことだった。

恐らく、大したことではなかったはずだ。

何気ない言葉だったのだろう。

けれど、渚の発したそれが、妙に気に障った。

水が一杯に入っていたコップに、一滴の水が滴り落ちたイメージ。平たく言って、汀はキレた。

渚を突き飛ばし……次の瞬間には自分が吹っ飛んでいた。

ダイニングテーブルとセットの椅子を巻き込みながらフローリングの床に倒れる。

椅子にぶつけた額と、頬が痛い。

犯人は目の前にいる。

渚ではなく——彼女の母親だった。

どうやら、彼女に殴られたらしい。

平手ならまだしも、拳である。

パーではなく、グーだ。

どれだけ本気で殴っているのか窺えるというものだ。

「母、さん……」

ことあるごとに渚と比べられて、それはそれでとても嫌だったけど、手をあげられたのは初めてだった。

自分でも信じられないくらいショックで、勝手に涙が出てきた。

「汀っ、渚が怪我をしたらどうするのよ！」

ヒステリックに母親が叫ぶ。

怪我も何も、渚はちよつとよろめいただけで、尻餅すらついていない。

むしろ、怪我をしているのは汀の方だった。

息子の怪我を心配しながら、娘を殴り飛ばすという、その矛盾は

何だというのか。

「そんなに……っ、渚、だけがっ大事だって——」

「あんたって子はっ」

二人とも冷静ではいられなかった。

叫んだ汀に向かって、母親が手を振り上げ、

「母さん！」

手が振り下ろされるより先に渚が割って入り、その腕を掴んだ。

「姉さん、大丈夫——」

「っ……！」

渚が心配そうな顔で振り返る。

それ以上そこにいられなくて、汀は、家を飛び出した。

家を飛び出し、あてもなく、走った。

顔を濡らす熱い液体が邪魔で、何度も何度も手で拭いながら。

「はぁ……はぁ……」

最初から全力疾走していたせいで、すぐに息が切れた。

どこかの街灯の下で、膝に手について荒い息を吐く。

濡れた頬を鬱陶しそうに拭い、その手が真っ赤になっているのに息を飲んだ。

恐る恐る、指先で額を触ってみると、額に裂け目ができているのがわかった。

どうやら、椅子にぶつかったときに切れていたらしい。

「あわわわ……」

半ばパニック状態になっていると、背後から足音が近づいてくる。

そして、聞きたくない声がした。

「はぁ、やっと見つけたよ、姉さん」

「……渚。どうして来たんだい」

背中を向けたまま、汀が聞く。

「どうしても何も、姉さん、怪我をしてただろう。血が出てるのが見えたよ。ほら、こっち向きなよ」

渚は汀の肩を掴んで強引に振り向かせた。額からの出血で顔の半面が真っ赤に染まっているのに気づいて、息を飲むのがわかる。

「うわ、思ってたより大変なことになってるじゃないか。手当てしない」と

渚は道路に屈むと、手に持っていたものを置いた。街灯に照らされたそれは、赤い十字の書かれた白い箱。救急箱だった。

わざわざこれを持って追いかけていたらしい。

汀は救急箱が家にあったことも知らなかったというのに、気が利くものだ。

「大丈夫、ボク、最近こういうのも勉強してるから」

救急箱の中を探りながら、渚がそんなことを言う。

医者にもなるつもりだろうか。

ああ、なれるだろう。

渚が本気で目指したのなら、きっと、日本どこるか世界の最高峰に位置する医者に。

汀は、その高みまでたどり着けない。生まれたときから、その素質が違うのだ。

努力では埋められない隔絶。

それを埋める術などない——いや、ないはずだった。

汀の視界の隅に、キュウベえと名乗った小動物の姿が映る。

魔女と戦う存在。魔女を狩る者。

魔法少女。

キュウベえと契約を交わすことによってソレになることと引き換えに、キュウベえはどんな願いでも叶えてくれると言う。

だが、魔法少女と戦いは危険に満ちている。

偶然近くにいた魔法少女の戦いをこっそりと見せてもらって、そ

れを痛感した。

身の丈ほどもある巨大な槍を振り回して戦う、赤い魔法少女。彼女のように戦う自信はまるでなくて、一度は断った。

けれど——今。

危険と知って、なお欲しい。

常に比較され、敗者であった汀が、渚に並び、越える奇跡が！

「キュウベえ、いいよ」

「姉さん？」

突然塀に向かって話し始めた汀に、渚が訝しげな目を向ける。

渚にはキュウベえが見えないのだ。

キュウベえが言っていた。キュウベえは、キュウベえ自身が選んだ者の目にしか、映らないのだと。

それは特別の証拠だ。

夜柙汀が、夜柙渚に勝る特別。

魔法少女になれば、その特別は永遠の物となる。

そして、さらにその上で、どんな願いでも叶えてもらえる。

これほどの幸運、他にはない。

「ボクが契約してあげる。だから、願いを叶えてよ！」

「確かに言っただね、夜柙汀。いいよ。それじゃあ、言っただらん？」

魔女との戦いに身を投じる君が、求める対価は、何だい？」

「ボクの願いはね……」

「姉さん、本当にどうしたの？ 一体、何と話してるの！？」

渚立ち上がり、が汀の肩を掴んで顔を覗き込む。

汀は、視線の高さは同じはずの顔を見返して、なぜか、天空を見上げるように錯覚した。

天才と称される弟。

常に、汀の届かない高みに立つ存在。

姿を似せても、口調を似せても、決して同じにはなれない。あまりにも遠い双子の半身。

これで、その優秀さを鼻にかけるような嫌な奴なら、少しは違っ

たかもしれないのに。

渚は、その人間性も含めて文句のつけようがない人間で。

だから、もし、どんな願いでも……叶うというのなら――

「ボクの、願いは――！」

断章2「だから、願いを叶えてよ」(後書き)

オリキャラが出られなかったので再び補給。

かなりざつくりした説明になっておりますが、当作品は原作キャラ重視なのでオリキャラはこのくらいで十分かと。

オリキャラがもっと出張るなら、タイトルは「みぎわ マギカ」になるかもなんですけどね。

とりあえず経緯だけわかっていれば特に問題ありません。

第4話「味方だからね」

まどかに電話がかかってきたのは、夜も遅くになってからだった。携帯電話の表示には、『美樹さやか』の名前が表示されている。こんな時間にどうしたんだろっ、と思いながら、まどかは電話に出た。

「もしもし、さやかちゃん？」

「あ、まどか。ちょっと話があるんだけど、今大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

相手には見えないのだけれど、ついつい頷きながら返事をする。電話の向こうにいるさやかは、数秒間を置いて、真剣な声を出した。

「実は、転校生のことなんだけどね」

「ほむらちゃんの？」

「うん。あの子が何であんなこと言うのかなーって、考えてたんだ。まどかにも聞いてもらおうと思って」

ほむらのことだと言われて、自然、まどかの顔に緊張が浮かぶ。夜遅くにわざわざ電話してきたのだから、何か考えがまとまったということなのだろう。

不思議な転校生。暁美ほむら。

彼女の言動の意味するところを、まどかは理解できていたない。正解かどうかはさておいても、さやかの予想に興味はあった。

「……うん。聞かせて、さやかちゃん」

まどかは一度深呼吸して、さやかに話を促した。

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺
第4話「味方だからね」

翌朝。通学路で待っているさやかと仁美のところに、まどかがバタバタと駆け寄ってくる。

「さやかちゃん、仁美ちゃん、おっはよう!」

「おはよ、まどか」

ひよいと手を上げて返事をしたさやかに、仁美が続く。

「おはようございます、まどかさん。今朝はとても元気ですね」

「え、そうかな?」

「ええ。そう見えますわ」

「えっと、それは……」

まどかは少し考える。

確かに、今朝の自分は少し張り切り気味だ。

その原因は、昨日のさやかからの電話なのだが、魔法少女のことを上手く隠してそれを話す自信がなかった。

「その、ね?」

「え?」

困ったまどかは、さやかに目配せする。

が、さやかはさやかで隠したり誤魔化したりが得意な性格ではない。
い。

「えーと、うん、そんな感じで」

結果、そんな意味のわからないことを言ってしまった。

自分たちで怪しさをアピールしてるようなものだ。

案の定、仁美は明らかに困惑の表情を浮かべている。

まどかたちが何かを誤魔化そうとしているのに気づいていて、それを聞いてもいいのか迷っているのだ。

「どうしよう、さやかちゃん」とまどかが視線でさやかに訴える。

さやかは、眉をハの字にして指先で頬を掻いた。

「はっ、まさか……」

突然、仁美がスクールバッグを取り落とす。

「二人は、目と目でわかり合う間柄に？ ああ、まさかそんな急接近だなんて。一体何があったんですの！？」

頬に手を当ててくねくねと身もだえする仁美に、まどかとさやか
はぽかんとした表情になった。

「でもいけませんわ、お二方。女の子同士で。それは、禁断の恋の形ですよ……！」

「あ……」

「行っちゃった……」

物理的にも精神的にも二人を置いてきぼりにして、仁美は通学路を駆け去って行った。

「仁美ー、バッグ忘れてるよー」

仁美が落としたバッグを頭上まで持ち上げながらさやかが言うが、仁美には聞こえないようだった。

「わたしたちに気を使ってくれたのかな？」

「……まどかさあ、それどっちの意味？」

「へ……？ あ！」

まどかは一瞬首を傾げたが、すぐに意味を理解する。

「話しくそだったから誤魔化してくれたって意味だよ？ ほら、さやかちゃんは大好きなお友達だけど、それは恋の好きとは違うって言うか、ね？」

「や、そんなガチで断らなくても、まどかと禁断の愛とかないって苦笑いしながら、さやかは二つのスクールバッグを自分の肩にかけた。

「あ、そうだよな。さやかちゃんには上条君がいるもんね」

「うえ！？ 恭介！？」

びくつ、と体を震わせるさやか。

「な、何言ってるのかなーこの子は。あれはただの幼馴染だし！」

「だから違うからっ」とか言っているが、顔が赤くなるのが隠せていない。

「好きとかじゃないんだから~~~~~!!」

とうとう、顔を伏せて、まどかの前から逃走してしまった。

「……さやかちゃんまで行っちゃった」

一人だけになってしまったまどかは、二人が駆け抜けていった通学路を歩き始める。

話し相手もない状況で、意識は自然と内面へ潜り、まどかは、昨日のさやかとの電話を思い出していた。

さやかは、話し始めた。

彼女の思う、ほむらが、まどかが魔法少女になることを止めようとする、その理由を。

「最初は、マミさんの言ってた魔女退治の見返りってやつを取り合っライバルを増やしたくないから邪魔してるんだって思った」

「……うん」

それは十分にありえる話だ。まどかは相槌を打った。

単純に考えて、争奪戦に参加する人数が少なくなれば、それだけ勝ち取れる可能性は上昇する。

だが、さやかは、最初はと言った。

それは、今は違うことを考えているという意味だ。

「でも、よく考えたらそれって変なんだよ」

「え？ どうして？」

「だって、あたしたちが魔女になれるかどうかなんて、わかんないんだよ？ そんなの気にしてたら、転校生は会う人全員に釘を刺して回らなきゃなんないじゃん。でも、転校生が気にしてるのはあたしたちだけなんだよ」

「それは……わたしたちが魔女のこと知っちゃったからで……」
「いやいや」

まどかが推論を口にするが、さやかからは否定の言葉が返ってく

る。

「転校生、あたしたちが魔女に会う前から、まどかに忠告してたんでしょ？」

「あ……」

さやかの言う通り、まどかが最初にほむらから忠告を受けたのは、ほむらが転校してきてすぐの休み時間だ。

そのときはまだ、魔女や魔法少女が存在するなど、少しも思っていなかった。

「多分、屋上であたしに言ったのはついりで、本当に転校生が気にしてるのはまどかなんだよ」

「……どうして、わたしなんだろう。ほむらちゃんとは、本当に初対面なのに。さやかちゃん、何でだと思う？」

「マミさん、魔法少女が衝突することもあるって言ってたよね。転校生も、馴れ合うのは止めたとか言ってた。だからきつと、魔法少女同士で何かあったんだよ。」

多分、こんな感じで――」

………

………

………

「ドガン！」

「ギャー、この魔女である我が、魔法少女に敗れるとは――」

「やった。魔女を倒してとても不思議なパワーを秘めたアイテムを手に入れたわ。これを集めれば――はっ！？」

「シュツ。サツ」

「今のを避けるなんて、中々やるんだね」

「だ、誰！？ 新しい魔女なの！？」

「魔女じゃないよ。あなたと同じ、魔法少女。ねえ、それをわたしに譲ってくれない？」

「その声、その顔……まさか、まど美（仮）？」

「え……そんな、ほむほむなの？」

「さやかちゃん、まど美にほむほむって……」
「いいからいいから。ここからが大事なところなんだから」

「結局、昨日の魔法少女は逃げていった。あれは、本当にまど美だったのかしら……」

「あ、おはよう……ほむほむ」

「まど美。昨日の魔法少女は……」

「うん、わたしだよ。お願い、ほむほむ、魔女を倒すのは止めて。わたし、あなたとは戦いたくない」

「私だって、親友のまど美と戦いたくなんてない。でも、わたしだって不思議アイテムが必要なのよ」

「どうしても、ダメなの？」

「……ごめんなさい」

「じゃあ、わたしたちは敵同士だね」

「……ええ」

「そして、親友だった二人は何度も戦って、ついに、決着がつくときが来た——」

「どうして、魔女の攻撃から私を庇ったりしたの……敵同士って言ったのは、まど美なのに」

「……なんでだろ。勝手に、体が動いちゃったんだ……」

「まど美……」

「わたしたち、どうしてこんな風になっちゃったんだろう……」。

魔法少女にさえならなかったら、こんな……こんなことにはならなかったのにね……ガクリ」

「ま、まど美いいいいいっ！」

「そうして、親友を喪ったほむほむは、失意のままに転校をした。

そして、転校した先の教室で、まど美の面影を持つ女の子を見つけた――」

「あの子……まど美に似ている……。……決めたわ。私は、彼女を魔法少女にしない。危機が訪れるなら、私が守ってみせる。」

これは私の自己満足だけど……。あの子にまど美みたいな思いはさせない。鹿目まどか。あなたは、私が守る！」

……

……

……

「みたいなことがあって、転校生は親友似の少女、そう！ まどかを守る決意をしたってわけよ」

見事に声色を使い分けて――本人に似ていたかは別として――さやかは寸劇を演じ切った。

名称設定の拙さで妙にギャグっぽくなっているが、内容自体は至極真面目だ。

さやかは、まどかの反応を待つが、電話口の向こうのまどかは、中々言葉を発しない。

さらに少し待っていると――

「さやかちゃん……。…」

「まどか？」

「……ぐすっ」

さやかの熱演のせいか、まどかの声には泣きが入っていた。

（まじ泣きしちゃったー！？ やっぱ、さやかちゃん名演技過ぎ！？）

「ほむらちゃんがそんな気持ちだったなんて……。わたし、どうしたらいいのかわかんないよお」

「あー……。仲良くなればいいんじゃないかな。転校生、人気者だけと友達いないから、寂しがってると思う」

「……わかった。わたし、ほむらちゃんと仲良くなる――ううん、

仲良くなりたい！」

はつきりとした意思が張った言葉がまどかから返ってくる。

困っている誰かを助けたい。辛い思いをしている誰かを癒したい。そういう感情で素直に動くことができるのは、まどかの美点の一つだと、さやかは思っていた。

「その意気だよ、まどか」

さやかとしては、ほむらの過去妄想は話半分にして、『実際はどんなことがあったかわからないけど、きつと魔法少女同士で何かあったはずだ。だからクールぶってるけど、本当は寂しいのかもしれない』と持つて行くつもりだった。

まどかがさやかの話を真に受けすぎて予定通りには行かなかったが、結果的には同じところに落ち着いたからいいことにしよう。

さやかは、そう思つて一人頷いた。

「ま、あたしも転校生と話してみるつもりだから、一緒に頑張ろうよ」

「うんっ」

そんな会話で、電話は終わった。

さやかは、ほむらの過去に何か辛いことがあったこと自体は間違いないだろうと思つている。

そして、そういう他人の痛みを他人事として放っておけないのはまどかだけでなく、さやかも同じなのだった。

まどかが教室に着くと、ほむらは既に自分の席にいた。

転入フィーバーは落ち着いたらしく、一人だ。

冷やかな目がまどかを一瞥し、離れていく。

今までは、ほむらに対する態度を決めかねていたがために持て余していた視線だったが、心を決めていたまどかは、それに気圧されるのを自覚しつつも、話しかけようという意思を持つことができた。

ゆつくりとほむらの席に向かっていると、先に到着していたさやかがまどかに合流してくれた。

「行こっか」

「うん」

さやかはまどかの肩を軽く叩き、自分が先に立つ。

前に歩くさやかに釣られるように、まどかの足は少しだけ速くなつた。

さやかは、ほむらの席に着くと、机の天板に手を置いた。

それでようやく気づいたというように、ほむらがさやかに視線を向けた。

さやかは、机に置いた手を離し――

「おっはよ、ほむら」

その手を顔の横に上げながら、普通に挨拶をした。

それにはほむらも虚を衝かれたのか、目を少し大きくして瞬きをした。

だが、そんな生の感情も、髪をかき上げる仕草に隠された一瞬で取り繕われてしまう。

「随分気安いのね。美樹さやか」

「別にいいじゃん。まどかだってそう呼んでるんだし。」

何て言うか、あたしたち秘密を知ってる仲なんだし、もちよつと仲良くしようとか思ってたわけよ。

そんなわけで、あたしのことは『さやか』と呼びたまえ」

「呼ぶつもりはないし、あなたと仲良くするつもりもないわ」

相変わらずそっけない態度のほむら。

彼女の言葉を聞いたさやかは、にやつと笑った。

「そんなこと言っちゃっていいのかなあ？ あたしよりあんたと仲良くしたいって子がいるんだけど、ねっ」

語尾でまどかの手を取り、ほむらの前に突き出す。

まどかはつんのめるように前に出て、ほむらの、ほんの一步手前に立った。

何を言えいいのか。何をすればいいのか。

昨日の夜から考えていたそれには、まだ答えが出ていなかったから。

まどかは、素直に自分の気持ちを伝えることにした。

手を伸ばして、ほむらの手を取った。

ぎゅっと、握る。

「ま——鹿目まどか!？」

ほむらが上げた声は、明らかに驚きに満ちていて、さやかは笑みを深くした。

「ほむらちゃん。わたし、まど美ちゃんにはなれないけど……ほむらちゃんの味方だからね」

「え、まどみ……?」

「ぶっ」

たまらずさやかは吹き出した。

何が面白いつて、まど美を実在のキャラクターみたいに語っているまどかが面白いし、あの暁美ほむらてんせいほむらがそれに目を白黒させてうろたえているのも面白い。

（何だ、あたしたち、意外と上手くやれるかもしれないじゃん）

笑いながら、そんなことを思う。

さやかに笑われていると知れば、ほむらは文句の一つもいいそうなものだが、今のほむらはそれどころではなかった。

昨日のまどかは、ほむらに見られると途端におどおどしてしまう少女だったのに、一晩で様子がすっかり変わっている。

隙を見せたつもりはないが、自分の知らないところで魔法少女になったのではないかと、ほむらはまどかの手に目を向けた。

魔法少女は、普段ソウルジェムを指輪の形で携行しているのだ。

左手中指にはまる、人には読めない言語の刻まれた指輪と爪に描かれる紋章。

それを見れば、魔法少女かどうかは一目で判断することができる。
（契約したようではないようね……）

まどかの手には何もないことを確認して、まずは一安心。

しかし、そうすると新しい問題が生まれる。

なぜ、まどかはこうも様子が変わっているのだろうか。

『まどみちゃん』なる人物が原因とも考えられるが、ほむらの知る限り、まどかの周辺にそんな名前の人物はいたことがない。

（一体、何があったというの……？）

ほむらは内心の混乱に飲み込まれ、まどかに手を握られたまま、しばらく固まっていた。

色取り取りの薔薇が咲き乱れる世界。

茎葉の緑に白や赤、黄色の花弁。

その色彩の間を、黒が行ったり来たり。

「ねーねー織莉子お。これはー？」

「その白い薔薇は銀世界。ピンク色の方はドロレスよ」

陶器のカップに紅茶を注ぎながら、織莉子が答える。

「そっか——うん、記憶したよ。もう忘れない」

薔薇の中で、キリカはそう言った。

覚えたことは、それだけではない。

ここは織莉子の家にある温室。

織莉子の父はとある政党の議員、三国久臣。母親は幼い頃に亡くしている。

織莉子自身は中学三年生。成績はトップで、生徒会長。

エトセトラエトセトラ。

昨日知り合ってから、織莉子を質問攻めにして得た情報だった。

「キリカ。紅茶が入ったわ。お茶にしましょう」

「うん！」

とてとてと、キリカが織莉子に駆け寄る。

白いクロスのかけられたテーブルを挟んで、二人は椅子に座った。

テーブルの上にはティーポットにカップが二つとクリームやジャムを添えたスコーンの載った皿などが置かれていた。

「キリカ、お砂糖はいくついれる？」

角砂糖が積まれた容器を手にとつて聞く織莉子に、キリカは、

「三個！ それに、ジャムも三杯ね」

と答えた。

織莉子は目を丸くして、それからくすくすと笑う。

「そんなに？ まるでシロップだわ」

「むー。子供みたいに言わないでよ。織莉子なんて……あれ？ あー！」

叫んで、キリカが立ち上がる。

その拍子にテーブルが揺れるが、織莉子が先にカップを押さえていて事なきを得た。

が、事なかったのはカップの方だけだったようで、キリカはテーブルに両手をついて打ちひしがれている。

「私としたことが、こんな大事なことを聞きそびれてたなんて……」

「どうしたの、キリカ？」

「君の誕生日を聞くのを忘れていたんだよ！ ああ、何てことだ……」

……

「そんなに落ち込まなくても……ちゃんと教えてあげるわ」

「ホントっ？ 織莉子愛してる！」

「ふふふ、ありがとう」

キリカを宥めて、織莉子は自分の誕生日を教えた。

「生まれた時間は？」

「そこまですりゃ？」

「私は、君の情報ならどんなものだって欲しいんだよ」

別に隠すつもりもなく、織莉子は自分の誕生時間をキリカに教えた。

「それじゃあ、君は私より121日と三時間年上なんだ」

自分の誕生日と照らし合わせてそう結論を出したキリカは、椅子

に座り直した。

満足できたようで、にこにこ笑っている。

「落ち着いた？」

「うん！」

「それじゃあ——」

と言つて、織莉子はカップを持ち上げた。

「キュウベエの戻る時間が来る前に、世界を救うための話をしまし
よう」

授業が終わった後、さやかは市内の病院を訪れていた。

目的の病室に辿り着いてドアの取っ手に手をかけ、少し躊躇う。

（あーもう、まどかが変なこと言うから……）

胸に片手を当てて、このドキドキはまどかのせいだと自己暗示。

一度大きく深呼吸する。

「……よし」

さやかはドアを開いて、病室に入った。

病室は個室。

窓辺に花瓶が飾られた窓は開け放たれていて、夕日と共に入ってくる風が、白いカーテンを揺らしていた。

可動ベッドの頭の部分を起こして、窓の外を見ていた少年が、さやかに気づいて振り向く。

黒髪に黒い瞳。柔らかな顔立ちで、穏やかな雰囲気をもった少年だ。

「やあ、さやか。また来てくれたんだ」

「うん。恭介、具合はどう？」

「変わらないよ。今日もリハビリ」

「そっか……その、大変だね」

「確かに辛いけど、平気だよ。早く動かせるようになりたいからね」

「……そうだよね」

言葉を交わしながら、ベッドの側の椅子に座る。

少年の名前は上条 恭介。

交通事故で手足に怪我を負って入院しているために学校には来ていないが、さやかのクラスメイトだ。

それだけではなく、さやかとは幼馴染でもある。

今もまだ傷は癒えておらず、ベッドの上に置かれた左手には、包帯が巻かれていた。

さやかは、スクールバッグを膝に置いて中を探り、ビニール袋を取り出して恭介に差し出した。

「はい、これ」

恭介は右手でそれを受け取り、中身を取り出す。

中から出てきたのは、ヴァイオリンのCDだった。

恭介は、それを見て、感嘆の声を上げる。

「うわぁ、これネットでも手に入らない廃盤だよ。さやかはレアなCDを見つける天才だね」

「そんな、運がいいだけだよ」

「そんなことないよ。いつも本当にありがとう」

恭介は、CDが山積みになっているベッドサイドの机から、ポータブルCDプレイヤーを取った。

「この人の演奏は本当に凄いんだ」

そう言いながらCDをプレイヤーにセットし、イヤホンをつける。片耳につけて、もう一つのイヤホンをさやかに向けた。

「さやかも聞いてみる？」

「え……いいのかな」

とか言いながら、さやかはいそいそとイヤホンをつける。

ベッドと椅子では距離があつて、二人でつけるとイヤホンのケーブルがぴんと張り詰めてしまった。

「本当はスピーカーで聞かせたいんだけど、病院だしね」

そう言いながら、恭介がさやかに体を寄せてケーブルに余裕を作

る。

（えええ、ちょ、近つ）

肩が触れ合いそうな距離に、さやかは頬を染めた。

恭介がプレイヤーのスイッチを押し、CDが回り始めた。

片耳ずつつけたイヤホンから、ヴァイオリンの旋律が流れ始める。

恭介はさやかの動揺に気づいた様子もなく、目を閉じて演奏に聞き入っていた。

さやかは恭介に倣って目を閉じ、彼と同じ時間、同じ音を共有することに、しばし酔った。

だから、気づかなかった。

さやかが開けっ放しにしていたドアの前に、一人の少女がいたことを。

「お邪魔のようですね……」

少女——志筑仁美は小声で呟くと、手に持った花束を揺らしながら、廊下を歩いて行った。

フェルトの地面にボタンと毛糸で上空に張り巡らされた足場。

手足や首が欠損したぬいぐるみのような使い魔が徘徊する魔女結界の中を、一人の少女が走っていた。

彼女の部活に影響されたいらしいチア服に似た魔法少女の衣装にはいくつかの裂け目が走り、その下の素肌にも裂傷ができている。

その傷は、三本の爪で切り裂かれたようなものだった。

血を流しながら、魔法少女は走る。

彼女に傷を与えたものから逃げるために。

魔女？

いや、もつと恐ろしい。

魔法なんて人外の力に触れていても恐ろしいのは、力ではなく、心。

アレは壊れている。

なまじ人の形をしているがゆえに、理解できないことが恐ろしい。
「さあ、見つけたよ！」

頭上から声が降ってくる。

毛糸のアスレチックの上に、彼女は立っていた。

黒い燕尾服にタイトスカートを合わせた衣装。背中側、尻尾の付け根あたりに黒いソウルジェムが光る。

髪は黒。右目を覆う黒い眼帯が橙色の瞳を隠している。

魔法少女。呉キリカ。

それが、魔法少女を襲った犯人だった。

「そんな……追いつかれた!？」

魔法少女の目に、絶望が浮かぶ。

必死に逃げたはずなのに、容易く追いつかれた。

少女はキリカに背を向けて走り出す。

後ろを見ることも惜しんで、必死に。

でも、驚くほど前に進まない。いつから、こんなに足が遅くなってしまったのだろう。

「そんなによちよち赤ちゃんみたいに！　もしかして、待っていてくれるの？」

毛糸から毛糸へ跳んで、見る見る間にキリカが距離を詰める。

白い手袋に覆われた手の甲から、魔力で作られた半透明の三本の爪が伸びる。

「だったら、刻んであげるよ！　さあ死ね！」

獣のように、低い姿勢で飛び掛りながら爪が閃く。

魔法少女はがむしゃらに飛び出してそれを避けようとするが、避けきれずに足を切り裂かれた。

「うあっ！」

布の床に倒れる少女。

ふくらはぎに深い傷が刻まれ、血が溢れ出す。

「あれ、避けた？　ふうん。じゃあ次だ。次々次次次っ！」

「ま、待つて。ね、お願い。ほら、グリーンフシードならあげるから」
魔法少女は、魔女退治の見返りであるそれを、掌に載せてキリ力に差し出した。

けっこうな数をストックしていたようで、両手の上で小山になっている。

魔法少女なら誰でも欲しがらるはずの貴重品。

だが――

「そんなのいらない」

キリ力は、爪で無造作に手を払った。

「うあああああああつ！」

手に新たな傷が刻まれ、グリーンフシードが赤く濡れながら地面に落ちた。

「あ……あ……じゃあ、何で、何で私を襲うのよ！ 何が欲しいっていの！？」

滂沱と涙を流し、少女が叫ぶ。

魔法少女が争うことがあるとすれば、それはまずグリーンフシードと呼ばれるもののためだ。

逆に言えば、それを争うのでもなければ、魔法少女が争う理由は普通存在しない。

あるとすればそれは――魔法少女を殺すことそのものが、目的である場合。

「私は彼女に尽くす。私が欲しいのは彼女の望む結果^{もの}だけだよ」

キリ力は、爪の並んだ手を振り上げる。

「だから、君は死――」

シャラと、鎖の擦れる音。

魔法少女の後ろ。キリ力の真正面から、銀が奔る。

不意打ち気味に放たれた銀を、しかしキリ力は距離^{よつ}を持って躲す。飛び退いたキリ力の跡に突き刺さったのは、奇妙な銀色の鏡だった。

八角形を縦に引き伸ばしたような形状で、表側が鏡になっている。

裏側には持つための取っ手がついていて、手に持てば細長い盾のように見えると想像がつく。

だが、その鏡の側面は全て刃になっていて、武器のようでもあった。

一つの頂点には、細い銀色のチェーンがついていて、その長く伸びた先に、新たな魔法少女が一人。

長く伸ばし、ゴムで束ねただけの銀の髪。赤紫の瞳。

銀糸でびっしりと装飾が施された黒地の上着は左右非対称で、左袖が長く、右袖が短い。

下はダークレッドのミニスカートで、裾から黒いスパッツが見える。

両足と袖のない右腕は白銀の装甲に覆われていて、鏡のチェーンは手甲に繋がっていた。

目に見える部分にソウルジェムはないが、その立ち姿は銀の魔法少女と呼ぶのが相応しい。

彼女が右手を振ると、伸縮自在のチェーンで繋がっている鏡が引き戻される。

戻ってきた鏡を右手で捕まえて、片方の切っ先を床に突き刺した。襲われていた魔法少女に向かって、言う。

「逃げるんだ」

少女は、呆然としたまま、言葉をかけられていることにも気づいていない。

「君、逃げて。早く!」

「あ……っ!」

重ねて言われてようやく気づき、魔法少女がよろめきながら逃げ始める。

「逃げさせると思っか!」

「逃がさせてもらっよ!」

鏡を引き抜いて、キリカへと投げつける。

直線の軌道。読むのは難しくない。

キリカは跳躍し、鏡に繋がるチェーンから上空を走る毛糸へと跳ぶ。

銀の魔法少女は、身体ごと回りながら鏡を引き戻し、戻ってきた鏡の刃を、脚甲のついた足で真上に蹴り上げた。

サッカーのオーバーヘッドシュートのように蹴飛ばされた鏡が、毛糸を蹴って魔法少女を追っていたキリカに向かう。

さしもの魔法少女も、一度飛び出した空中では方向転換はできない。

鏡は、的確にキリカを捕らえていた。

しかし、キリカの直前で鏡のスピードが落ち、鏡はキリカの後ろを通り過ぎる。

銀の魔法少女はすぐさま左手でチェーンを掴み、先端の鏡を振り落とした。

円弧を描いてキリカの軌跡を追う鏡。

キリカは着地と同時に横に跳ね、鏡の刃はフェルト床を裁断した。一度も当たらなかったが、妨害には十分。標的の姿はもう見当たらない。

「逃がされた……っ」

「魔法少女狩りをさせるわけにはいかないんだ。見つけられてよかったよ。それにしても、さっきのを全部避けられるとは思わなかったな。」

百聞は一見に如かずと言うけど……大したものだね、君の『速度低下の魔法』は」

鏡を手元に戻しながら発言した銀の魔法少女。

キリカは、この闖入者を透かし見るように目を細めた。

（この魔法少女は、何を知ってる？）

キリカの頭の中で、ガンガンと警鐘が鳴り響く。

彼女は、今日始めたばかりの魔法少女狩りのことを知っていた。

彼女は、今日初めて使ったキリカの魔法を知っていた。

織莉子とキリカの計画にとって、これはイレギュラーだ。必ず、

障害となつて立ち塞がつてくるだろう。

（あの魔法少女は逃がしたけど、こっちは逃がさない！）

両手に魔力の爪を作り出し、身構える。

「戦うつもりかい？」

「当然だ！ 君を生かせば今後に障る！」

叫ぶキリカに魔法少女は、肩を竦めてみせた。

「ボクはできれば戦いたくないんだけどね。君も魔法少女なんだから」

「他人の都合なんて知らないよ。私は、彼女のためにだけ動く！」
「なるほど。でも、残念ながら時間切れだ」

人差し指を立てて、上を指差す。

天井が、いや、天井だけでなく、壁も、床も——魔女の結界が揺らいでいた。

「ここに来る前に魔女を消しておいたんだ。思ったより長く残ったのは君の魔法の影響かな。」

まあとにかく、もうすぐこの結界は消えて現実空間に回歸する。

ここは、決して人通りのない場所ではなかったと思うけど？」

「この……っ」

キリカが噛み締めた歯が鳴る。

（人目に触れて騒ぎは起こせない。下手をすれば、私が織莉子の側に居られなくなる。こいつは危険だけど、ここは退くしかない）

キリカは爪を消し、構えを解いた。

それでも視線だけは、睨み殺せそうな鋭さで睨みつけている。

それを飄々とした態度で受け流しながら、

「夜柙汀だよ。ボクの名前は。きっとまた会うだろうから、覚えておいてよ」

「……汀ッ。君は危ないし、邪魔、だ。また会ったら殺す！ 絶対にだっ！」

物騒な捨て台詞を残して、キリカは崩れかけた結界の向こうへと消える。

キリカが去っていくのを見届けて、銀の魔法少女——夜柙汀は溜息を吐いた。

「魔法少女狩り。黒の魔法少女……呉キリカ、だったかな。もう会わないってわけには……いけないだろうね」

次回、第5話「魔法少女になろうなんて考えるな」

第4話「味方だからね」（後書き）

さやかちゃん迷推理&超長台詞。

最近執筆していると妙にさやかが可愛く思えます。

恭介、お前にはやらん。と言えたらいいんですけどねー。

作中のまどかは原作より少し天然さんかもしれない。人を疑うことを知らない子なんだよ！ ということで。

まどかサイド平和だなあ……。ま、原作も第三話のシャルロッテ戦までは猫かぶってましたしね。

銀の魔法少女、ようやく本編に登場。

でも顔見せだけ。彼女が本格的に活躍する日はくるのだから。

第5話「魔法少女になろうなんて考えるな」

杏子とゆまが行動を共にし始めてから、早くも五日が過ぎた。

ここで、杏子がゆまに教えた、一人で生きる方法を少し紹介しておこう。

例えば、

「まずは食い物だな。ゆま、お前は迷子のフリしてあの店のおばさんに話しかけるんだ。で」

「で？」

「その隙にあたしがパクる」

とか、

「いいか、この時間が風呂に忍び込むいい時間なんだ。あんまり騒ぐなよ、目えつけられるからな」

だとかである。

宿泊先には適当なホテルを利用しているが、それも真つ当な手段で利用しているわけではないだろう。

まあ何と言うか、二人で実に頼もしく生きていた。

（なんつーか、意外な収穫はあったな）

低いところにあるゆまの頭を見下ろしながら、今朝入手したばかりのパンを齧る。

幼い子供というのは大人に警戒心を抱かれ難いらしく、ゆまと協力してから食料の入手がやり易くなったのだ。

囃役がいるといたいのとでこうも違うとは、杏子も予測していなかった。

（つてことは、あたしの魔法が使えたら、もっと楽に……いや、あれは使えなくていいんだ。あたしが間違っちまった……その象徴なんだからさ）

軽く頭を振って、パンに齧りつく。

がつがつと食べる杏子の隣で、ゆまはパンの断面を見ながら渋い顔をしていた。

「うー、これきらい」

ゆまが食べていたのは惣菜パンなのだが、その中身が口に合わなかったようだ。

ゆまは、パンを袋の中に戻そうとしたが、杏子に睨みつけられて動きを止めた。

「馬鹿野郎！ 食いもんを粗末にするんじゃない！」

杏子としては、もう一言「殺すぞ」くらい付け加えたかったのだが、ゆまがびくつと震えて涙を浮かべたのをみて、口を噤んだ。

「うっ……ごめんなさい……」

もう一度パンを取り出すゆま。

杏子は、ぽん、とゆまの頭に手を置いた。

「ぴーぴー泣くな。もう怒っちゃいけないからさ。ちゃんと全部食うんだぞ」

「うん！」

ゆまは、顔を輝かせて頷くと、大急ぎでパンを食べ始めた。

「ゆっくり食えよ……また詰まらせてもらねえぞ」

「んー」

杏子に生返事を返して、ゆまは必死の勢いでパンを食べる。

ゆまは、一分もかからず残りを食べ終わり、空になった袋を杏子に掲げて見せた。

「キョーコ！ ぜんぶ……うん？」

ゆまは袋に残っていた具の欠片に気づき、それも綺麗に食べる。

「ぜんぶ食べたよ！」

「はいはい、ごくろうさん」

「えへー」

杏子は、自分を見上げるゆまの頭に手を置いて、撫でてやった。くすぐったそうに笑うゆま。

それを見ていると、杏子も自然に笑顔になっていた。

（まあ、悪くないかな……）

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺

第5話「魔法少女になろうなんて考えるな」

「ほむらちゃん、おはようっ」

朝の教室に、まどかの元気な声が響く。

通学するなり、荷物も置かないでほむらに挨拶に向かったまどかに、さやかも続く。

不思議そうな顔をしながら、仁美もその後ろについて行った。

「おはよ、ほむら」

「ええと、おはようございます」

「……おはよう」

ほむらは、挨拶されることは予想していたのか、驚いた様子も見せず、すげなく答えた。

「じゃあわたし、鞆を置いてくるね」

一言だけの会話の後、まどかは自分の席に向かう。

仁美は、同じように移動しているさやかにこっそりと話しかけた。
「お二人とも、昨日から随分と暁美さんに話しかけていますけれど、何かありましたの？」

「あはは、やっぱりわかる？」

「ええ、それはもう。聞いてはいけない話でしたら無理にとは申しませんが」

「んー、詳しくは言えないんだけど、あたしとまどかがほむらのちよつとした秘密を偶然知っちゃったんだ。でまあ、思うところがあって、仲良くなりたいなーって」

「まあ、そういうことだったんですの」

仁美は、口元に手を当てながら答えた。

「では、私は聞かない方が良いでしょうね」

「悪いね。助かる」

「いえいえ。では、無事にお友達になれたら、私にも紹介してくださいね」

「うん。……まあそれは——」

さやかは頷いてから、再びほむらに話しかけに行っているまどかを見て言った。

「まどかの仕事になりそうだけどね」

大小の積み木の山と、連なった風船で出来た木々に装飾された異空間。

魔女の結界。

その中に、杏子とゆま、二人の少女は立っていた。

杏子は、棒プレッツェルにチョコレートをコーティングしたスナック菓子を咥えている。

「ゆま。危ないから下がってな」

お菓子の入った箱をポケットにしまい、杏子は、腕を掴んでいるゆまを積み木の影に押し込んだ。

「うん、気をつけてね」

「心配すんな。大丈夫だ」

ぽん、とゆまの頭に手を置いて、杏子は飛び出していく。

その先にいるのは、小さな——ゆまとほとんど変わらないだろう

——人型の魔女だ。

身長の半分近くがフードをつけた宇宙服のヘルメットのような頭に占められていて、その下にくっついていてる体はデフォルメした絵のようになっている。

スカートからは逆三角形で表現された足が伸びているが、手は長い袖に隠されて見えなかった。

この結界の主。玩具の魔女である。

玩具の魔女が腕を広げる。

すると、袖口が大きく広がり、その中から明らかに袖の中に入るサイズではない手が飛び出す。

握り拳だったその手が広げられると、手の中から使い魔が現れた。影絵のように塗りつぶされた、カエルのぬいぐるみのような使い魔だ。

ただ一箇所だけ、白い線を使って口の線が引かれていた。

その口が大きく裂け、巨大な歯を歯茎まで露出させながら杏子に襲い掛かる。

二体の使い魔を、十字槍を扱いて迎え撃つ杏子。

穂先が地面を削りながら振り上がり、

「そらよつとお！」

振り下ろされた槍の一撃が、使い魔の一体を両断。

続くもう一体は、身体ごと旋回し、槍の柄でなぎ払う。

吹っ飛んでいった使い魔は積み木の山を壊し、崩れた積み木によって潰された。

鎧袖一触に使い魔を倒した杏子に、玩具の魔女本体が迫る。

頭を覆うフードの上下左右の四箇所から折れ曲がった刃を出現させ、頭突きをするように杏子に突きかかった。

杏子は巧みに槍を扱い、玩具の魔女の攻撃を捌いていった。

「遅いつての」

杏子の突き出す槍の切っ先は、もう目で追うことも難しい。

玩具の魔女と杏子の攻守は、いつの間にか逆転していた。

玩具の魔女が我武者羅に突っ込むも、足を止めたままの杏子を動かすことすらできず、逆に槍の長さに押されるままに後退させられる。

焦れたのか、玩具の魔女が無理やりにも杏子の懐に入ろうと、

落書きのような足に力を込めた——瞬間。

杏子の槍が鋭く突き出され、玩具の魔女は自分からその切っ先に頭を突っ込んでしまった。

十字架が頭に食い込み、玩具の魔女の頭にひびが入る。

玩具の魔女は両手で槍を掴んで頭を引き抜き、手で頭を押さえる。その手の隙間から、赤い体液がどろりと零れた。

そんな格好をすると、まるで幼い子供が痛がっているようにも見えて、どこか哀れみを誘った。

「終わりだよ」

魔女をつまらなそうに見下ろしながら、杏子が槍の穂先を下げ、お菓子の箱を取り出した。

中から一本抜き取って、口に運ぶ。

その瞬間、それを好機と見た玩具の魔女が跳ねた。

目的は、逃走。

杏子は口の端を吊り上げて、お菓子を噛み砕いた。

「バカ、逃がすかよ！」

杏子は跳躍して一跳びに玩具の魔女に追い縋り、下段から槍が翻った。

玩具の魔女は上半身と下半身を等分に切り裂かれ、地面に落ちた。

「すごい……」

ゆまは、隠れていた積み木の影から身を乗り出して感嘆の吐息を漏らした。

（わたしも、あんな風になれたら……）

ゆまの胸中に生まれたのは、憧れと欲求。

キョーコみたいになりたい。そして、あんな風に力があつたら——
「ちっ」

槍撃が巻き起こした風が拾っていた菓子を受け止めて口に放り込んでいた杏子が、ゆまの方を見て舌を打つ。

「ゆま！ 上だ！」

「え？」

焦ったような杏子の声に頭上を振り仰ぐ。

ゆまの目に映ったのは、刃を伸ばして、自分に襲い掛かろうとしている玩具の魔女の上半身だった。

予想もしていなかった攻撃に、ゆまの体は動かない。

ゆまに凶刃が迫り——ゆまの顔に液体が飛び散った。

いつの間にかゆまの目の前に、赤い糸が縦横に交差して走っていた。

その糸は小さな菱型を連ねて出来ており、まるで鉄条網のようだ。魔法少女が魔力を編み上げて作り上げる防壁。魔法少女の結界である。

杏子の結界は見た目の通りに刺々しい攻撃力を持ち、『守る』というよりは『通さない』ためのものだ。

結界から離れた玩具の魔女の顔には、結界によって刻まれた痛々しい傷が刻まれている。

そして、その後どんな行動をとるよりも早く、背後から突き込まれた槍が玩具の魔女の頭を刺し貫いていた。

今度こそ玩具の魔女が崩れ去り、杏子は結界を解いた。

「ゆま、大丈夫か？」

「う、うん」

杏子は、ゆまの顔に散った魔女の血を拭ってやった。

ゆまは目を閉じて杏子の手に身を任せる。

「あーあ、こんなとこまで散って……」

前髪の下の額を汚している血を拭き取るためにゆまの前髪を上げて、杏子は軽く目を見張った。

赤く爛れた円形の傷跡が、髪の毛の生え際の目立たない部分にいくつもついていたのだ。

（魔女にやられた怪我じゃねえな。火傷……タバコの跡か？）

杏子の手が止まったのに気づいて、ゆまが目を開ける。

自分を見上げる幼い少女の傷をそっと指でなぞって、杏子は言った。

「親か？」

「っ」

ゆまは短く息を呑み、顔を強張らせた。

何も答えずに俯いたゆまの体は、カタカタと小刻みに震えている。

「話したくなけりや聞かないけどな」

「……………」

ゆまは長い沈黙を守り、やがて、足元を見たまま口を開いた。

「わたし、ほんとにパパもママも好きじゃなかった。パパとママは一緒だと喧嘩ばかり。パパは家に全然いないし——ママはゆまにいじわるするの」

淡々と話すゆまの声には色がない。それがかえって、少女の感じた痛みを窺わせた。

「パパが帰ってこないって。パパがお外に遊びに行っちゃうのは、ゆまがかわいくないせいだって」

ゆまは、思い出していた。

夫が家に寄り付かないのをゆまに責任転嫁し、火のついたタバコを押し付けてくる女の姿を。

「すごくいじわるするの」

「世知辛いねえ…………」

杏子はそう呟きながら、一方では納得していた。

（親が殺されたつてのに、妙に堪えてなかったのはそのせいかな）

親だと思えないほどに心が離れていたのか。

あるいは、ゆまの心が痛みに強くなっているのか。

「でもまあ、親に裏切られる気持ちならわからなくもないよ…………あたしも似たようなもんさ」

「キョーコ…………も？」

はっとして、ゆまは顔を上げた。

二人を包む魔女結界が崩れ、現実空間である夜の公園が戻ってくる。

いつの間にか砂場に立っていたゆまは、杏子の顔を見つめた。

物言いが乱暴でわかり難いが、その奥に優しさを持っている少女。
ゆまのことをいじめない。助けてくれる。わかってくれる。

魔女を簡単にかいぶつに倒してしまう、強い少女。

自分はどうかだろう。ゆまは思う。

ゆまは弱い。

弱いからいじめられる。

ゆまが弱いならきつと、杏子もいつか、両親のようにゆまを捨ててしまうんだ。

「キョーコが強いのは魔法少女だから？」

スカートをぎゅつと握り締めて、ゆまは聞いた。

「ねえ！ 友達は？ 学校は？ 魔法少女ってほかにもいるの？」

次々に、ゆまは杏子に質問をぶつけた。

知りたいのは、魔法少女まほうしょうじょのこと。

ゆまは、彼女のように強くなりたい。

そして、その答えは、杏子ではないところからもたらされた。

「いるよ」

いつからそこにいたのか。

赤い瞳を持つ、ぬいぐるみのような小動物がそこにいた。

「魔法少女はたくさんいる。そして……織莉子の言ったとおりだ。

ゆま、君にもその素質があるみたいだ」

「うわあ——」

可愛らしい外見のキュウベえにゆまが顔を輝かせた。

地面からキュウベえを抱き上げる。

「ぬいぐるみがお話してる！」

「ぬいぐるみじゃないよ。僕はキュウベえ。よろしくね、ゆま」

じゃれあう二人を見ながら、杏子は鋭く目を細めた。

（コイツ、なんでこんなところに……それに、『織莉子の言ったとおり』だと？ どういう意味だ？）

警戒心を露にする杏子。

だが、彼女の気もしらず、ゆまはキュウベえをぎゅーっと抱きしめている。

「さつきも言っただけど」

抱きしめられたまま、キュウベえが言う。

「ゆま。君には素質がある。魔法少女になることはできるよ」

「ほんと!？」

ゆまは、抱いていたキュウベえを顔の前に持つてきて、聞き返した。

「わたしもキョーコみたいになれるの？」

「本当だよ。それに、魔法少女になれば、」

キュウベえが、魔法少女になる見返りを教えようとしたとき、それ以上、そいつに余計なこと吹き込むんじゃねえよ」

杏子がキュウベえの耳を掴んでゆまから引き剥がし、投げ捨てた。キュウベえは猫のような身のこなしで危なげなく着地する。

「……ふーん。『他人のため』に忠告なんて、杏子にしては珍しいね」

「ちっ、うぜえ」

キュウベえの言葉に、杏子も、自覚があるだけに舌を打った。

「さっさと失せろ」

ゆまを自分の手元に引き寄せながら、不機嫌さを隠そうともしないでキュウベえに言葉を投げつける。

これ以上機嫌を損ねると、槍が飛んできそうな勢いだっただ。

「わかったよ。ああ、そうだ。もう一つ用があっただ」

「何だよ」

「魔法少女狩り。最近、魔法少女が魔法少女に襲われる事件が多発してる。」

幸い、まだ犠牲者はでていないけど……全く、魔法少女が魔法少女を襲うなんて、非効率的にもほどがあるよ」

「てめえが契約して回ってるせいじゃねえのかよ」

いかにも呆れたという態度のキュウベえに、杏子は刺々しく言葉を返す。

「まあ、グリーンフシードは限られているから、考えられないことではないね」

「ふん……。で、犯人はどのどいつだ？」

「それは僕にもわからない。ただ、被害者は黒い魔法少女と銀の魔法少女に会ったと言っていたよ」

「ああ？ 二人もいるのかよ」

「いや、魔法少女狩りは黒い魔法少女の方だね。銀の魔法少女はそれを妨害してるらしい。」

杏子、君も気をつけてね。まあ、僕はいざとなったらそっちの――

円らだが、ガラス玉のようで妙に不気味な目がゆまを見る。

「おいっ！」

杏子が怒鳴りつけ、ゆまは体を震わせた。

「はいはい、わかったよ。またね、ゆま」

ひらひらと尻尾を振って、キュウベえは公園の木立の中に去っていく。

「ち、相変わらず胡散臭い野郎だ」

「キョーコ」

腕組みしてキュウベえの後姿を見送っている杏子に、ゆまは言った。

ゆまの耳には、キュウベえの言った言葉が残っている。

『君には素質がある。魔法少女になることはできるよ』

「キョーコ、わたし、強くなりたいっ」

強くなって、杏子の役に立てるようになって。そうしたら杏子は、ゆまのことを――

「……ゆま」

杏子は、よくやるようにゆまの頭に片手をのせて、キュウベえから目を離さないまま言った。

「魔法少女になろうなんて考えるな」

「え……」

ゆまは目を見開いて固まった。

（なんで……？）

ゆまの頭の中が、疑問に覆い尽くされる。

（キュウベえは、わたしも魔法少女になれるってゆったのに……なんでキョーコは、だめってゆうんだろう？）

——お前なんか、何も出来ないんだ！
思い出す。

——この、役立たず！

ゆまをいじめる女の言葉。今もじくじくと血を流す、呪いに似た傷跡を。

（やっぱりキョーコも——）

ゆまのこと、役立たずだって思ってるのかな……？

それは、ゆまにとって、何よりも恐ろしいことだった。

次回、第6話「泣いてなんかいないよ」

第5話「魔法少女になろうなんて考えるな」（後書き）

今回は少し短め。

まどかのほむらちゃん攻略作戦第一フェーズ。とにかく話しかけよう作戦実行中。

原作で瞬殺された魔女は、情報量が少なすぎてやっぱり瞬殺するしかないから困る。

玩具の魔女なんて、原作だとほぼ2ページでやられてますから。

杏子の結界の特性は自己解釈。アニメ見たときに刺々しくて防御って気がしないなーと思ったのと、おりこ2巻で、ほむらの結界に触ったまどかが痛がっていたところから。

前回やっと出たと思ったら、もう今回出なかった銀の魔法少女。予定では次回も出ません。

そんな出番のなさで大丈夫か？

そう言えば、魔女には名前があるのですが、作中ではあえて。。。の魔女と表記しています。

3話書いたときに、薔薇園の魔女とゲルトルートで書き比べてみたら、個人的に薔薇園の魔女の方がしっくり来たので。

第6話「泣いてなんかないよ」

杏子にすげなく追い払われたキュウベえは、その足で織莉子の部屋を訪ねていた。

「ゆまには確かに魔法少女としての素質があった。君の言うとおりだったね。でも、彼女は杏子の庇護下まほうしやうごにあって、追い払われてしまったよ」

「そうでしょうね」

キュウベえがばやくのを聞いて、織莉子は薄く笑った。
それでいい。

簡単に契約されてしまったのは、ゆまを紹介した意味がないのだから。

「識っていたのかい？ 教えてくれればよかったのに」

「識っていてもどうしようもないことというのはあるものだわ」

「なるほどね」

と、キュウベえは頷き、

「それじゃあ織莉子、僕を手伝ってよ」

「私が……？」

意外な申し出に、織莉子は驚いて問い返した。

「そつだよ。君は、君の魔法を僕のために役立ててくれるんだろう？」

「そつだったわね。ええ、いいわ」

織莉子にはこやかに頷いた。

今、キュウベえに不信感を抱かれてはいけない。

それが仮初のものであると、良好な関係を維持しておく必要がある。

どんな障害があろうと、『識って』いれば、どうにかなるのだ。
少なくとも、織莉子はそう信じていた。

魔法を発動。織莉子の脳裏に、ゆまの姿が浮かび上がる。

織莉子が識っていた光景は、少し、その姿を変えていた。

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺
第6話「泣いてなんかいないよ」

見滝原中学は放課後を迎えていた。

荷物をまとめているほむらにまどかが声をかける。

「あの、ほむらちゃん」

「なに？」

「今日一緒に帰らない、かな？」

「私の家とあなたの家は方向が違うわよ」

「あ、そうなんだ……」

知らなかったな、と思うのと同時に、どうしてほむらは知っている
たんだろうとも思う。

「じゃあ、途中まで」

「ごめんなさい。急ぐ用事があるの」

まどかが言い終わるより早くほむらは言うと、バッグを持って立
ち上がった。

「あう、それじゃ、また明日だね」

「ええ。さようなら、鹿目まどか」

挨拶を終えると、ほむらはさっさと教室を出て行った。

「いやー、見事に振られたねえ」

いつの間にか、仁美を連れたさやかがまどかの後ろに立っていた。

「はあ……わたしのやってること、やっぱり迷惑なのかな？」

「でも、曉美さんは自分から話しかける方ではないようですから、
まどかさんの方からアプローチするしかないと思いますわ」

「そうそう。何だかんだではむらが一番話してるのはまどかなんだから、頑張れ！」

眉を八の字にするまどかを、仁美とさやかが励ます。
二人に励まされて、まどかは小さく笑みを浮かべた。
「うん、そうだね。わたし、頑張ってみる」

「よし、その意気だ！」

さやかはそう言って、まどかの頭を撫で回した。

「さやかさん、まどかさんの頭を鳥の巣にするつもりですか？」

「ええっ？ そんなになってるの？」

「おっと、ごめんごめん」

さやかが手を止めてまどかの頭から手を離れた。

鳥の巣はかなり大げさな表現だったが、少し乱れていた髪を仁美が整える。

「はい、これで元通りですわ」

「仁美ちゃん、ありがとう。それじゃ、帰ろっか」

「あー、ごめん。あたし、恭介のところに行くから」

と、さやかが顔の前で手を合わせる。

「あ、そうなんだ……」

残念そうに言うまどか。

そんな彼女に、仁美は言い辛そうにしながら言った。

「あの、私も今日は少し用が……」

「ええ……」

そんなまどかの声が、教室に響いたのだった。

ほむらに続いてさやか、仁美にもお断りされてしまったまどかは家路についていた。

「あ、あの人……」

一人歩いていると、前方から見知った人が歩いてきているのを見

つけた。

見滝原中学の制服を着て、手に黄色のソウルジェムを乗せて歩いている少女。巴マミ。

マミの方もまどかを認めたようで、わずかに表情を変える。

それが顔を強張らせたように見えて、まどかは少し疑問に思った。マミは、ソウルジェムをポケットに突っ込んで——そのふりをしながら指輪に戻した——手を空にして歩く。

まどかとの距離が近づき、声が届く距離になると、マミは顔を伏せてすれ違おうとする。

どうしたんだろう？　と思いつつ、まどかはマミに声をかけた。

「マミさん？」

「えっ？」

驚いたように——と言うか実際かなり驚いて、マミが勢いよく顔を上げた。

「あの、マミさんですよね？」

「え、ええ。そうよ、鹿目さん」

「はあ、よかったあ」

まだ顔に驚きを貼り付けたまま答えたマミに、まどかは相好を崩した。

「知らん顔して行っちゃいそうだったから、人違いかもしれないって、ドキドキしました」

「あ、ごめんなさい。話しかけられるとは、思わなかったから」

影のある表情でそう告げるマミに、まどかは不思議そうな顔になる。

「えっと、どうしてですか？」

「どうしてって……」

マミは、まじまじとまどかの顔を見た。

特別驚かれるようなことを言った覚えのないまどかは、きょとんとした顔で見返す。

まどかが心底から言っていると理解したマミは、恐る恐るという

た風情で口を開いた。

「鹿目さんは、私のこと、恐いとか不気味だとか思わないの？」

「マミさんを、ですか？」

首を傾けながら聞き返すまどか。彼女には、マミがなぜそんなことを言い出したのか全くわからなかった。

「だって、私……魔法少女なのよ？」

「——あ」

そこまで言われて、ようやくマミの言いたいことがわかった。

魔法少女である彼女の使う技——魔法。

それは常人の持ち得ない異能であり、それを恐れるのはある意味ではごく普通のこととも言える。

だが、

「わたし、恐くなんてないです」

まどかがきつぱりと言い切った言葉に、マミは目を見開いた。

「魔法を使ってわたしとさやかちゃんを助けてくれたマミさんは、かつこよくて、素敵でした。だから、恐くない。ううん、むしろ、わたしはマミさんに憧れてるんです」

「鹿目さん……」

真っ直ぐにマミを見て、嘘じゃない、憧れていると、如実に語るまどかの目から逃げるように、背を向けた。

返そうとした言葉は喉に引っかかるようで、声が震えるのは隠せなかった。

「……憧れるようなものじゃないわよ、私なんて。格好いいって言ってくれたけど、そんなの無理してるだけ。怖くても辛くても、誰にも相談できないし、一人ぼっちで泣いてばかりなもの」

ぼろぼろと、愚痴のような言葉が零れ落ちる。

こんなこと言っつもりじゃないのにと思ってても、マミはそれを止められなかった。

魔法少女として既にベテランの域にあるマミだが、それでもまだ中学生。子供なのだ。

隠さなければならぬから誰にも言えなかったこと。

それを話すことのできる少女に、マミは自分の弱さを隠し切れなかった。

「やっぱり、そういうものなんですよ。魔法少女って」

浮かない顔で呟いたまどかの脳裏に、黒髪の魔法少女の姿が浮かぶ。

「でも、一人ぼっちだなんて言わないでください。頑張って戦って……なのにそんなの、あんまりです」

ざり、と靴底の擦れる音。

マミの背中にまどかが近づく。

遠慮がちに伸ばした指先がマミの服を掴み、それが彼女の温度をマミに伝えるようだった。

「マミさん。わたし、得意なことなんてないし、何も出来なくて迷惑かけるだけかもしれません。でも……そんなわたしでよかったです

——お友達に、なってくれませんか？」

「っ！」

ひゅっと、マミが息を呑んだ。

弾かれたように振り返る。

掴んでいた指が離れ、まどかが祈りに似た仕草で胸元に合わせた手を、マミの手が握った。

「本当に、いいの？ 本当に、私と友達になってくれる？」

「そうなりたいんです。だから、マミさんは——独りじゃありません」

まどかの手を握るマミの手に、ぎゅっと力が込められた。

「鹿目さん……嬉しい、ありがとう」

マミの目から、透明に光る滴が零れ落ちた。

「もう……ダメだなあ。私がみんなを守らなきゃいけないのに、これじゃあ反対だよ」

「マミさん……」

指で目を拭って、薄っすらと水の膜が浮かべたまま笑顔を作るマ

ミに、まどかは一步近づいた。

「わたしに、何かできることってないですか？　どんなことでも、わたし、力になりたいんです」

「気持ち嬉しいけど、でも、魔女に対して人間は無力よ。それに私、お友達にあまり危ないことはしてもらいたくないわ」

「あ、そうですよね……」

マミに言われて、まどかはしゅんとなってしまう。

友達だと言ってくれのは嬉しいけれど、だからこそ、何の役にも立てないのが悲しかった。

落ち込んだ様子のまどかに、マミは眉を寄せ、

「あ、そうだ。じゃあ鹿目さん、これから気をつけていてもらえ
る？」

「気をつける、ですか？」

「そう。魔女は結界の中に隠れているけど、何も痕跡を残さないわけじゃないわ。

だから、街の中を歩いているときとか、その痕跡が無いか、注意を払って欲しいの」

「あ、はい！　でも、痕跡ってどんなものなんですか？」

「えっと……あのね、痕跡には二つあるの」

と言って、マミは右手の人差し指と中指を立ててまどかに見せた。そして、中指を折って、

「一つ目は、魔女の口付け。これは魔女に狙われているっていう印よ。

魔女の紋章が首筋に浮かんでいるから、様子がおかしい人を見かけたら確認してみて」

「魔女の口付け……」

一言も聞き逃さないようにと、まどかは真剣に聞き入っている。

マミはもう一本の指も折り、指輪をソウルジェムに変えて、グリーンフシードを取り出した。

「二つ目はこれ、グリーンフシードと呼ばれる魔女の卵よ」

「魔女の卵!？」

ぎょつとして、まどかは反射的に身を引いた。
そんなまどかに、マミはくすりと笑いかける。

「そんなに心配しなくても大丈夫。この状態ならむしろ役に立つのよ。」

私たちが魔法を使うとソウルジエムが少しずつ濁ってしまっただけど、グリーンフィードはその穢れを移し取ることが出来るの。

前に魔女退治の見返りがあるって言ったよね？　それがこれ」

「そんなのが、街中にあるんですか？」

「魔女が落としたグリーンフィードは魔法少女が回収するけど、まだ魔女が生まれる前の卵ならね。そのまま放っておいたら魔女がかえ孵って結界を作っちゃうから、とても危ないの。説明はこんなところかな」

「わかりました。わたし、頑張つて探しますね」

「よろしくね、鹿目さん。もし見つけたら、危ないからすぐにその場を離れて、私に連絡して。あ、そうだ、連絡先を交換しておかないくちなね」

「あ、そうですね」

まどかとマミは、携帯電話を取り出してそれぞれのアドレスを交換する。

こうして、独りで戦っていた魔法少女に、共に歩む仲間が生まれたのだった。

さやかは恭介を見舞うために彼の病室を訪れていた。

定型の挨拶に始まって具合を問い、

見舞い客のために置かれた椅子に腰掛ける。

「ごめんね、恭介。今日は新しいCDが見つからなくて」

「いいよ、CDなんて」

普段は座るなりごそごそやり始めるスクールバッグを床に置きながら聞いた返答に、さやかは目を上げて恭介の顔を見た。

「恭介？」

「あ……」

さあ、黄昏色の風が部屋の中に流れ込んでいる。

発した言葉が知らず含んでいた冷たさに、他ならぬ彼自身が驚いているようだ。

「ほら、来るたびにお金を使わせるのも悪いしね。さやかがお見舞いに来てくれるだけで十分だよ」

「そ、そっか。いやあ、それなら来甲斐があるなあ。あははは」

殊更に優しく言葉を継いだ恭介に、それをどう取ったものか、さやかは頬を朱に染めた。

「そうだ。今日は僕が持つてる音をさやかに見せてあげるよ」

言って、恭介は机から先日とは別のプレイヤーを取った。

腿の上に置いて畳まれている蓋を開けると、小さな液晶画面がある。DVDプレイヤーだった。

セットしたディスクは白無地のもので、とあるコンクールの名前がマジックで書かれていた。

「これって、恭介の？」

「僕も出たことはあるけど、これは別の人」

はい、と渡されたイヤホンを分け合って耳につける。

体が触れそうな距離感にはまだ慣れなかった。

繊細な恭介の指が、三角形の印字されたボタンを押す。

コンクールの映像をさらに編集して作ったディスクだったらしく、すぐに目当ての人物が映された。

銀色の髪と赤紫の瞳を持つ少年。

彼はヴァイオリンを構え——弾き始めた。

サン＝サーンス最後のヴァイオリン協奏曲、ヴァイオリン協奏曲第3番口短調作品61から第1楽章。

コンクールの課題曲とされている曲だ。

流れ出した音。その奔流に、さやかは圧倒された。

美樹さやかという少女は、その立振舞から意外に思われることが多いのだが、恭介との交流を通じてクラシックなどの音楽にそこそこ造詣が深い。

有名所ならば曲名を聞いてさりと作者を答えることもできるし、演奏の良し悪しを解することもできる。

だから、彼女にはわかった。

ステージ上で光を浴びる銀髪の少年の演奏が、素晴らしいものであると。

少なくとも、多少耳の肥えた一般人であるさやかには、プロと呼ばれるヴァイオリニストと比べても何ら劣っていないように思えた。

「この人、何者なの？」

「夜神渚。確か、中学一年生」

「中一！？」

驚いて、さやかは画面に映る少年をまじまじと見つめた。

言われて見れば、確かにそれくらいの小さな少年だ。

けれど、彼の奏でる音には、ありえないほどの技巧や経験が込められているようだった。

それは、その才能は、賞賛されうるものであるという枠を超えて、少々異質にすら感じられた。

「ね、恭介……」

「彼は、本物の天才だよ。僕の目標——いや、理想、かな」

「……ん、そうなんだ」

さやかはまだ話しかかったけれど、恭介が目を閉じて聴覚に集中する様子を見せたのを見て、口を閉じた。

渚が紡ぎだすメロディが、静かに流れる。

ふと、耳を引っ張られたような感触を覚えて、さやかは目を開いた。

正確には、引っ張られたのは耳ではなく、イヤホンだ。

さやかから見えないように窓の方を向いていたけれど、恭介の頬

を滑った涙がシーツに染みを作るのが見えていた。

今はもう彼の思うようにならない、包帯を巻かれた左手の指が、流れる曲を追うように震えている。

上条恭介はヴァイオリニストだった。

天才、夜櫛渚には及ばずとも、その将来を見込まれる才能を持っていた。

けれど、それは過去の話になろうとしていた。

事故で負った怪我は未だ癒えず、治ったとしても、リハビリに、そして練習でできなかった時間を取り戻すのにどれだけの時間がかかるだろう。

ひっそりと涙する恭介に、さやかはかける言葉を持たなかった。さやかは思う。

本当に奇跡を必要としているのは、彼のような人なのだ。

命をかけるに相応しい願いを持っている人。

でも、男である恭介には、魔法少女になるチャンスは、ない。

（奇跡を起こすためには、誰かが、恭介のために奇跡を願わないといけないんだ――）

深夜に、杏子はふと目を覚ました。

とあるホテルの一室。体を起こすと、髪が引つ張られる感触があった。

「…………キョーコ…………」

杏子の髪を握り締めて寝ているゆまが、眠ったまま彼女の名前を呼んだ。

杏子はゆまにシーツをかけ直してやって、その寝顔を見下ろした。頭に浮かぶのは、一つの疑問。

（キユウベえは、何でゆまに目をつけた？ 織莉子ってのは何者だ…………？）

キュウベえ。少女と契約を交わして魔法少女へと変える、謎の小動物。

杏子がキュウベえについて知っていることは少ない。

だが、素直に全幅の信頼を預けられる相手でないことは知っていた。

ゆまに魔法少女の素質があると言ったキュウベえは、『織莉子の言ったとおり』とも言った。

つまり、キュウベえがゆまを魔法少女に勧誘しに来た裏には、織莉子という存在が絡んでいる。

（魔法少女狩りつても気になるし……何だか妙なことになってきたな）

何か、今までとは違う、今までになかったことが起ころうとしているのを予感する。

ゆまはその何かに関わっていて、杏子はそれに巻き込まれようとしているらしい。

「……やっぱり、関わるべきじゃなかったか」
声に出して呟いてみる。

眠っているゆまには届かなかったようで、彼女はくうくうと寝息を立てていた。

関わるべきではなかったとして、どうしろというのだ。

それがたった一つの縁よすがだと言うように、燃えるような赤い髪を握り締めた小さな女の子を、今更捨て去ることができるだろうか。

少女の形をした面倒事だというのに、それはひどく難しい作業であるような気がした。

と、そのとき、何かガラスが砕けるような音が聞こえた。

「ちっ。のんびり考え事もさせてくれないのかよ」

舌打ちをして、髪を握っているゆまの指を解く。

ベッドから降り、床に置いてあるビニール袋からあんぱんを取り出して口に咥えた。

髪を纏めてリボンを結わえながら窓に近づいて下界を見下ろせば、

黒々とした呪いが見える。

杏子は窓からベランダに出て、その手すりを躊躇無く飛び越えた。頭から落下していく杏子の体を包む服は、赤い魔法の衣へと変わっていた。

杏子が魔女の結界に突っ込む様子を、その更に上——ホテルの屋上から見下ろす白い姿があった。

「あら、行ってしまったのね」

白を纏う魔法少女の言葉が、終わりを識るがゆえに呟く。

「——かわいいそうに」

蘭草^{いくさ}の薰り高い青々とした畳の敷き詰められた上を、杏子が駆ける。

周囲を色鮮やかに彩るのは、様々に染め上げられた反物だ。

十字架槍が壺やら茶碗やらの九十九神^{つくもがみ}じみた使い魔を蹴散らし、ついでとばかりに眼前に広がる布を切り払う。

藍と紅梅がはらりと散り、その先に髑髏^{どくろ}頭の魔女が正座していた。白牡丹を飾った白骨の頭は大きく、下顎は存在しない。両側に髪が残り、ツインテールのようになっている。

人間なら胴体の中ほどまである頭の下には女物の着物を留める帯が見え、着物の裾からは一本だけしかない足が伸びている。

「はっ、いい趣味してんなっ！」

和装の異形——趣の魔女をせせら笑い、杏子が槍を一閃。

魔女は畳の上から跳ね上がってそれを躲した。

白足袋に下駄を履いた足が床に立つと大人ばかりに背が高くなり、杏子は白い頭を見上げなければならなかった。

巨大な眼窩^{がんか}に、それぞれ『喜』と『怒』の表情を浮かべて口を縫い付けられた顔が、眼球のように現れて杏子を睨めかける。

杏子は槍を肩に担ぎ上げてその目を睨^{かお}み返し、
「まったく、ふざけた顔しちゃってさ」

色々と考えることがあるっていうのに、わざわざこんな近くに現れて、

「お前、空気読めよな！」

踏み込みながら槍を振り下ろす。

趣の魔女はバックステップで逃れ、杏子は突きへと変じてそれを追う。

魔女の足に力が込められ、踏み切った下駄が畳表をささくれ立たせた。

ひらりと魔女が宙を舞い、頭蓋の内側からぬらりと現れた長い舌が、行き過ぎた杏子へ伸びる。

生暖かい舌がぺろりと背中を舐め、杏子はひゃあっと仰け反った。だが、されただけでは終わらない。杏子は目算で後方に槍を繰り出し、顔のど真ん中に石突を叩き込まれた魔女が後ろ向きにひっくり返った。

杏子が振り返り、趣の魔女は足を曲げて器用に起き上がる。

仕切り直しと槍を構える杏子。

そのとき、趣の魔女の体に変化が起きた。

「……nnnnnnnnんんんん——」

魔女が、低い唸り声を発したのだ。

眼窩に埋まった顔。口を縫い合わせる糸が千切れ、口が裂ける。

「𦵇gイイイイいいいゐ銕いいいい」

顔の輪郭まで裂けた口から、およそ意味不明な叫び声が上がった。声とも呼べないその声は、妙に杏子の心に響き、かき乱す。

趣の魔女の髪がぞろりと伸び、束ねられたそれが刃のように変じて危つく光った。

（なんだ……この、嫌な予感）

いつにない不安を覚えながら、杏子は魔女を迎え撃った。

開け放たれた窓から、冷たい夜気が入り込んでくる。

ぶるりと身を震わせて、ゆまは目を覚ました。

寝惚け眼を擦りながら起き上がり、隣を見る。

「キョーコ……？」

そこにいるはずの少女の姿はなく、ただ冷え切った寢床があるだけだった。

ゆまはベッドから降り、周囲を見渡す。

「キョーコ、どこ？ どこに行っちゃったの？」

ベッドの下、バスルーム、クロゼット。

ゆまは手当たり次第に杏子を探し、明らかに人が入れるはずもない冷蔵庫のドアを開けたとき、ゆまの肩に、白い手が置かれた。

「キョーコ……？」

弾かれたように振り返るゆま。

だが、彼女の後ろに立っていたのは、見たこともない、白い魔法少女だった。

「おねえちゃん、だれ？ キョーコの友達？」

「私は織莉子。杏子さんをお探しかしら？」

「っ、うん！ おねえちゃん、キョーコのいるところわかるの！？」

織莉子の服をぐいぐいと引っ張りながらゆまが聞く。

織莉子はふわりと微笑を浮かべ、

「佐倉杏子。果たして彼女は、まだ現世にいるのかしら？」

それとも最早、死神が彼女を連れ去ってしまったのかしら」

「しにがみ……？」

ゆまは知っている。

死神。人に死をもたらすもの。

それは、異形の魔女のカタチをして現れて、ゆまから両親を奪い去ったように、誰かの命を奪っていくのだ。

「死……キョーコが……キョー、コ、が、死……んじゃう……の？」

「彼女は魔女と戦って、戦って、そして——死ぬ運命」

震えながら聞くゆまに、織莉子は笑みを浮かべたまま答える。

「キョーコは、どこ？ どこにいるの！？ おねえちゃん、おしえて！」

「それを知ってあなたに何ができるの？ あなたに彼女の運命を覆せるのかしら？」

ねえ、と織莉子がゆまの耳元に顔を近づける。

笑みを消して、開かれた翡翠色の瞳は、少女を見下す酷薄な光で満ちていた。

「かわいいだけの、役立たずさん」

赤い槍が走り、趣の魔女の髪が根元近くからぱつさりと切り落とされた。

刃のように束ねられた髪が弾け、飛び散る。

「これで、終わりだ！」

大きく腕を引いて、突き出した槍が白骨の額を貫き、そこから上下にヒビが走る。

頭が左右に割れた趣の魔女は、畳の上にどうと倒れ、割れ目からぼろりとグリーンフシードが落ちた。

「あっさり終わったな……やな感じは気のせいかな」

杏子はグリーンフシードを拾い上げ、大きなあくびをした。

「ふわぁーあ、帰ってもう一眠りするかな」

大きく伸びをした、そのとき、パキンと何かが碎ける音がした。

杏子の手の中で碎け散ったグリーンフシードの破片が落ち、杏子の手の中に残るのは一枚の紙。

『は ず れ』

「はぁ！？ お前、ふざけんなっ」

杏子が声を荒げ、紙を槍で一突きにする。

紙が舞い散り、時同じくして結界を彩っていた反物が全て畳に落ちた。

それに変わって、無数の障子が現れる。

「結界が変化してる？」

槍を構え、周囲を警戒する杏子。

その目が、再び立ち上がった趣の魔女を映した。

割れた頭が帯の辺りまでずり落ち、隠されていた胴体が露になる。眼窩に埋まっていた二つの顔は、左右の腕の先についていて、首の上には何も無い。

趣の魔女の頭の中は、空っぽだったのだ。

「なるほど、割れたのは外っ側だけってことが。ならもう一回――」
十字架槍を握り締めて、趣の魔女へ向かおうとする杏子。

その目の前に、障子の壁が立ち塞がった。

「ちっ、邪魔だ！」

杏子が槍を振り上げる。が、それが振られるよりも先に、障子の方が開いた。

開いた先にいたのは趣の魔女ではなく、青々と葉を茂らせ花を咲かせた生垣のような使い魔。

見上げるような大きさの使い魔が杏子に覆いかぶさり、杏子は慌てて飛び退った。

着地すれば、こつんと踵が何かに触れる。

目を向けると、壺のような使い魔がそこにいて、壺の口からお手玉に手足をつけたような使い魔を吐き出していた。

「ちまちまと、うざいんだよ！」

足元に群がってくるお手玉を文字通り蹴散らし、逆手に握った槍の穂先で壺を砕く。

その頭上に影がかかり、

「尾ツほ頬おー」

「肺ほー」

趣の魔女の腕が伸び、それぞれの先についている頭が意味不明な

声を上げながら杏子を襲う。

杏子は大きく後ろに飛び退き、二つの頭は口一杯に藺草を詰め込んだ。

魔女が着地し、蛇のように頭が持ち上がる。

杏子の背後には、生垣の使い魔。そして、どこからか小物の使い魔も湧き出して来る。

「くそつ、挟まれた!？」

前後の敵に杏子が目を走らせる。

趣の魔女は両手を伸ばし、使い魔が杏子を押し包むように迫った。

「やばいな——」

杏子は、そんなことを言いながら肩越しに槍を振りかぶり、

「——なんてね!」

大きく、槍を振り抜いた。

瞬間、槍の柄が無数に枝分かれし、それを鎖で繋いだ多節棍へと姿を変える。

生き物のように縦横無尽に動く十字架が趣の魔女の頭を二枚に下ろし、鎖と柄の嵐が使い魔たちを打ち据えて砕き、最後に生垣の使い魔を貫いた。

「あたしの武器にあわせて攻撃散らしたんだろうけど、範囲攻撃できる槍もあるってことさ。あんた、甘く見すぎだよ」

槍の形を戻し、穂先を生垣の使い魔から引き抜きながら杏子が言う。

趣の魔女は割られた頭から血を溢れさせて、畳に膝をついた。

夜の公園に、少女の荒い息遣いが響く。

「はっ、はあ、キ、キョーコ!」

ゆまは、落ち着き無く周りを見ながら、探し人の名前を呼んだ。織莉子は言うだけ言って姿を消してしまったため、今はゆま一人

だ。

「どこにいるの、キョーコ！」

どれだけ呼んでも、杏子からの応えはない。

魔女の結界に分かたれている二人には互いに声を届ける術はなかった。

「うう……キョーコお……」

暗い公園の中に立ち尽くすゆま。

立ち止まって無人の静寂に包まれると、杏子の死を预言する織莉子の言葉が蘇ってきて泣きそうになった。「ぐす……」

目に涙が浮かんだけれど、何とか泣くのは堪えて、もう一度歩き出す。

と、道の脇にある茂みから、ガサガサと音が聞こえた。

「誰かいるの？ キョーコ？」

ゆまは茂みに近づき、低木の上によじ登りながら向こうを見ようとした。

だが、細い枝ではゆまを支えきれず、体重を預けていた枝が折れてしまう。

ゆまは、顔から土の上に落ちて、あうっ、と声を上げた。

「うう……いたいよお」

こんな痛い思いをしてまで来たのに、杏子はおるか、虫の一匹もいなかった。

ゆまの目に再び涙が浮かび、今度は我慢できずに流れ落ちた。

「キョーコ……どこ？ 早く見つけないとキョーコが……」

「杏子がどうかしたのかい？」

悲嘆に暮れるゆまに、天啓のようにその声は降ってきた。
ゆまが空を見上げる。

光を放つ街灯の上に、赤い目を光らせて、キュウベえが座っていた。

「こんなにてこずったのは久しぶりだね。褒めてやるよ」

槍を腰ために構えて、杏子が趣の魔女に最期の言葉を贈る。

「ま、何の自慢にもなりやしないけどね」

止めの一撃を与えるために、杏子が魔女に向かって走り出す。

「ウぐ虞」

「ヒ魏ギギ」

二つの頭で苦しそうに呻いた趣の魔女は、傷口から止め処なく溢れる血を、杏子に向けて撒き散らした。

「目くらましか？　しゃらくさいな！」

構わず血飛沫の中に飛び込んでいく。

と、血が鞭のように変化し、杏子に絡みついた。

「なっ、変化した！？」

捕らえられた杏子が驚愕の声を上げるが、変化はそれだけではなかった。

杏子の手足に巻きついていている部分が、じゅう、と嫌な音を立て、

次の瞬間、杏子の四肢は溶かし切られていた。

体を支える足も手も失って、鮮血を散らしながら杏子の体が地に落ちていく。

（まいったな、これ、死ぬじゃん……。しけた人生だったなあ）

大口を開けて喰らいついてくる二つの首が、妙にゆっくり見えた。

（ちよっとくらい、幸せつてのを見てみたかったけど……。まあいいや。もう、終わりだし）

迫ってくる死を、冷静な瞳で杏子は見つめた。

大した未練など無い。

死体も見つかからないところで小娘が一人死んだところで、世界はなにも変わりはない。

独りになって生きてきた少女が、独りで死ぬ。

たった、それだけのことだ。

ゆるゆると瞼を落とし、

——だめッ！

吃驚するくらい必死な声を、聞いた気がした。
欠落したはずの手足の感覚が蘇る。

手にした武器を握り締めて、杏子は目を開いた。
ガチンと噛み合う牙。

だが、そこに杏子はいない。

趣の魔女の二つの頭が、不思議そうにお互いの口の中を覗きあった。

その周囲を幾重にも取り囲む、長い鎖。

頭も足も胴体に縛り付けて、団子のようになった魔女が、空中に投げられる。

絡みついた鎖が引き戻され、趣の魔女は独楽のように回転した。
鎖が繋がれて、取り戻した姿は紅の槍。濃密な魔力が、燃え立つ炎のように槍を取り巻いている。

杏子は、両足で地に立ち、頭上で両手に槍を握り締めた。

弓のように体を反らし、

「今度こそ……終わりだよ！」

破壊の魔力が渦巻く槍が解き放たれ、趣の魔女を貫く。

槍は魔女を貫いたまま天井にまで突き刺さり、そのどちらもを粉砕した。

結果が崩壊したのを確認して、杏子は変身を解いた。

「命拾いしたみたいだな……でも、なんであたしは生きてるんだ？
自力でどうにかなるダメージじゃなかったはずなのに」
首を捻るが、さっぱりわからない。

助かったのは結構なのだが、その理屈がわからないというのも不気味だった。

「勝利の女神でもついてるってか？ くだらない」
馬鹿馬鹿しいと笑い飛ばそうとした台詞。

けれど、

「そうだよ」

彼女の言葉に返事があつた。

小柄な影が、杏子の前に姿を見せる。その姿を見て、杏子は凍りついたように動きを止めた。

白とグリーンの丈の短いワンピース。その下にはフリルのついたドロワーズ。

ミトンの手袋とネコミミのついた帽子が全体的に猫っぽいシルエツトに仕上げていた。

首元を飾るリボンの真ん中には緑色の珠が光るが、これは飾りで、ソウルジェムは首の後ろ側についている。

「やったね。キョーコ」

にこにこ笑って杏子を見上げる魔法少女は、ゆまだった。

「キョウベえのゆったとおりだ！ ゆまだって戦える！。あのね、ゆまが使えるのは『治癒魔法』ってゆう魔法なんだって」

とととと杏子に近づいて、えっへんと胸を張った。

「キョーコが怪我したらいつでも治してあげるね」

凍り付いていた杏子は、ようやく動き出す。

パンツ。

食いしばった歯を鳴らして、振り上げた手が、ゆまの頬を叩いた。

「え……」

褒めてくれるって思ったのに――

何が起こったのか理解できず、呆然となったゆまの変身が解ける。

「ゆま。何で、魔法少女になった？」

「だって……」

俯いて、答えようとしたゆまの肩を、杏子が掴んだ。

「だってじゃねえ！ 言っただろうが！ 魔法少女になんかなるな
って――！」

杏子の手には、肩に指が食い込むほどの力が込められていた。

ゆまが見上げた表情には、ただ怒りが満ちている。

今まで怒られたのは、食べ物を粗末にするなど言われたとき一度きりだったが、今の杏子はそのときよりずっと恐い。

「だって……だって……っ」

ゆまの頭の中を、沢山の言葉が駆け巡る。

『お前なんか、何も出来ないんだ！』

『この、役立たず！』

「ママが、ゆったもん！」

『あなたに何ができるの？』

『かわいいだけの、役立たずさん』

「織莉子おねえちゃんだってっ、ゆった！ ゆったよ！」

頭を抱えて、ゆまは絶叫した。

その狂態に、さすがに杏子も絶句する。

「やくたたずじゃない……役立たずなんかじゃない！」

痛めつけられて、捨てられた記憶に震え、ゆまは自分の体を抱いた。

「キョーコの役に立つ！ 言うこと何でも聞くよ、好ききらいだって言わない！ だから——」

ゆまは、地面にくずおれる。

泣き濡れた顔を上げて、必死に乞うた。

「ゆまを、ひとりにしないで」

後はもう言葉にならず、ゆまは袖で顔を覆ってすすり泣いた。

杏子がゆっくりとゆまに近づく。

「バカだなあ」

杏子は思い出していた。

もう、随分昔のことに思える、一人の少女の記憶。

父と母と、そして幼い妹に置いていかれたその少女も、ひとりにしないで願ったことを。

「他人のために魔法少女になんかあったって、なんにもなりやしないのに……っ！」

俯きがちに杏子が発した言葉には、常にはない揺らぎがあって、

杏子の顔を下から見上げたゆまは、驚いて立ち上がった。

「キョーコ……？ 泣いてるの？」

どうしようとおろおろするゆまの頭に、杏子が手を置く。

頭を撫でてやりながら、杏子は言った。

「ばーか。泣いてなんかいいよ」

それから、顔を上げて、そこに彼女の姿を見ようとするように虚空を睨みつけた。

ゆまを魔法少女に変えた、その黒幕たる魔法少女——織莉子。

（このオトシマエは、必ずつけさせてやる！）

「キョーコ？」

「……帰って寝直すぞ、ゆま」

杏子はゆまに手を差し出した。

その手をまじまじと見つめて、そして、

「うんっ！」

ゆまの顔に大輪の笑顔が咲いた。

次回、第7話「もう、何も怖くない」

第6話「泣いてなんかないよ」（後書き）

まどか、マミさんに浮気するの巻。原作と違ってまどかが勧誘されてないので、こんな感じで仲良く。

自分で書いておいてなんですが、キユウベえが勧誘してないだけで随分違いが出るなあ……

しかし、まどかとマミさんが仲良くなると、何か嫌ーな予感がするわけで。

さやかも何か思うところがあつたようで。全体的に悪い方のフラグがたっております。

原作で魔法少女たちがどうやって持ち歩いているのかよくわからないグリーンフシード。

よくわからないので、よくわからないまま曖昧に書いてあります。

求ム、情報。

杏子&ゆま編は今回で終了。こちらも独りじゃない回。

次回登場時には合流できるといいなあ。

そんな感じで、ようやくまどかサイドの話が進み、みんなのトラウマ回「もう、何も怖くない」に突入です。

が、その前に断章が入るかもしれません。

断章3「悔しいよね」

夕暮れ頃、学校から帰ってきた夜柗汀は、家の近くで母親とすれ違った。

より正確に言うなら、走ってきてぶつかりそうになった母親を危ないところで避けた、になる。

母親は腕に大量の紙を抱えていて、娘と会ったというのに挨拶もなく走っていく。

もしかすると、ぶつかりそうになったのが娘だということにすら気づいていないのかもしれない。

彼女は今、渚のことしか目に入っていないのだから。

「けれど、それももうすぐ終わるよ」

母が覚束ない足取りで走るのを見ながら、汀は呟いた。

母親の手から落ちた紙の一枚が、汀の足元にひらりと滑り込む。

行方不明になった人を探して欲しいと訴えるビラ。

紙の半分を使った大きな写真には、汀とそっくりな片割れの顔が映っている。

「ふん……」

汀は、その顔を踏みつけて、家へと足を進めた。

「ただいま。……うわ」

家に入った汀は、家の中の惨状に顔をしかめた。

玄關に、母が配っていたビラが山積みになっている。

何千枚あるかわからないそれは、母の心配を通り越して、いつそ狂気じみて見えた。

夜柗渚が行方不明になって数日。

まだ数日。

しかしそのわずかな日数の間に、母は随分とまともではなくなっていた。

仕事にも行かず、食事や睡眠をとっているかも怪しい。

大量のビラを印刷し、昼夜を問わずそれをばら撒きながら探し回っている。

汀はリビングに顔を出してみたが、そこも大量のビラに占領されていて、人の姿はない。

父は、汀のことを気遣い、渚との扱いの差に苦言を呈することのできる『まとも』な人間だが、妻の危なさを見かねてつきあっているはずだった。

テーブルに食事代として置かれた千円札を財布にしまいながら、どうせ今日も帰らないのだろうと思う。

それは、夜中に抜け出して魔女の相手をしている汀にとって好都合なことだった。

何かを抱きしめるように両腕を広げた、アラバスターの肌を持つ巨大な女神像。

その顔は慈愛の微笑みを浮かべた金属製の仮面に隠されている。それに対するのは銀の装束を纏う魔法少女——夜神汀。すなわち女神像は魔法少女の敵。魔女である。

抱擁の魔女。

魔女の背中から、副腕——先端が五指に分かれた、白いリボンのような手——が無数に伸びる。

汀は、それ目掛けて手にした鏡を放った。

無限に伸びる鎖に繋がれた八辺の刃は、抱擁の魔女の副腕をまとめて切り落とす。

それが痛みを感じさせるのか、魔女は、微笑を浮かべた仮面の目から、真っ赤な涙を零した。

だが、汀は無慈悲に、引き戻していた鏡を再度投擲した。

鏡は、抱擁の魔女の背中にまた生えてきた副腕を切り裂く。

魔女が泣き、またぞろ背中に手を生やす。

汀はそれを片っ端から切り落とす。

繰り返す。

繰り返す。

汀の攻撃は魔女の副腕にだけ向けられる。

それでは倒せないと知りながら。

なぜなら、汀にとって大切なのは『魔女を倒す』ことではなく、

『魔女と戦う』ことだから。

自らが彼より優れた存在だと確認するために、汀は抱擁の魔女を甚振り、傷つける。

「……は、はは」

その魔女との戦いは、汀の精神を高揚させ、彼女の口から笑い声が漏れた。

魔法少女になって、ボクは特別な存在になった。

邪魔だった渚も、もういない。

今はまだ、母さんは渚ばかり見ているけれど、時間が経てばそこにいるボクを見てくれる。

渚。

全てにおいて完全であつた、全能なる神の如き弟よ。

もう、君は帰れない。渚きみがいた場所には、汀ボクが立つのだから。

[illegible]

哄笑を上げて、抱擁の魔女を切り刻む汀。

その姿はまるで——魔女のようで。

魔女が滂沱と血の涙を流す姿は、渚の嘆きのようだった。

天高く投げられた鏡が、鎖に引かれて落ちる。

雷の如き一撃は、魔女の頭から股までを真っ直ぐに断ち切った。

単純なサイズ差によって左右に分断されることはなかったが、抱擁の魔女は地響きを立てて地に沈んだ。

「あはははっ！　まだ、まだだよ！　このぐらいじゃ、終わらない

よ！ 終わらせてあげないよ！」

嗤って、汀はさらに魔女を傷つける。

飽きもせず、延々と、刃を投げ続けた。

断章3「悔しいよね」（後書き）

渚の良き母が、汀にとってはそうでないように、人には色々な側面があるわけで。

好きなのに嫌いだとか、あるいは、嫌いなはずなのに好きだとか。人間は、相反する二つの感情を、相殺することなく同時に抱えることのできる面倒な生き物なのです。

もしも、反する感情が一本の数直線状にあったのなら、世界はもう少し単純だったのではないでしょうか。

……とか書くと固い話っぱいですが、要するにあれです。

もしそうだったら、最初は敵だけど後で仲間になるキャラの葛藤とかがなくなって風情がないなーって話。

書き終わって気づきましたが、結論が今回の内容とあんまり関係ないですね。……まあいいか。

第7話「もう、何も怖くない」

夜神渚の演奏を聞いた後、しばらく世間話をして、さやかは恭介の病室を辞した。

「じゃ、また来るね。バイバーイ」

笑顔で手を振って、引き戸を閉める。

白いドアで、小さく手を振り返している恭介の姿が見えなくなつて、さやかは作っていた笑顔を消した。

と言うよりは保てなかったと言う方が正確だろうか。勝手に溜息が漏れる。

「っ」

無意識の行動に気づいて、さやかはぱつと口を押さえた。

部屋の中の恭介に聞こえていないだろうかと不安になったが、まさかドアを開けて確かめるわけにもいかない。

さやかは口を押さえたまま、耳をドアに近づけていく、と、

「あら、上条君のお見舞い？」

「ひゃあ！」

背後からかけられた声に、さやかは文字通り飛び上がった。

慌てて姿勢を正しながら振り向くと、女性の看護師が二人立っている。

さやかは、愛想笑いを浮かべて「あ、ええ、まあ」と曖昧な返事をした。

幸い、看護師たちはさやかの態度について言及するつもりはないようで、

「いつも来てくれてありがとう。また顔を出してあげてね」と言った。

さやかは、はいと頷き、看護師に頭を下げて病室の前を立ち去った。

「よく来てくれるわね、あの子」

さやかの乗ったエレベーターが下りていくのを見ながら、看護師が言った。

「助かるわ。難しい患者さんだしね。励ましになってくれてるといいんだけど」

「事故に遭う前は天才少年だったんでしょ？ ヴァイオリンの」

「ええ。でも、歩けるようになったとしても、指の方はね……。もう二度と楽器を弾くなんて、無理でしょうね」

沈痛な面持ちで、看護師の一人が言う。

上条恭介本人は、まだその事実を知らない。

だから必死にリハビリに励んでいるが、いつかはその事実を知るときが来るだろう。

その時が来たときのことを思うと、彼女の心は沈むのだった。

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺

第7話「もう、何も怖くない」

ママは、学校の屋上から登校してくる生徒たちを眺めていた。

彼らの多くは、仲の良い者同士でグループを作って登校してくる。

楽しそうに喋っていたり、嫌な授業でもあるのか、みんなで憂鬱そうな顔をしていたり。

そういうものは、ママにとって縁遠いものだった。

巴ママは孤独な少女だ。

嫌われてはいない。クラスメイトに話しかければ、普通に相手をしてもらえるし、逆も然りだ。

けれど、何か用でもなければ、ママが話しかけられることは無いし、ママも話しかけない。

彼女とクラスメイト、延いては他人との間には壁がある。

マミ自身が作り上げた壁が。

偏に、魔法少女であるがために。

魔法少女という秘密を持つから。

それが世間一般の普通とは違うから。

秘密を守り隠し通すために、距離をおいていた。おかなければならなかった。

魔法少女と普通の少女の顔を使い分けて平然と日常生活を送る魔法少女がいないわけではないが、マミにはそれができなかった。

だから、巴マミは孤独だ。

いや、孤独だった。

マミは眺めている。

学校へ入ってくる子供たちを。その中にいる一人の少女を。

鹿目まどか。

友人である美樹さやかと、マミは会ったことのない少女の二人と登校してきていた。

まどかは落ち着きなくあっちこっちへと視線を走らせたり、人とすれ違うときに背伸びして襟元を覗き込んだりしている。

友人にその行動について問われたのか、なんでもないという風に手を振った。

マミはそれを見てくすくすと笑う。

先日マミに教えてもらったことを実践しているようだが、その張り切り具合が『初めてのお使い』のような風情で、微笑ましくも可愛らしい。

周囲を巡るまどかの視線が校舎の壁をなぞり、屋上に立つマミの姿を捉えた。

まどかは、マミに向けて片手を大きく振る。

それに気づいたようで、まどかの友人たちも屋上へと目を向けた。マミは少し驚いたが、胸の前で手を振り返す。

不思議な少女だと、マミは思う。

魔法少女であると知って、畏れず、拒まず、魔法少女に理解を示し、真っ直ぐに慕ってくれる少女。

友達になってくれた少女。

彼女はマミの孤独を埋めてくれた。

——しかし、だ。

まどかに埋められたのは、ほんの一部でしかない。

なぜなら、まどかはただの人間だから。

人間の孤独を癒せても、魔法少女の孤独を癒せない。

魔法少女でないまどかに背中では預けられない。

死と隣り合わせである魔女との戦いの最中、マミは独りのままなのだ。

寄り添っているように見えても、その実、二人はまだ対向車線に立っていた。

「鹿目さん……」

マミは意識の外で、振っていた手を伸ばしていた。

指先がフェンスに触れてカシャンと音を立て、マミは熱いものに触れたように手を引いた。

もう触れられないと思っていた温かさに触れたから。

小さな温もりを得てしまったから、もっと大きなものが欲しくなる。

望んでしまう。

まどかが、魔法少女に——

「だめよ、巴マミ。お友達を危険に巻き込むつもり？」

意識して口に出し、己の心を牽制する。

けれど、もし、まどかが魔法少女になるべき何らかの理由が——契約の奇跡を望む事態が訪れたり、あるいは、まどかに魔法少女としての高い適正があったりしたとして、そのときにも彼女を魔法少女へと勧誘しないという自信が、マミにはなかった。

放課後である。

荷物を詰めたスクールバッグを持って、まどかは悩んでいた。視線の先には、背筋をぴんと伸ばしたほむらの後姿がある。

いつもなら、この後ほむらに声をかけて、一緒に帰ろうなどと誘う（そして断られる）のだが、今日は何となく声がかけにくい。

と言うのも、まどかがほむらについて知っている数少ない事柄の一つが、魔法少女を嫌っているということだからだ。

前に顔を合わせたときのマミとの関係はお世辞にも良好なものではなかったし、そのマミに協力しているとバレたら怒られそうだった。

だが、ほむらと友達になりたいという気持ちだって嘘偽りの無いもので、その板ばさみになってまどかは悩んでいるのだ。

（……今日は、やめとこうかな）

考えて、まどかはそう結論を出した。

ほむらと話さなければいけないとは思っている。

しかし、今それをするだけの覚悟が決まっていない。

マミとほむら。仲の悪そうな二人のそれぞれにいい顔をしようとしているという罪悪感が——二人のどちらにも誠実に向き合っているまどかが本来感じる必要の無いものなのだが——まどかを躊躇わせた。

別の方向を向いている二人の間で、それでもどっちも大切なんだと声を大にして言い切るための、強い気持ち欲しい。

先延ばしにするだけでは解決しないけれど、心を定めるために時間が必要なこともまた事実なのだ。

「まどかー。今日はどうすんの？」

さやかが暗にほむらのことを示しながら声をかける。

「えっと、どうしようかな。さやかちゃんは？」

「あたしはお見舞いに行くつもりだけど」

「あ、それじゃ、わたしも一緒に行っていいかな？」

「まどかも？」

意外そうに聞き返すさやか。

恭介とまどかの関係は単なるクラスメイトでしかなく、お見舞いにまどかがついてくることは珍しかった。

当然ながらまどかの本当の目的は、病院への道程や病院での魔女搜索である。

「大丈夫、さやかちゃんの邪魔はしないから！」

「邪魔って、何言ってるの。ちょっ、まどか!？」

「ほら行こう、さやかちゃん」

放課後の教室からは少しずつ人の姿がいなくなっていた。

人数が少なくなった部屋ではむらと顔を合わせるのどこか気まずい。

さやかを引っ張って、まどかが教室の出入り口に向かう。

ほむらの席の近くを通り過ぎるとき、まどかは、

「ほむらちゃん、また明日」

ほむらの顔は見られなかったが、なんとか、それだけは口にした。さやかの手を引いたまどかが教室を出て行く。

いつもと逆の珍しい二人の様子を、ほむらは相変わらずむっつりと眺めていた。

エレベーターのドアが開いて、見舞い客や患者と一緒に、まどかが病院のロビーに出てくる。

まどかはさやかと共に恭介の病室を訪れたが、二言三言会話を交わして、すぐに病室を出ていた。

一つにはさやかが想いを寄せているらしい相手——本人に聞いても否定されるが、そうとしか見えない——と二人きりにしてあげるため。

そしてもう一つに、マミから任せられた魔女搜索のためである。

病院内の行ける場所は既に見回り終え、まどかは病院の外に向かった。

正面玄関から建物沿いに回り、自転車置き場の近くまで来て、まどかは立ち止まった。

「あ……」

病院裏手の壁に、昨日マミに見せてもらったものが突き刺さっていた。

魔女の卵。グリーンフシード。

突き刺さった部分から、黒い光が壁に根を張るように伸び、グリーンフシード本体は白く明滅している。

それは孵化の前兆。

今まさに、魔女が生まれようとしていた。

「グリーンフシード……。マミさんに、連絡しなきゃ！」

まどかは、バッグのポケットから携帯を取り出し、ふと、マミの言葉を思い出した。

『もし見つけたら、危ないからすぐにその場を離れて』

「離れて、から」

まどかはマミの言葉を反芻して、走り出した。

走りながらアドレス帳を開き、一番新しく登録された番号にコールする。

呼び出し音が鳴り始めるまでのわずかな時間すら、ひどくじれったい。

（はやく……はやく……！ ここには、さやかちゃんと上条君もいるのに……！）

「もしもし？ 鹿目さん？」

マミが電話に出てくれた瞬間、まどかは挨拶も忘れて、叫ぶように言った。

「マミさんっ、病院にグリーンフシードが！」

「——っ」

電話の向こうで、マミが驚いた気配が伝わる。

マミは、努めて落ち着いた声音を作り、まどかに言った。

「大丈夫、すぐに行くわ」

まどかの返事を待たず、電話は切れる。

切れる瞬間の息遣いで、マミは既に走り出していたのがわかった。

まどかは、祈るような気持ちで携帯を両手で握り締めた。

まどかが立ち去った後、病院の裏に一人の少女の姿があった。

少女は、壁のグリーンシードを見て、笑みを浮かべる。

「グリーンシード見つけたっ」

少女は、壁に駆け寄り、グリーンシードに手を伸ばす。

彼女の指先が触れそうになった、瞬間。

壁に走る魔力の根が、脈打った。

魔力が空間を侵食し、異界を作り出す。

気がつけば、魔女結界に巻き込まれて、少女の姿は消えていた。

た、と足音。

また新たに、一人の少女が姿を見せる。

黒髪の少女、呉キリカ。

「魔法少女みーっけ」

にやりと笑い、キリカは己の黒いソウルジェムを掲げた。

オレンジ色に染まった空の下を、マミが走ってくる。

その姿を見て、まどかは安堵のあまり座り込みそうになるのを耐えなければならなかった。

「マミさん！」

「鹿目さん、グリーンシードは？」

「こっちです！」

まどかは、マミを先導して走り出した。
駐輪場の側まで戻り、

「ここに……あれ？」

壁を指差すが、そこにあっただはすのグリーンフシードがなくなっている。

「グリーンフシードが、ない？」

「いいえ、なくなったんじゃないわ」

マミは、壁へと進み出ると、左手を前に出した。

中指にはめた指輪が光り、壁にぬいぐるみのような形のシンボルが浮かび上がる。

「結界を作って、その中に移動したみたいね」

「それじゃあ、魔女が……」

「大丈夫。まだ魔女は活動していないわ」

そう言って、マミはまどかに微笑みかけた。

「魔女は生命力を吸い上げるから、病院に憑かれると危険なの。鹿目さん、お手柄よ」

「えへへ。役に立てたなら、よかったです」

褒められたまどかが、くすぐったそうに笑った。

マミは顔を引き締めて、

「それじゃ、行ってくるわ」

魔女のシンボルが浮かぶ、結界の入り口へと歩を進める。

「あの、マミさん！」

「なあに？ 鹿目さん」

結界に入る一歩手前で呼びかけられ、マミは顔だけ後ろに向けた。

「わたし、何も出来ませんけど……その、頑張ってください」

マミは、目を閉じて、まどかからの言葉をゆっくりと咀嚼した。

口元に、嬉しいな表情の片鱗が見える。

「ありがとう、鹿目さん」

マミは目を開いて、宣誓した。

「すぐに片付けちゃうから、ここで待ってて」

「……はい、マミさん。待ってます」
その声を背中に聞きながら、マミは魔女の結界へと足を踏み入れた。

結界のモチーフは、病院とお菓子だ。

地形は病院。巨大なクッキーやプリンが家具のように置かれ、注射器や手術道具がそれを装飾している。

例によって歪な、いるだけで精神に変調を来たしそうな空間だ。マミは、結界を奥へと進む。

何枚目かのチョコレートのドアを抜けると、薄暗い通路に出た。壁面にはびつしりと薬ビンが並び、天井から飴とカプセル剤が降ってきている。

不気味という言葉がこれ以上なく似合う場所だが、そこを進むマミの足取りは不思議と軽やかだった。

その原因が、一人の少女だということは、想像に難くない。
（頑張つて、なんて。そんな一言で、こんなに励まされるなんて、思わなかったな）

それだけで、孤独でないと思える。
貰った言葉の分だけ、まどかと繋がっている気がした。

魔女結界の最深部。

明々と灯っていた『手術中』の赤ランプが、消えた。

鉄格子のような扉の奥で、陶器が割れるような音。

——魔女が、孵化した。

エレベーターの扉が閉じ、一人だけの乗客を下へと運ぶ。

下っていくエレベーターの中で、さやかは自分の手を見つめていた。

（何で、あたしじゃなくて、恭介なんだろう）

今日も、恭介の怪我の具合には変化はなかった。

悪くなっていないし、良くもなっていない。

さやかは、リハビリに行く恭介を見送ってきたところだった。

恭介の行っているリハビリは歩行。つまり、足。

手の怪我に関しては、まだリハビリすら始められない状態だ。

さやかは、左手の指を一本ずつ折り畳み、また伸ばす。

（あたしの指なんていくら動いても意味なんか無いのに……）

やりきれない思いに息を吐き、同時にエレベーターは一階に到着した。

エレベーターから降りて、さやかはロビーにいる人の顔を見回す。

「あれ……まどか？」

その人々の中に、待っていると思った友人の顔はなかった。

ママが最後の扉を開く。

そこを抜けると、巨大なホールケーキの縁だった。

ケーキの中心部が繰り抜かれて、さながら円形闘技場のような姿になっている。

中心部に長い長い足のテーブルと椅子があり、椅子の上に、可愛い女の子のようなぬいぐるみが置かれていた。

フィルムに包まれたキャンディーのような頭のそのぬいぐるみこそ、この結界の主。お菓子の魔女である。

魔女の性質は、執着。欲しいものすべてを得ようとする魔女。

お菓子を生み出すという能力を有しており、座っている椅子の足元には生み出されたケーキが山と積まれている。

スポンジの床には、巨大な目玉に2本の足とねずみの尻尾をくっ

つけたような使い魔が歩き回っていて、お菓子の魔女の好物でありながら自分では生み出せないチーズを探してうろついている。

「見つけた。今日という今日は、速攻で片付けるわよ！」

指輪のはまった手をかざす。

ソウルジェムから黄色の光が溢れ出し、マミの体を魔法少女の衣装が包んだ。

ケーキの縁から姿を見せると、使い魔たちが大きな目玉を一齐にマミに向けた。

マミは、マスキットをばら撒きながら飛び降り、床に円を描いて突き刺さったマスキットの中心に降り立った。

無数の使い魔がマミに群がり、それを砲火が迎え撃つ。

三百六十度全方位から襲い掛かる使い魔たち。

あるものは銃弾に撃ち抜かれ、あるものは銃身で殴られ、またあるものはマミに蹴られ、姿を消していく。

（体が軽い……こんな幸せな気持ちで戦うなんて初めて）

マミの攻撃は、まるで嵐のようだった。

しかし、立ち位置は最初から一歩も動いておらず、荒々しさよりも踊るような優雅さを感じさせる。

全てのマスキットが使い捨てられ、マミの嵐舞が終わりを告げたとき、使い魔は掃討されていた。

マミは、新たに一丁のマスキットを作り出し、銃口を魔女に向けた。

お菓子の魔女は、椅子の上で微動だにせず、まるで本物のぬいぐるみのようだった。

だが、相手は常識の枠に収まらない存在だ。

いくら可愛らしくても、怖ろしい存在なのは間違いない。

今まで、魔女と戦うときは、いつだって怖かった。

一人で虚勢を張って強がって、何とか戦い抜いていた。

（でも、もう、何も怖くない。私、一人ぼっちじゃないもの）

今は孤独でも、帰ったなら、待っていてくれる人がいる。

——だから早く、早く。

マミは、マスキットの銃口付近を両手で持ち、バットのよう椅子の足にスイングした。

長い足がへし折れ、お菓子の魔女が落下する。

「生まれたばかりのとき悪いけど、一気に決めさせてもらっわよ！」

——早く、魔女を倒して、帰ろう。

体を一回転して、もう一振り。

今度は、落ちてきた魔女を捉え、壁まで吹き飛ばす。

マスキットを複数作り出して、連射。

胴体を穴だらけにしたお菓子の魔女が、力なく床に落ちる。

さらに、壁に穿たれた弾痕からリボンが伸び、お菓子の魔女の胴体を縛って吊り上げた。

「これで、お終い！」

マミの前に、白亜の大砲が現れる。

それは、マミが使う魔法の中で最大の威力を誇る攻撃魔法。

「ティロ——」

砲撃を解き放つキーワード。

しかし、それを最後まで言うことはできなかった。

胴体を縛り上げられていたお菓子の魔女が、締め付けられるままに潰れる。

そして、胴体が潰れた分、中に詰まっていたものが口から溢れ出した。

それは、綿なんて可愛らしいものではなく、お菓子の魔女の真の姿とも呼ぶもの。

明らかにぬいぐるみの中に収まらない体積の、巨大な蛇。

黒い体には赤い斑点があり、先端の顔の部分だけが白くなっている。

頭には赤と青の触覚のようなものがあり、その下にカートウーン・アニメのキャラクターのような目鼻がくっついていた。

お菓子の魔女は、空中をうねうねと滑り、瞬き一つの間マミの

眼前まで迫った。

真の姿を見せたお菓子の魔女が、大きく口を開く。
鋭い三角形の牙が並んだ真っ赤な口内に、毒々しい青い舌が蠢いていた。

マミが目を睜る。

指一本、動かす時間もなかった。

「帰らなきゃ——」

——鹿目さんが、待ってるのに。

そう呟いたマミの頭が、お菓子の魔女の口に吸い込まれて——
ぼとり、と頭が落ちた。

「巴マミは結界の中にいるのね」

「え!？」

マミを待っていたまどかは、突然真横からかけられた声に驚きの声を上げる。

いつの間に接近していたのか、ほむらがそこに立っていた。

「ほむらちゃん……」

「あなたを連れて行かなかったのは懸命な判断だわ」

靴音を立てて、ほむらはまどかの前に進み出る。

壁に手をかざすと、結界の入り口が浮かび上がった。

「ほむらちゃんも、行くの？」

「ええ」

まどかの問いに、ほむらは短く頷く。

「えっと、気をつけてね、ほむらちゃん。マミさんと、一緒に帰ってきて」

「……この魔女は、縛る魔法を得意とする巴マミとは相性が悪い、天敵とも言える力を持っているわ」

ほむらは、まどかに背中を向けたまま答えを返す。

「魔法少女の死なんて、珍しくないわ。最悪の覚悟はしておくことね」

「そんな——」

淡々と次げて、ほむらは結界の中に入っていく。

思わずまどかがほむらの後を追うが、入り口はすぐに姿を隠し、魔法少女ならぬ身のまどかには、どうすることもできなかった。

頭が落ちる。

閉じかけていた牙が引っかって、マミの衣装の胸元と背中が破れた。

マミは目を見開いたまま、切り落とされたお菓子の魔女の口の中に立ち尽くしている。

震える手で首を撫で、胴体にくっついていることを確かめた。

「……助かったの？」

あの瞬間、死を覚悟した。

事実、あのままではマミは頭を食いちぎられて死ぬはずだった。なぜ、と考え、しかし回答が出るより先に状況が動く。

頭を切り落とされて空中に固まっていたお菓子の魔女。

のっぺりとした切断面が蠢き、頭の無い体を脱ぎ捨てるように、頭を備えた新しい体が現れる。

お菓子の魔女は新品の牙を光らせて、再びマミに喰らいつく。

だが、その歯が噛んだのは空気だけで、お菓子の魔女は眉を寄せ
る。

死の顎に捉まるより先に、マミの体に銀色のチェーンが巻きつき、後ろへと引っ張っていたのだ。

チェーンが外れ、よろめいたマミを、そのチェーンの持ち主である魔法少女が抱きとめる。

「危ないところだったね」

片腕の中に抱いたマミに、魔法少女が言う。

彼女は、銀を纏う魔法少女——夜柙汀。

危ういところで、汀の投げた鏡刃がマミの命を繋いだのだった。

お菓子の魔女が視界に魔法少女たちを捉え、首を伸ばす。

「マミ。その子を頼むよ」

「あ、え？」

まだ状況を把握できていないマミを、汀は自分の後ろに軽く突き飛ばした。

そこには、全身に裂傷を刻み、血で赤く染まった魔法少女がぐったりと横たわっている。

マミは知らないが、まどかがグリーンシードの前から立ち去った後でそれを狙ってきた魔法少女だ。

「この子……魔女にやられたの？」

「魔女と言つか、魔法少女狩りだね。一応撒いて来たんだけど、つと！」

マミは魔法少女狩りについて聞きたかったが、汀はお菓子の魔女へと向かって行ってしまった。

鏡が投じられ、魔女の顔面上部から首までを斬り飛ばす。

だが、その切断面からまた新しい体が生まれ、汀に襲い掛かった。

汀はチェーンを使って鏡を振り回して魔女を牽制し、マミたちから引き離していく。

「取り合えず、この子を治療しないと……」

マミはリボンをドーム上に編み上げて結界を作り上げ、傷ついた魔法少女の体に包帯代わりのリボンを巻きつける。

そのリボンには治癒魔法がかけられていて、ゆっくりと傷を癒し始めた。

契約の願いから治癒魔法を得たゆまには遠く及ばないが、マミも治癒魔法を使えるのだ。

出来る限りの処置を終えて、マミは汀の方を向く。

その目に、鮮やかな赤い血が飛び散るのが飛び込んだ。

汀の左肩に、お菓子の魔女が牙を突き立てていた。

「いけない！」

マミは、咄嗟にマスケットを作り出すが、

「手を出さないで」

痛みに顔を歪めたまま、右手の掌をマミに向けて、汀はそれを制した。

そして、その手を動かして、お菓子の魔女の頭にそっと触れた。

「終わりにしよう」

汀がそう言った瞬間、お菓子の魔女の輪郭が曖昧になった。

お菓子の魔女の体から黒い霧のようなものが立ち上り、魔女の体はどんどん薄くなる。

魔女から現れた霧は汀の体に吸い込まれて行き、その全てが吸収されたとき、お菓子の魔女の姿もまた、消えていた。

汀の持つ強力な自己治癒能力が働き、左肩にくつきりと刻まれた齒型が衣装も含めて一瞬で復元される。

グリーンフシードが落ちてきて、汀はそれを右の掌に受けた。

そこでまた、奇妙なことが起きる。

掌に載ったグリーンフシードが、粉々に砕け散った。

破片がキラキラと輝きながら渦を巻いて滞空する。

汀は、何かを期待するようにそれを見つめていたが、やがて、グリーンフシードの破片は溶けるように消えてなくなった。

「……また、し——」

「今、何をしたの？」

何事か呟いた汀に被せて、声が降ってくる。

ケーキの縁から、ほむらが見下ろしていた。

ほむらは床を蹴って、汀たちと同じ高さまで飛び降りる。

長い黒髪が少し遅れて彼女に追従した。

「暁美さん、あなたも来ていたの」

マミが話しかけるが、ほむらはそれを一瞥しただけで、

「答えなさい、イレギュラー。あなたはあの魔女に、何をしたの？」

硬質な声で、汀に再度問うた。

既に右手は左腕の盾の裏にあり、汀の返答次第では武器を抜くのも辞さない構えだ。

「そんなに警戒しないでほしいな。ボクの目的は、君のそれと同じ方向を向いているよ」

「……………」

汀の答えにも、ほむらは無言のまま構えを崩さない。

何をしたか教えないことには、話もできないようだ。汀は、やれやれと肩をすくめた。

「ボクの魔法を使ったただだよ。魔女を終わらせる方法は、何も斬ったり撃ったりするだけじゃないってことさ」

汀がそう言ったとき、周囲の景色が歪んだ。

魔女が滅んで、その棲家も消えるのだ。

ゆらゆらと揺らめいていた空間が焦点を結び、魔法少女たちは結界の入り口があつた場所に立っていた。

「マミさん……ほむらちゃんっ！」

目に涙を一杯に貯めたまどかが駆け寄ってきて、マミとほむらをまとめて抱きしめた。

「よかったっ——よかったよお」

「鹿目さん……ただいま」

マミがまどかを抱き返し、ほむらは所在無さ気に手を彷徨させた後、遠慮がちにまどかの肩に置いた。

感情を昂ぶらせているまどかをなだめるように軽く肩を叩き、

「マミ、ほむら、縁があつたらまた会おう」

「っ—」

はつとなつて周囲を見回す。

そのときには既に、銀の魔法少女と怪我をした魔法少女の姿はなくなっていた。

そして、その代わりに、目を丸くしているさやかの姿を見つけた。
「えーと、どうなつてんの？」

さやかは、一塊になっっている三人を指差して、困惑顔で聞いた。

「へえー、そんなことがねえ」

病院からの帰り道。まどかから話を聞いて、さやかが言った。

ほむらはさやかが現れてすぐにどこかに行つてしまい、マミは家の方向が別なので、今はまどかとさやかの二人だけだ。

「て言うかさー、いつの間にマミさんの手伝いなんて始めてたの？」

「昨日から、だけど」

「昨日!？」

「うん。マミさんと友達になつて、それでわたしにも何かできることはないかなつて思ったから」

「そうなんだ」

と、さやかは頷き、「でも」と続けた。

「そつは見えなかったなー」

「え？」

「あ、いい意味でだからね。まどかとマミさん、昨日今日の関係には見えなかったつて言うか、まあ、仲良さそつに見えたつてこと。抱き合つたりしちゃつてたし」

「抱き合つてつて……」

改めて指摘されると恥ずかしさが湧き起こつてきて、まどかは頬を染めた。

てつきりさやかにからかわれるのだろつと思つたが、意外にもさやかは真面目な顔をして、何か考え込んでいる。

「さやかちゃん？」

まどかが呼びかけると、さやかは真剣な表情でまどかを見て、口を開いた。

「あのさ、まどか。ちよつとお願いがあるんだけど」

巴マミは浮かれていた。

クロゼットから服を取り出しては姿見の前で体に合わせ、それをベッドや床に放り出してはまた新しい服を取り出している。

「ふふ、こっちの方がいいかしら？ それともこっち？」

にやけながら部屋の中を移動する足取りは弾んでいて、無意味にくるくる回転したりもしていた。

「ご機嫌だね、マミ」

「ええっ」

誰もいないと思っていた部屋の中で誰かの声がして、マミは飛び上がった。

持っていたハンガーが床に落ちて、音を立てる。

その床の上に、マミに話しかけた相手。白い毛並みの小動物が、一匹。

「あ、あらキュウベえ。戻ってきたの？」

などと取り繕ってみるものの、部屋の散らかりぶりは隠せるものではない。

マミは、そそくさと服を拾い上げて整理を始めた。

「何をそんなに浮かれているんだい？」

「実はね」

と、マミは片付けながら話し始める。

実は、誰かに話したくて仕方なかったのだ。

「私のお友達になってくれた、鹿目まどかさんって子が明日のお休みに遊びに誘ってくれたのよ」

「そうか、よかったじゃないか」

「ええ。それに、鹿目さんのお友達的美樹さやかさんも一緒なんですって」

「鹿目まどかに美樹さやか、か。二人とも、魔法少女じゃないね」
契約した相手を覚えているキュウベえは、記憶と照らし合わせて

そう言った。

それを聞いて、マミはますます嬉しそうに頷く。

「そうなの。結界に迷い込んでいたところで知り合った子で、魔法少女じゃないのに私のことを受け入れてくれたのよ」

「へえ、それは興味深いね」

「まあ、少し変わった子よね。普通ならもっと物怖じしそうなものだけど。」

あ、そうそうそう、興味深いで思い出したけど、キュウベえに聞きたいことがあったの」

「うん？ 何だい？」

キュウベえが可愛らしい仕草で首を傾げる。

「『魔法少女狩り』という言葉に心当たりは？」

「魔法少女狩りに遭ったのかい？」

「いいえ。会ったのは銀髪の魔法少女よ。彼女が怪我をした魔法少女を連れていて、そんなことを言っていたの」

「銀髪の……と言うことは、それが銀の魔法少女か」

「何か知ってるのね？」

「うん。最近、魔女を倒す力で魔法少女殺しなかまをしている魔法少女がいるんだ」

キュウベえの言葉に、マミは息を呑んだ。

「どういうこと？」

「さあ。僕にも目的はわからない。探してはいるんだけど、遭遇したことはないんだ。ただ、被害者の証言から、犯人は『黒い魔法少女』だとわかってる」

「黒い魔法少女……」

「そして、その犯人から魔法少女を守っているのが銀の魔法少女らしいんだ。彼女のおかげで、まだ死者は出ていないんだよ。魔法少女が役目を果たせないで魔法少女に殺されるなんて冗談じゃないからね。ありがたいよ」

「それは幸いだけど、大変な事態じゃない。黒い魔法少女や銀の魔

法少女の正体に心当たりはないの？」

「僕と契約している魔法少女は多いからね。特定するには情報が少なすぎるよ」

「そう……」

マミは顔を曇らせる。

「それじゃあ、私も少し調べてみるわ」

「よろしく頼むよ。マミ」

「ええ」

マミが頷く。

それから、マミは壁にかかっている時計に目を向けた。

「あ、大変、もうこんな時間。キュウベえ、私お風呂に入るわね」

マミは、クロゼットの引き出しから着替えを取り出す。

「覗いちゃダメよ」

片目を閉じて悪戯っぽく告げ、マミは部屋を出て行った。

しばらくすると、シャワーの水音と、それに混ざってマミが鼻歌を歌っているのが聞こえてくる。

「マミ、本当に楽しみなんだね」

そう言って、キュウベえは笑った。

「僕も、楽しみだよ」

次回、第8話「魔法少女になってほしいんだ」

第7話「もう、何も怖くない」（後書き）

取り合えずマミさん生存です。

ようやく原作から離れることができました。まだ少しだけですが。

魔法少女狩りにあつた魔法少女は、おりこマギ力でお菓子の魔女の結界内で死んでた娘です。

汀が安全なところまで連れて行きました。この作中では生きてますが、単なるやられ役なのでもう出てきません。

キウウベえも戻ってきて、ここから本格的に物語が動き始める予定です。

銀の魔法少女の立ち位置は、戦隊モノの追加メンバーの一パターン。自分の目的の都合で主人公たちのピンチを勝手に助けてはるくに話もしないで去っていく感じです。

次回から、またしばらく出てきません。

第8話「魔法少女になってほしいんだ」

お菓子の魔女の結界。甘い病院を舞台に、黒と銀が踊る

「またお前かッ、汀！」

「そんなに嫌なら魔法少女狩りを止めたらいいじゃないか。そうしたら出てこないよ」

淡々と口にして、銀の魔法少女——汀は己の武器を放った。

薬剤の雨を引き裂いて白金の鏡が飛ぶ。

黒の魔法少女——キリカが高々と跳躍し、鏡刃はキリカが足場に使っていたカップケーキを真つ二つにした。

キリカは甘そうな床を蹴り、汀の背後へと回り込む。

速度低下の魔法を広く展開したキリカの動きは、周囲の動きより相対的に速い——擬似高速移動。

長い銀髪がかかる背中が見える。

無防備なそこを狙って、魔力の爪を構え、

「っ！」

攻撃を中断して飛び退く。

目と鼻の先を、鎖を飴の柱に引っ掛けることで鋭い弧を描いた鏡が通り過ぎる。

キリカの目の前で、汀がゆっくりと振り返り、鏡を受け止めた。

速度低下の魔法は機能している。汀の武器である鏡の速度も落ちていた。

だから、今のタイミングで鏡をキリカの攻撃軸線上に割り込ませるには、

キリカが背後を取ろうと動き出すより早く、自分の背面に攻撃を繰り出さなければならぬ。

それを可能にする能力が汀の魔法であるのなら、それはまるでキ

リカにとって馴染み深い魔法――

「――未来、予知？」

魔法少女まどか マギカ／銀の海辺／

第8話「魔法少女になってほしいんだ」

今日は日曜日。学生は全国的に休日である。

まどかとさやかの二人は、私服姿でショッピングモールを訪れていた。

待ち合わせは背の高い時計台の下。時計の針は正午まで三十分という辺りである。

「遅いねえ」

数歩進んで時計を見たさやかが、時計の下まで戻って言う。

集まるはずの人はもう一人。待ち合わせが午前十一時だから、およそ三十分の遅刻だ。

「何かあったのかな？」

心配そうにまどかが呟く。

何となくだが、最後の待ち合わせ相手であるマミは、待ち合わせに遅れるようなタイプではない気がする。

だとすれば、遅れるような何かがあったのかもしれない。

それは、事故とか割って病気とか、あるいは、魔女だとか。

つつい悪い方向に想像を膨らませてしまっていると、その隣でさやかが「あ」と声を上げた。

「ほむらじゃん」

さやかの言う通り、休日だと言うのに制服姿のほむらが、買い物袋を片手に歩いていた。

ほむらの方も二人に気づいて、足を止める。

「や、ほむら」

「ほむらちゃん、こんにちは」

「ええ、こんにちは。鹿目まどかに美樹さやか」

「相変わらずフルネームで呼ぶし。そろそろさやかって呼んでみな
い？」

「その必要は感じないわ」

クールに言い放ち、肩にかかった長い髪を手を通して背中に流す。
実に絵になる仕草なのだが、片手に持っている葱が突き出した買
い物袋がそれを台無しにしている。

「くくつ」

「……何を笑っているのよ」

そのミスマッチ加減に忍び笑いをもらしたさやかを、いつも通り
に無表情なほむらが睨める。

「いや、あんたも同じ人間なんだなーって思って」

買い物袋という所帯じみたアイテムが、謎の魔法少女というどこ
か浮世離れた存在だったほむらに、奇妙な現実感を与えている。

さやかが言いたいのは、そういうことだ。

「どうかしらね。私は魔法少女よ」

「何それ。そこまであたしらと仲良くしたくないってわけ？」

地に足が着いているとでも言うのか。少し距離が詰まったような
心持になるのだが、それを突き放すようなほむらの物言いにさやか
がむっとする。

ほむらはほむらで弁解などする気も無いのだから、途端に険悪な
雰囲気漂った。

「まあまあ、さやかちゃん」

と、まどかが剣呑な空気に割って入る。

そして、おずおずとほむらの顔を窺う。

「ね、ほむらちゃん、聞いていいかな？」

「何？」

「……昨日、言ってたよね。魔法少女が死ぬのは珍しくないって」
「ええ、言ってたわね」

聞き辛そうに聞くまどかに、至極あっさりとはむらは頷く。
「その、ほむらちゃん是谁かが死ぬところを、見たことがあるの？」
そう問うた一瞬、ほむらが僅かに表情を動かした。

まどかを透かしてどこか遠くを見るように。

だがそれも、すぐに無表情の仮面に隠されてしまう。

逡巡というほどの間も置かずに、ほむらは答えた。

「あるわ。数え切れないほどにね」

「……そうなんだ」

まどかは目を伏せて、俯く。

以前にさやかと言った可能性。ほむらの過去にあった、魔法少女にまつわる何か。

それは、そういうこと、なのだろうか。

「あなたが気に病むことではないわ」

頭の上から降ってきた硬質な声。

けれどその中に、微かに労わりの響きを聞いて、まどかは顔を上げた。

「私たち魔法少女は、世界を歪めなければ叶えられない、自らの願いのために、契約するの。」

他人からすればどんなにつまらないことでも、自分自身の祈りのために戦うのよ。

二度と還れずとも——誰にも気づかれないまま命を失って、初めからいなかったように忘れ去られても、それは仕方のないことなのよ」

「……そんなの、寂しすぎるよ」

「そう思ふのなら覚えておきなさい。魔法少女になるって、そういうことよ」

「でもっ……でも、わたしは——」

言いかけて、まどかは口を閉じた。

忘れないと言おうとした。

魔法少女という存在を知っているから、忘れないと。けれど、その言葉は『魔法少女の死』を前提にしている。

まどかの知る魔法少女、マミやほむらの死を想像すると口には出せなかった。

「もう行くわ。さよなら」

口を噤んだまどかを、それから自分の背後を流し見て、ほむらは背を向ける。

ほむらの視界の端には、大急ぎで駆けて来るマミの姿が映っていた。

かつかつと靴音を立てて歩き出したほむらの姿は、休日に賑わう人波に消えていく。

そして、それと入れ替わりに、息を切らせたマミがまどかたちの前に駆け込んできた。

「はあっ、遅れ、て……ごめ、けほけほっ」

そのまま謝ろうとして、盛大にむせ返ってしまう。

「うわ、マミさん、大丈夫？」

「ちよつと落ち着いてください」

「う、うん……」

それからしばし、

呼吸を整えて、マミは改めて二人に頭を下げた。

「ごめんなさい、何を着ていくか迷ってたらしいの間にか時間が経っちゃってて」

「いやいや、初デートに挑む中学生じゃないんだから」

そんな気合入れなくても、と苦笑いのさやか。

「だって、その、魔法少女になってから、お友達と遊びに行ったことなかったから……」

マミは、胸の前で両手の指を合わせながら小首をかしげ、眉を八字にして、怒っちゃったかな？と言いたげな困り顔。

身長差のせいで上目遣いに見上げられたさやかは「うっ」とか言

いながら仰け反って、

「何だこの人、すごい可愛い」

心底思っている風なさやかのような言葉に、まどかはたまらず吹き出してしまった。

織莉子宅の薔薇園。

美しい庭園に設えられたテーブルの上に、キリカがぐでーっと伸びている。

対面の椅子に腰掛けた織莉子は、テーブルにソーイングセットを広げて針を動かしていた。

「うあゝゝ。はあゝ」

「どうしたの、キリカ。帰って来てから溜息ばかり」

視線は手元に落としたまま、織莉子が聞く。

「だって、また邪魔されたんだよ。あの、銀色っ！……私の邪魔ばかりして」

激昂して立ち上がったかと思えば、またテーブルに潰れる。

「こんな調子じゃ君の役に立てないよ」

「いいえ、貴女はとても役に立ってくれてるわ」

「ほんとうかい？」

テーブルクロスから目だけを上げて問い返す。

「ええ。そもそも、魔法少女を殺す必要はないわ。魔法少女が襲われているという状況があれば、それで十分なの。

キュウベえが私のところにも注意に来たのよ。邪魔は入っているけれど、それでもこちらの思惑通りにことは進んでいるわ」

「何だあ、そうだったのかー」

安堵の息を吐いて、キリカは三度机に突っ伏す。

織莉子はくすりと微笑って糸切り鋏を取り、縫い終わった糸を切断した。

「キリカ」

「うん？」

呼びかけられて、キリカが顔を上げる。と、赤い釦ボタンの目と目が合った。

ちよこんと織莉子の手に乗った、白いぬいぐるみ。

どこことなく契約の獣キユウベエを思い出させるそれは、織莉子が手ずから縫い上げたものである。

「これは？」

「頑張ってる貴女への贈り物。さ、元気を出して」

「おくりもの……？」

きよんとしたキリカの目が、ウサギと織莉子の顔を往復する。そして、事態を把握したキリカは、目を輝かせて文字通り飛び上がった。

「うわあ、プレゼントだ！　ありがとうー、織莉子、大好き！」

戦闘機動もかくやという素早さで織莉子の手からウサギを受け取り、抱きしめながらくると回転した。

すっかり浮かれてしまったキリカを見ながら織莉子は立ち上がり、言った。

「さあ、お茶にしましょうか」

織莉子がテーブルの上を片付け、お茶の準備を整えている間、キリカは薔薇園の中を歩き回っていた。

「ドロレス、ストロベリーカップ、銀世界」

ベルトに吊ったぬいぐるみを揺らしながら、織莉子に教わった薔薇の名前を一つ一つ呼んでいく。

「ダイアナプリンセス。えーと、あと何だっけな」

「薔薇が好きなね、キリカ」

ポットの中に茶葉を入れながら、織莉子と言う。

「もっとたくさん植えましょうか？」

「へ？」

織莉子が聞くと、キリ力はきよとした声で返事をした。

くるりと体ごと振り返り、もう一度「え？」と疑問を声にする。

「あら？ どうしたの？」

意外な反応に、織莉子も疑問符を浮かべる。

「薔薇、織莉子が好きなんじゃないの？」

織莉子は首を振り、

「お父様が好きだったのよ」

「へえ……」

キリ力は返答に一瞬目を見開き、背後にした薔薇を流し見る。

その目からは温度が失われ、ひどくつまらないものを見ているようだ。

「それじゃあ、この情報は記憶から消しておくよ」

「折角覚えたのに、勿体無いわ」

そう織莉子が言えば、キリ力は大きく溜息を吐いた。

「勿体無いのは私の頭の容量だよー。私は君の他の情報なんて要らないんだから」

キリ力が知りたいのは織莉子だけ。

求めるのは彼女の情報だけであって、織莉子の父親なんていう他人の好みなど、全く知る必要がない。

三国織莉子を想うことだけに全てを賭けられる。それが、呉キリカという少女だから。

「けれど、それでは貴女は無知な子供になってしまっわよ？」

優しく、諭すように告げる織莉子。

「君はいつも私を子ども扱いするんだ。たった一二日と三時間年上なだけでさ」

キリ力は、頬を膨らませて不満を露にする。

「じゃあ、『君のお父様の好きなものならもつと知りたい』って答えるべきだったの？」

「それは困るわ」

拗ねたようなキリカの物言いを柔らかい笑みで受け止めて、織莉

子はポットを持ち上げた。

香り立つ紅茶が注がれ、カップを飴色に染める。

「私はお父様を尊敬しているのに、貴女がお父様に興味を持ったら、お父様に嫉妬してしまうかもしれないわ」「なんだい、それなら忘れた方がいいじゃないか。そんな矛盾していることを言つて、織莉子の方が我侭な子供じゃない？」

キリカがそう言ったとき、織莉子がカップに注いでいた目を上げた。

睨むような鋭い目が、キリカを射抜く。

途端にキリカは落ち着かなくなつて、駄々をこねるみたいに両手を振り回した。

「ヤダヤダ怒らないでよ！ 君に嫌われたら、私は腐つて果てるよ！」

「キリカ」

織莉子はキリカに手を伸ばし、肩を掴んで自分の側に引き寄せた。
「そのまま動かないで」

言つて、一秒。

キリカの真後ろに、銀色の剣が振つてきた。

いや、剣ではない。鋭く伸び、研ぎ澄まされた、腕だ。

織莉子は、その襲撃を既に識っていた。

異界が世界を侵す。

敷き詰められる石畳。大理石の柱と彫刻を従えて、ガシヤリと足が地を踏んだ。

およそ三メートルの巨軀は、それそのものが細身のフルプレートアーマー。

肩にかかった長いマントが腰に巻かれてスカートのように広がる。山型の王冠を戴いた頭部には、巨大な一つ目が瞬いていた。名づけるならば、鎧の魔女。

「ああ！ 前から思つてたんだよね、この家になれば良いなつて」

くろがね

黒金に輝く魔女を見上げながら、キリカが手を打った。

「ブルジョアは鎧飾るのが好きたりなんでしょー？」

「それは初耳だわ……」

困り顔で笑う織莉子。

と、そんな惚けた会話をしている二人を前に、魔女が動く。

腕そのものである鋭い剣がギリギリと捻じ曲がり、遙か頭上から振り下ろされた。

石畳が巻き上がり、折り碎けた柱が宙を舞う。

結界が何らかの影響を与えているのか、その柱はふわふわと空中を漂い続けている。

そして、その柱の上に立つ黒い影。

魔法少女に変身したキリカだ。

キリカ目掛けて、鎧の魔女が第二撃を放つ。

横薙ぎの剣閃を、キリカは素早く跳躍して交わした。

魔女の一つ目がぎよりと動いて後を追いつ、黒い魔法少女が両手に鋭い爪を伸ばしたのを目にする。

もう一人の魔法少女は、テーブルにつき、ティーカップの中に角砂糖を落としていた。

角砂糖が三つ、ジャムがスプーンに三杯。

金色のスプーンでくるくるとかき混ぜ、心なしか粘度を増したような紅茶を眺めて、

「ねえキリカ。これはやっぱり甘すぎだわ」

「いいのっ。それが私のこだわりなんだっ」

魔女の剣を、交差させた爪で受け止め、弾き上げながらキリカが言い返す。

「ふふ、そうしないと飲めないのね？」

「ああっ、もうっ！　またそうやって子ども扱いする！」

鎧の魔女は弾かれた腕を振り上げ、もう一方の腕も振り上げた。

「織莉子なんか――」

「嫌い？」

答えがわかりきっている、織莉子の問い。

魔女の剣が振り下ろされ——しかし、振り下ろしきれない。
速度低下の魔法。

のろのろと腕を下ろす鎧の魔女は、無防備に体を晒していた。

「だいつ好き！」

想いを吐き出して、キリ力が跳ねる。

残光を置き去りに、魔女の体を走る六条の刃。

跳び上がったキリ力は魔女の王冠の上に立ち、その重みを支えかねるように、細切れになった体が崩れ落ちた。

キリ力を乗つけたまま、事切れた魔女の頭が地に落ちる。

「私と織莉子の邪魔をするなんて、とんだ間女だよ。ま、大したことなかったけどね！」

「お見事だわ、キリ力。ただ——」

いつの間にかテーブルを離れていた織莉子が、テーブルを示す。

「紅茶が台無しになってしまったけど……」

テーブルは鎧の魔女のパーツに押しつぶされ、砕けた陶器と一緒に広がった液体が甘い匂いをばら撒いていた。

キリ力はそれを見て、へにゃ、と顔のデッサンを崩し、「うわぁ」と世にも情けない声を上げたのだった。

まどかたち一行は、休日を存分に遊び倒していた。

まだ知り合ったばかりというのもあって、最初のうちはどこかきこちなかったが、まるで物怖じしないさやか——あの敵意剥き出しという感じのほむらにすらそうなのだから、元々好意的なマミになれば推して知るべしだ——に引っ張られる形で打ち解け、

昼食を終えてファミレスを出る頃には、すっかり意気投合していた。

その後は、お互いに服を選んで着飾らせてみたり、CDショップ

でさやかがクラシックに対する意外な造詣の深さを見せたり、ゲームセンターでプリントシールを撮ったりして、時間を忘れて遊び回った。

そしてすっかり日の落ちた今、彼女たちはショッピングモールからいくらか行かない公園にいた。

周囲360度から街灯が生え、さながら地上に星が降って来たような光景。

無論、そんな公園など存在するはずもなく、そこは魔女の結界である。

そろそろ帰ろうという段になったところでマミが結界を見つけ、そのまま交戦に入ったのだ。

ジャングルジムの上に立つ、四足歩行の動物に星光の頭をくつつけた歪な獅子——暗闇の魔女、の使い魔。

魔女から分裂したその力は魔女に比すれば脆弱で、戦いと言うほどのことは起こらなかった。

街灯の上に立ったマミの手からリボンの束が広がり、絡み合って巨大な大砲を作り上げる。

マミの攻撃魔法は砲撃。

基本的な使い方は、魔力を装填したマスキットを召喚し、それを弾丸として撃ち出すものだ。

一発分の魔力しか込められていないため、使い捨てになってしま^{じゅったん}うが、最初から魔力が入っているため、マミでなくても使うことができる。

極端な話、魔法少女でないまどかやさやかでもマミの銃は撃てるのだ。

だが、マミの必殺技たる砲撃は、それとは少し異なる。

この魔法で召喚する砲は、使用者の魔力を汲み上げて撃ち出す、一種の儀式装置なのだ。

それによって、撃った後に魔力を上乗せして威力を上げたり、銃弾に比べて継続的に攻撃し続けることが出来る。

だからこそ、この魔法は必殺技なのだ。

その武装の巨大さゆえに発射はトリガーではなく、キーワード。

言葉自体は「ファイア」とか「シユート」でもいいわけなのだが、本人の趣味によってこう唱する――

「ティロ・ファイナーレ！」

砲口から吐き出された閃光が使い魔を飲み込み、その存在を爆砕する。

主がいなくなった結界は、粉々に砕け散り、その破片も夜の中に溶けていった。

マミは街灯から飛び降りて変身を解くと、物陰に隠れていたまどかとさやかが姿を見せる。

前に結界に迷い込んだときはパニックになっている間に終わっていたので、マミが戦っているのを見るのは初めてと言ってよかった。

「これが、魔法少女の戦い……」

「マミさん、格好良かったです！」

さやかは痕跡の残っていない戦いの跡を呆然と見回し、まどかは尊敬の眼差しをマミに向ける。

「もう、見世物じゃないのよ。これは危ないことなんだからね」

口では注意しているが、そんな風に見られるは嬉しいのか、マミの頬は緩んでいた。

「あ――」

まどかはふと気づいて公園の地面を見回す。

「グリーンシード、落としませんでしたね」

「今のは魔女から分裂した使い魔だから、グリーンシードは持っていないのよ」

「魔女じゃなかったんだ……」

倒すために魔力を使うが、それによるソウルジェムの濁りを取り

除くグリーンシードは手に入らない。

魔法少女という存在の観点から言えば、はずれ、である。

「使い魔だって人を襲うし、成長したら元と同じ魔女になるから放っておけないのよ」

と、魔女の生態について説明するマミ。

さやかはまどかの肩をつついて、

「ねえまどか、グリーンシードって何？」

「あ、さやかちゃんは知らないんだっけ。あのね——」

まどかが少し得意そうにグリーンシードの説明を始めて、さやかは、うんうんと頷きながらそれを聞いている。

微笑ましく二人を眺めていたマミは、ふと、さやかの瞳の奥にある重みのある真剣さに気がついた。

そう言えば、戦っているマミを見ていたとき、まどかは自分から縁遠いものを見る憧れの目をしていたが、さやかのそれは、まどかとは異なっていたではないだろうか——

その瞬間、マミは、なぜさやかが一緒に来たのかを悟った。

ほんの少しの落胆が浮かぶ。

しかし、それは心に押し込めて、先輩として口を開く。

「美樹さん。今日は私に何か、聞きたいことがあったんでしょう？」

「え？ …… あー、わかります？」

ばつが悪そうに、さやかはマミの顔を窺った。

マミは、気にしていないというように笑顔を作って頷く。

「ええ——魔法少女のこと、かしら？」

「そうだったの、さやかちゃん？」

「…… うん、ちょっとね。黙っててごめん」

「いいのよ。それで、何が聞きたいの？」

マミに促されて、さやかは話し始める。

「魔法少女になると、どんな願い事でも叶えられるんだよね？」

「ええ、そうよ」

「その願いつて、自分のためじゃないと駄目なのかな」

「え？」

「例えば、あたしなんかよりずっと困ってる人がいたとして、その人のために願い事をするのって、できるのかなって」

「さやかちゃん、それって、上条君のこと？」

「た、例え話だってば！」

口を挟んだまどかに、さやかは慌てて否定する。

けれど、その態度はどう見てもまどかの指摘が正鵠を得ていることを物語っていた。

「ごほんっ。とにかく、どうなのかな、マミさん」

「そうねえ……」

マミは顎に手をやって少し考える。

「他人のための願いで契約することは、できるはずよ。私も一人、そんな魔法少女を知っているから」

マミの頭の中に、苛烈な赤い少女の姿が浮かぶ。

他人のために祈り、願いを叶えた少女。けれど、その願いは――

「でも、あまり感心できた話じゃないわね」

「え…… どうして？」

明確に否定のニュアンスを含むマミの言葉に、さやかは疑問を返す。

「美樹さん。あなたはその人の願いを叶えたいの？ それとも、その人の願いを叶えた恩人になりたいの？ 同じようだけれど、これって、全然違うことなのよ。」

他人の願いを叶えるのなら、なおさら自分の願いをはっきりさせておかないと」

「っ」

マミに指摘され、はっとするさやか。

前者なら、他人のための願い。そして、後者ならば、自分のための願いだ。

「きつい言い方でごめんね。だけど、そこを履き違えたまま進んだら、きつと後悔すると思うから」

返す言葉もなく、さやかはぎゅっと口を嚙んだ。

まどかがおろおろと二人の間に視線をさまよわせる。
ややあつて、さやかは口を開いた。

「……そうだね。あたしの考えが甘かったみたい」

「さやかちゃん——」

ほつと、まどかが安堵の息を漏らす。

「参考までになんだけど、マミさんはどんな願い事をしたの？」

「私？ 私は……」

マミは少し目を伏せる。

「昔、家族で乗っていた車が事故に巻き込まれてね……そのときに
キュウベえと出会ったの」

『助けて——』

「考える余裕すらなくて、気がついたら叶えられてた」

「マミさん……」

質問したさやかも、聞いていたまどかも眉を曇らせる。

「いいの、気にしないで。もう昔のことだから。」

でもね、私に出来なかったからこそ、選択の余地がある子たちには
きちんと考えて決めて欲しいの」

「まあ、僕としては別にどんな願いだろうと構わないんだけどね」

唐突に会話に入ってくる四つ目の声。

一体いつからいたのだろうか。街灯の明かりの下に、白い小動物
が、一匹。

「あ、可愛い。猫……じゃないよね、ウサギ？」

「いやまどか、そうじゃなくて。こいつ、今喋んなかった？」

「え、他の人の声じゃないの？」

「あたしもそう思いたいけど、でもさっきの声がしたのその辺だっ

たし」

まどかとさやかにしげしげと眺められて、その動物は、

「そう、僕だよ」

「喋った!？」

「やっぱこいつだ!」

飛び上がった驚く二人。

喋る動物。いかにも普通ではない。

では何なのかといえば、最近知った普通ではないもの、魔女とかそれに類するものかしかならない。

「マミさんマミさん! 何か出たよ!」

頼りになる先輩に助けを求める、が、マミはそれを見て呆れた顔をしていた。

「もう、ついて来てたのね」

「僕もマミの友達が気になったからね。別に邪魔はしなかったんだから、かまわないだろう?」

「そういう問題じゃないの」

親しそくに言葉を交わす一人と一匹。

「マミさん、その子と知り合いなんですか?」

「ええ。あ、そっか、まだ二人は知らなかったのね」

マミは地面にしゃがんで手を伸ばし、小動物はその手から腕を伝ってマミの肩に乗った。

「この子はキュウベえ。魔法少女との契約を結ぶ、まあ、お供みたいな存在ね」

キュウベえ。何度か話にでてきた、魔法少女を生み出す、契約の獣。

「はじめまして、まどか、さやか。実は、君たちにお願ひがあるんだ」

「お願い?」

まどかが首を傾げる。

そして、キュウベえは言った。

「あのね、僕と契約して、魔法少女になってほしいんだ」

「けいやく……？」

「あたしとまどかが、魔法少女に？」

「そうママから話は聞いているだろう？　僕は願い事を叶えて君たちを魔法少女にする。心配しなくても、魔女と戦えるように万全の備えをしてあげるよ」

だから、と戸惑っている二人にキュウベえが契約を迫る。

「キュウベえ、ちよつと待って」

そう言って、キュウベえを止めたのはママだった。

「どうして止めるんだい？　ママだって、仲間が増えるのは嬉しいことだろう？」

「それは確かにそうだけど、でも、ちゃんと考える時間を上げてほしいのよ。って言うか、ちょうどその話をしていたのを聞いていたんでしょ？」

「でも、素質のある女の子を魔法少女にするのが僕の仕事だからね。役目は果たさない」と

「それでも、よ。大体、急に言われたって困ってしまうわ」

「そうなのかい？」

「うん、まあ……。ねえ、まどか」

「う、うん……突然言われても、決められないよ」

キュウベえに話を振られて、まどかとさやかはこくこくと頷いた。

「そつか。仕方ないね、この話は保留にしておくよ」

「ありがとう、キュウベえ」

ママはキュウベえの顔をくすぐって、まどかたちに向き直る。

「鹿目さん、美樹さん。突然のことで驚いただろうけど、しっかり考えてみて。その上で魔法少女になるって決めたなら、先輩として歓迎するわ」

「……うん、わかった」

「考えてみますね」

「ええ。じゃあ、今日はもう解散にしましょうか」

キュウベえと一緒に見回りをするというマミとは、公園の入り口で別れることになった。

「二人とも、気をつけて帰ってね」

「はい、マミさんも」

「いい答えを待ってるよ」

「だから急かすなっば」

挨拶を交わして、二手に別れる。

「あ、そうだ」

帰ろうとしたところで、さやかは一つ、大切なことを思い出して、

「マミさん！」

「何？ 美樹さん」

「えっと……」

さやかは少し口籠り、それから、思い切って言った。

「また、誘っていい？ 今度は、魔法少女とか関係なしで」

「え——」

マミは、一瞬驚きを浮かべ、相好を崩して頷いた。

キュウベえに勧誘された以上、魔法少女絡みの話をしないのはおそらく無理だろうけど、そう言ってもらえること自体が嬉しかった。だから、答えは決まっている。

「もちろん、喜んで」

魔法少女たちの夜は更ける――

「散々騒いで寝ちゃうんだもの。世話の焼ける子だわ……」

自分の膝に頭をのせて眠っているキリ力を見て、織莉子は呟いた。キリ力は、どんな夢を見ているのか、しまりのない顔で「うへへ」などと笑っている。

あんまり幸せそうに笑うから、織莉子も釣られてくすくすと笑う。ほとんど押し切られる形で行動を共にすることになった少女。けれど、今になってはもう、彼女がいけないことは考えられない。

「キリ力。貴女がいなければ、私はとくに壊れていたでしょうね」
キリ力が側にいて、重すぎる荷物的一半を持つてくれるから。
一緒だから、織莉子は進んで行ける。

「私たちは、ずっと……」

今のままでは叶わない、祈りのような言葉を呟いて、織莉子は現在を離れた。

彼女が保有する魔法は、未来予知。

未だ来たらぬ現在^{いま}を、映像として見る力である。

その力で今、織莉子は先の世界の中に沈んでいた。

彼女の目に映るのは、滅び去った世界。

今まで幾度となく見続けた、終末の光景である。

未来と言うのは流動的なものであり、現在が変化することでも簡単に姿を変える。

ゆえに、織莉子の力で正確な未来予知が可能なのは精々数分がやっと。

一日も先のことになる、外れる可能性の方が高いくらいの精度だ。

しかし、それでも例外はある。

例えるなら、一カ月後に世界的な陸上大会があるでしょう。

その大会のある競技で誰が一位になるか、それを一ヶ月前に正確に予知することはできない。成功したとすれば、それはどちらかと言えば偶然の産物だ。

けれど、一カ月後に大会が行われることそれ自体は、予知した通りに起こるだろう。

しかし、それを知るために未来予知の魔法など必要ない。事柄が大きいがために、魔法などなくとも知ることのできる、未来の予定だ。

同様に、どれほど今が変動しようとも訪れる終焉は、さしずめ世界が立てた予定。

どんな途中経過があろうとも、逆さまのデウス・エクス・マキナによって、バッドエンドに導かれてしまう物語。

ちっぽけな人間には抗うことも許されないような定め。

織莉子は、それに挑むと決めた。

世界を救済^{すく}う、そのために。

まるで変化しない終わりであるがゆえに、何度だって見ることができた。

見て、聞いて、それを繰り返して——やがて織莉子は知った。

それが何であるか。どうしてそうなってしまうのか。

終焉か、救済か。

その分岐を担う鍵は、桜色の髪の魔法少女。

まだどこの誰かもわからないが、現在で、彼女を見つけることが出来たなら——

時間軸がずれる。

終末より少し巻き戻った、とある時間。初見の未来。

白黒の市松模様に覆われた世界は、魔女結界。

すらりと伸びた足の上に女性の上半身を縦に三つ繋げて、目玉のついたりポンを結んだ帽子を被った魔女。

鍵である女の子と数人の魔法少女。

そして、

「まどかを魔法少女にはさせない」

冷たい目をした黒髪の魔法少女が、織莉子へと銃を向ける。
手に入れた。

『まどか』。それが、彼女の名前。

それに、彼女が着ていた制服は、キリカと同じ学校の――

暁美ほむらは躊躇いなく引き金を引いた。

乾いた発砲音が響き、夜の闇に紛れて屋根の上を走っていた白い獣を撃ち抜く。

まどかの家に向かっていていたキュウベえは、銃弾を受けて、屋根から転がり落ちた。

「消えなさいキュウベえ。あなたをまどかのところには行かせない」
ほむらは、キュウベえが転がり落ちた暗がりには銃口を向けて言い放つ。

やがて、闇の中から何かが去っていく音が聞こえた。

まどかは机に向かっていた。

スタンドライトに照らされたノートには、いつか想像した魔法少女の絵が描かれている。

「わたしが、魔法少女になれる……」

マミの姿に憧れていたけれど、自分がなれるなんて想像もしていなかった。

けれどもう、真剣に考えなければならぬだろう。

魔法少女になること、そして、引き換えに願うこと。

まどかにはそこまで必死に、命がけの戦いに参加してまで叶えたい願いなどなかった。

「ただなりたいてだけじゃ駄目なのかな……」

ボタンとノートを閉じて、両腕を伸ばしながらまどかは言った。
「マミさんみたいに強くてカッコよくて素敵な人になれたら、それだけで十分幸せなんだけどな——」

さやかは自室のベッドに寝転んでいた。

天井に左手をかざしてみる。

自由に動く手。恭介は動かせないのに。

彼のためになら、魔法少女になっても良いと思った。

そういう気持ちは固めたつもりだったけど——

『あなたはその人の願いを叶えたいの？ それとも、その人の願いを叶えた恩人になりたいの？』

マミに言われた言葉を思い出す。

（もしも、あたしの願いで恭介の体が治ったとして、それであたしはどうしたいんだろ……。

ありがとうって言われて、それだけ？ それとも、もっと、それ以上のことを言って欲しいの？）

マミに言われた言葉の意味がわかる気がした。

確かに、願いに込められた意味は全く別物で、自分はそれに気づいてさえいなかった。

命を賭けて恭介を治す。聖女が身を捧げるような崇高な行為に思っていたそれが、今では我欲に塗れたひどく俗っぽいものに見える。

「なんか、やだな……」

さやかの手が力なく落ちて、彼女の目を覆った。

「マミ、ちょっといいかい？」

当たり前のようにマミの家に入り込み、キュウベえは寝支度を整えていたマミに声をかけた。

ほむらから受けたはずの傷は、もう影も形もなくなっている。

「キュウベえ？ 鹿目さんの家に行くんじゃないの？」

「気になることができたから、一度戻ってきたんだよ。マミ、黒髪で銃使いの魔法少女に心当たりがあるかい？」

「…… 暁美さんのことかしら」

「知ってるんだね？」

「ええ。暁美ほむらさん。鹿目さんのクラスの転校生よ」

「暁美ほむら……知らない名前だね」

「え？ キュウベえが知らない魔法少女がいるの？」

不思議そうに、マミが聞く。

魔法少女を生み出せるのはキュウベえだけだ。

ならば、キュウベえの知らない魔法少女は、存在しないはずである。

「うん、魔法少女なら僕と契約してるはずなのに、僕にはその記憶が無い」

「一体どういうことなのかしら？ 暁美さん、本当に不思議な子ね

……」

マミに同意して、キュウベえは深く頷く。

「全くだね。わけがわからないよ」

次回、第9話「僕は、見つけたよ」

第8話「魔法少女になってほしいんだ」（後書き）

思ってた以上に視点があっちこっちに移動してしまいました。読みにくかったらすみません。

相変わらず暗躍する織莉子サイド。

まどか側はキュウベえがお仕事を開始。

ここでもようやく勧誘開始ということは、さやかは魔法少女になれるかどうかわからないのに勝手に悩んでたことになるんですが、まあ、魔法少女になる素質云々のこと自体知りませんからね。

そして出てこない汀。お前それでも（オリジナル）主人公か。

後三話くらいは大筋で原作通りに進む感じですよ（マミさんが生きてる以外は）。

マミさんや織莉子の魔法については作中で細かく説明されていないのを良いことに、自己解釈というか、捏造してあります。

断章4「こんなのは、違う」

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺

断章「こんなのは、違う」

渚が行方不明になってから、二週間という時間が過ぎた。

一時はテレビのニュースにもなったものだが、渚の事件は日々起こる物事に押し流され、本人と関係のない人々の記憶からは風化しつつあった。

では、渚の関係者も関係者。渚の片割れたる双子の姉、汀はいえ
えば――

両手に一杯の紙袋を抱えて、汀は家のドアを開いた。

「ただいま……あれ？」

その瞬間から感じる違和感。

家の中に、肉の焼けるいい匂いが立ち込めていた。

時間からすれば、夕食の支度が行われているのは別におかしなことではない。

けれど、その用意をするはずの人物は渚のことで頭が一杯で、家事の一切を放棄しているはずだった。

「どうして……」

相変わらず廊下に山と積まれた探し人のポスターを避けながらリビングに入る。

リビングには煌々と明かりが灯り、散らかり放題だったテーブルは綺麗に片付けられている。

椅子に座っていた父親が汀に気づいて話しかけた。

「お帰り、汀。今日はハンバーグだって」

そう言って、嬉しそうな父親が視線で示した先のキッチンでは、エプロンをつけた母親がフライ返しを操っていた。

「母、さん……？」

恐る恐る、汀が呼びかけると、母親は振り返って、そして笑顔を見せた。

久しぶりに、本当に久しぶりに見た笑顔。

渚がいなくなって以来どころではない。渚がいたときだって、笑顔を見せてもらうのは渚だけで、汀には笑いかけてはくれなかった。だから欲しかった。

そのために、己が半身を墜としてさえも。

「あら、お帰りなさい」

欲し続けていたものが、あまりにも突然手に入って、半ば茫然となっていた汀に、母親が言った。

両手に持った荷物を見て、買い物に行ってきたのだと当たりをつけたらしい。

「楽しかった？」

「……うん」

「そう、よかったわね。もうすぐご飯よ」

「うん……荷物置いてくるよ」

夢見心地で、ふわふわとした気持ちのまま、汀は部屋へと向かった。

部屋に入った汀の手から、どさどさと荷物が落ちて、中身が床に散らばる。

買い込んで来たのは、服やアクセサリなどの、女の子らしく身を飾るもの。

渚と比べられなくて、渚のようでいたくて。服も髪型も口調も、何もかも渚に似せていた。

けれどもう、その必要はなくて。だから、ずっと欲しかったものを買ってきたのだ。

「……やっと」

ぺたりと床に座り込んで、小さく震える両肩を抱きしめて、汀は呟いた。

「これでやっと、『ボク』は『私』になれる……」

そのあとのことは、あまりよく覚えていない。

母親が渚にするように優しいのが嬉しくて、妙な話だけれど、心の準備が出来ていなかった分緊張さえしてしまつて、ほとんど話ができなかった。

けれど、紛れもなく幸せな夜を過ごして、汀はベッドに入った。

明日が楽しみだった。

汀はようやく、欲しかったものを、手に入れたのだから。

翌朝。

汀は制服に着替えた後で、いつもの癖でゴムで髪を束ね、少し考えてからそれを外した。

髪をいじったことがないから、取り合えずそのまま下ろしておくことにして、鞆を取って部屋を出た。

パンの焼ける匂いが漂うリビングに入ると、既に来ていた父親が、自分の席で紅茶を飲んでいた。

母親は、キッチンで菜箸片手にフライパンに向かっている。

「おはよう、父さん、母さん」

「おはよう」

汀が挨拶すると、まず父親が挨拶を返し、そして、母親が汀の方を向く。

その顔に浮かんでいるのは、渚を見ると同じ、汀が欲しかった微笑で。

「おはよう。あら？」

母親が、怪訝そうな顔になる。

そして、言った。

「渚、どうして、汀の制服を着ているの？」

ガチャンと、陶器の碎ける音がした。

反射的に見れば、父親が紅茶のカップを取り落としていた。

床に染みが広がっていくが、そんなことも気にならないようで、母親の顔を凝視している。

ああ、どうやら聞き間違えではないようだ。

母親は、本当に——汀に向かって、渚と言ったのだ。

いかなる心の働きか、渚がいなくなったことに耐えられなかった彼女は、渚と汀を入れ替えてしまったのだ。

『渚に向けていた笑顔を向けられた』。

当然だ。母親は——少なくともその心の中では——渚に向かっていたのだから。

汀が喜んで受け取っていたものは、狂気の上に貼り付けられた、偽りの微笑だった。

そして、汀がいなくても、渚がいれば、母親は笑顔を浮かべて、日常生活を送ることができていた。

渚と比べて、汀の存在には、その程度の重みしかなかったのだ。

それに気づいたとき、汀は、それ以上留まっていられなくて、リビングを飛び出した。

鞆も持たずに廊下を走って、靴につま先だけ突っ込んで、つかえながら玄関を飛び出した。

「うわっ」

家を飛び出したところで、誰かにぶつかりそうになった。

飛び退いた小柄な影が尻餅をつき、赤い髪が揺れる。

だが、汀はそれに全く意識を払わず、道路を駈けていった。

彼女が辿り着いたのは、魔女の結界。

その深淵には、いつものように、微笑みの仮面をつけた彼女――
抱擁の魔女が待っている。

殺さないまま、日々鬱積する感情をぶつける、ストレス解消の道具。

心の中を荒れ狂う激情の裡に、汀は魔法少女に変身し――
投げつけようと手に取った刃。

その鏡面に、誰かの顔が映っていた。

悲しみに満ちた瞳と、対照的につり上がった唇。

これは誰だと彼女は問う。

夜柙汀だ。鏡に映った自分の姿だ。

本当に？

もしかしてそこにいるのは、渚じゃないの？

「違う……」

今までずっと、渚に擬して生きてきた。

今までだって、汀なんかじゃなかったくせに。

「だから、今から、ボクは私^{みわち}になるんだ。やっとなれるんだっ」

それを誰が喜ぶの？

誰もが汀より渚を必要としていて、渚がいることが喜ばれて。
本物はいないんだし、渚になれば、彼の浴びていた賞賛はボクの

ものになるんだよ？

だったら、汀がいることに意味はあるの？

鏡の中で、渚が嗤う。^{みぎわ}

汀は、鏡を放り出し、地面に膝をついた。

頭を抱えて、いやいやと首を振る。

「こんなのは、違う……」

渚がいなくなつて、渚だけが受け取っていた母親の愛情を、汀も得られると思つた。

やっと、汀は、汀になれるはずだった。

でも、どうしてだろう。

欲しかったものは、自分を素通りした誰かに向けられていて。

なれると思つた自分は、いつの間にかいないことにされていた。

渚がいなくなつて、汀もいなくなつて、だから、誰もいなくなつた。
だったら、自分しか知らない罪を犯してまで欲した、『私』は誰
――？

天を仰いで、魂を引き裂くような、悲痛な声が響く。

「私は、こんなのが欲しかったんじゃない……っ」

地面に崩れ落ちて慟哭する銀の魔法少女に、抱擁の魔女の巨大な影がかかった。

断章4「こんなのは、違う」（後書き）

この話、痛い。

プロット段階では、渚がいなくてもやっぱり比較される汀という話だったのですが、書いてる途中でふと、こっちの方が酷い話じゃないだろうかと思いついたので、急遽改変。

汀はただ、お母さんに『よく頑張ったね。偉いね』って言うてもらいたいだけだったのに。

たったそれだけのことは叶わないで、すれ違って。もう取り戻せない。そんなお話。

最初の断章で汀と渚をすっかり見滝原中の生徒にしてしまってたけど、ミスです。

今回の話でちよつと矛盾点が出てしまったので、訂正します。実際のどのくらい離れているのか明確でないので、大丈夫ということにできなくもないのですが、気になるので。

第9話「僕は、見つけたよ」

マミが眠ってしまった後、彼女の部屋の中を歩いていたキュウベえは、部屋にある背の低いクリスタルテーブルの上に、あるものを見つけた。

昼間、マミが撮って来たプリントシール。

マミを中心に、まどかとさやかが思い思いのポーズで映っている。キュウベえが注視するのは、右端の少女。

——鹿目まどか。

キュウベえは誰にでも契約を持ちかけるわけではない。

彼の赤い瞳は魔法少女の資質を、その能力の多寡を見抜くことが出来る。

鹿目まどかの才能。その高さは、異常と言って良かった。

女王だとか、救世主だとか、そんな別の顔を持っていたかつての魔法少女すら凌駕している。

もしまどかが魔法少女になれば、さやかやマミなど彼女の足元にも及ばないだろう。

まさに、珠玉の瓦礫に在るが如し、というところだ。

魔法少女の資質が決定付けられる理由からすれば、なぜそんな力をまどかが持っているのか不思議なほどである。

(あれほどの力。なぜ、彼女は気づかなかった……?)

キュウベえは、一人の魔法少女のことを考えている。

予知魔法の使い手、三国織莉子。

その力を以って、キュウベえに協力すると言った彼女は、しかし、ゆまなど比べるべくもない才能の持ち主を見落としていた。

キリカに気づいていなかったのと同じく、能力のゆらぎか。だが、もしそうでないとしたら……

「織莉子。君は、まさか——」

魔法少女まどか マギカ 銀の海辺
第9話「僕は、見つけたよ」

週が明けて。放課後、マミは見滝原を離れていた。

離れたとは言ってもそれほど遠い街ではない。

遠くはないが、そこはマミではない、別の魔法少女の縄張りとな
っている場所である。

マミは、キュウベえに教えられた『黒い魔法少女』について調べ
るため、この地にいる魔法少女と情報を交換するためにここを訪れ
ていた。

その相手の名は、佐倉杏子。

彼女がまだ新米の魔法少女だったころ、マミは先輩魔法少女とし
て彼女と行動を共にしていたことがあった。

その関係の終わりは良いものではなかったが、それでも縁のある
相手であることは間違いない。

探すことしばし、見つけ出した杏子は、なぜか小さな女の子と一
緒にパンを食べていた。

この場所は、その少女——ゆまが契約を交わした公園である。

マミにはどういう関係なのかはわからないが、二人は笑顔を見せ
ていて、仲のいい様子を窺わせた。

二人とも、まだマミには気づいていないようだ。

「……………」

声をかけようとして、少し戸惑う。

二人の関係は、ただ再開を祝うには、少し複雑すぎる。

何を言うべきか、マミは迷い、今は個人としてではなく、一人の魔法少女として話すことを決めた。

「佐倉さん」

「ああ？ ……あ」

不審そうに杏子が振り向き、目を見開いた。

「マミ……」

杏子は複雑に表情を変える。中でも顕著に見えたのは、悲しみ、だろうか。

どこか後ろめたそうに視線を逸らしかけたが、途中で乱暴にパンを齧り取り、強い視線をマミに向けた。

「何の用だ？ ここはあたしの縄張りなんだけどね」

奇しくも、杏子はマミと同じ選択をして、単なる魔法少女として向き合った。

「キョーコのお友達？」

杏子の袖を引いて、ゆまが尋ねる。

「違うよ。ちょっと黙ってな」

ゆまの頭をぐいと押して自分の後ろに押し込む。

マミはちらりとそれに視線を向けた後、おもむろに本題を切り出した。

「黒い魔法少女って、知ってる？」

マミが聞くと、「ああ」と杏子は頷く。

「知ってるよ。魔法少女狩りだろ？」

「ホント！？ どんな子だったの？」

思っていた以上にあっさりと情報の一端に触れたかと、マミが勢い込んで聞く。

が、今度は杏子は首を振った。

「見たわけじゃない。キュウベえに聞いただけさ」

「そう……」

頷き、マミは杏子をじっと見つめる。

果たして、彼女が犯人である可能性はあるだろうかと思考する。

杏子なら、理由があれば魔法少女相手だろうと戦いを挑むだろうし、彼女の武器なら襲われた魔法少女のような、鋭い裂傷を刻むことができる。

杏子は赤だが、かつて、マミが知る杏子は『幻惑』の魔法を持っていた。

ならば、偽りの犯人像を作り出すことも、決して不可能ではない。「マミ、あんたなんであたしを睨んでるんだ」

ジト目で言う杏子に、マミが「怪しい……」と呟いた、そのとき、「てえーい！」

威勢のいい声と共に、いつの間にかマミの後ろに回りこんでいたゆまが、マミのスカートを跳ね上げた。

180度近く裾が捲れ上がり、その下に隠されていた下着が丸見えになる。

見事なスカート捲りだった。

「きやーっ！」

マミは悲鳴を上げて、スカートを抑えながらしゃがみ込む。よほど恥ずかしかったのか、目に涙さえ浮かべていた。

「こら！ キョーコは悪い魔法使いなんかじゃないよ！」

マミに指を突きつけて、ゆまが言い放つ。

「キョーコをいじめるやつはゆまがやつつけてやる！」

「いや、いじめられてないって……」

再び精神攻撃スカートめくりを行いそうなゆまの手を掴んで、杏子が言う。

ゆまは杏子の顔を振り仰いで、

「だって、ゆまの願いは——」

「わかってるよ」

皆まで言わせず、杏子はゆまの頭に手を置く。

杏子は、ゆまが何を願って契約したのかを聞いていないが、見当はついていた。

だから、聞かない。聞いてはいけない。

だって、その願いは、杏子の生き様に沿わないものだから。

けれど、ゆまが杏子を想ってくれることは、嬉しいことだから。

「ありがとね」

「えへへ」

優しく撫でてやりながら、穏やかに杏子は言う。

ゆまはぱつと笑顔を浮かべ、諸手を上げて嬉しさを表現した。

それは、どこか姉妹を思わせるような風景で。

ゆまの攻撃からようやく立ち直ったマミは、杏子を疑うという考えを捨て去った。

「お邪魔だったようね。失礼するわ」

「待って」

立ち去ろうとするマミを、杏子が止めた。

「白い魔法少女って心当たりないか？」

「白い魔法少女？」

「ああ」

頷く杏子。

ゆまに向けた穏やかさは消え去り、瞳に炎のような苛烈さが浮かび上がる。

白い魔法少女。ゆまの心を誘導して、キュウベえと契約させた、

杏子にとって忌むべき相手。

「織莉子ってヤツだ」

「織莉子——っ」

白い魔法少女には首をかしげたマミが、その名前に反応する。

マミが思い出すのは、少し時間を遡った、もう一人の魔法少女との会話。

昼休み、まどかからの昼食の誘いを蹴って教室を出たほむらを捕まえ、マミは聞いた。

「魔法少女狩り？」

「ええ。あなたも見たでしょう？ 銀の子が助けた魔法少女がいたのを。」

それに、キュウベえも言っていたから、そういうことが起こっているのはまず間違いないわ」

ほむらは、腕を組んで記憶を辿り、すぐにお菓子魔女の結界にいた魔法少女に行き当たった。

「……あれが、魔法少女狩り」

唇から落ちた言葉。それは、まるでよく知っているものについて確認するような響きだった。

「また織莉子が動いていると言うことね」

「暁美さん、何か知っているの？」

「言う必要はないわ。どのみち、私の目的の邪魔をするなら私が排除する」

冷たく言い放って、ほむらはマミの横を通り過ぎる。

「あ、待って」

振り向きながら、呼び止めようと手を伸ばす。

ほむらは、その手を叩いて、薄氷の刃に似た鋭く冷たい瞳で告げる。

「私たちに接触さわりしないで」

触れるなど、そして、言外にまどかに関わるなど言って、ほむらは去って行った。

「マミ、織莉子を知ってるの？」

「ええ。名前だけだけど……他の魔法少女に、魔法少女狩りについて聞いたときにその名前が出てきたのよ」

「んん？ どういうことだ、それ」

杏子が眉を寄せて訝しむ。

マミは、頭の中で情報を整理して、一つの考えを口にした。

「黒い魔法少女と白い魔法少女は、どこかで繋がっているということかしら？」

薔薇園のテーブルに、織莉子は一人座っていた。

しかし、その対面には、もう一人分のお茶の用意が整えられている。

白い指がカップを持ち上げ、紅茶で唇を湿した織莉子は言った。

「いらつしゃい、キュウベえ」

「やあ、織莉子」

ふわりと、音もなく、キュウベえがテーブルの上に降り立つ。

「僕が来ることも、識っていたようだね」

「ええ。それが私の魔法ですもの」

織莉子は、ゆっくりとカップをソーサーに下ろしながら、

「いいお知らせよ。新しい魔法少女の素体が――」

「それは、まどかかい？」

カチャリ、と陶器がぶつかる音が鳴った。

織莉子が見せた一瞬の動揺。

それを取り繕う暇を与えず、キュウベえは言葉を重ねる。

「違うよね。だって、君は、僕の目をまどかから逸らすために、別の少女を紹介していたんだから」

「な、何を――」

「悪い子だね、織莉子。君は、君が見た未来^{ナニカ}を変えるために、僕にまどかを見つけさせないつもりだったんだろう？」

ねえ、織莉子。未来予知の魔法は、君に何を見せたんだい？」

「あ……それは――」

カタカタとカップが鳴るのにも、織莉子は気づかない。

一手遅かった。

キュウベえに知られてしまった。

魔法少女になる前に、『まどか』に接触するつもりだったのに彼女は、もうキュウベえと契約してしまった？

もう、未来は変えられない？

世界を救うことはできないのだろうか。

願いは届かないなら、戻れと言っののだろうか。

世界の救済を以って、自身の存在を世界に証明することもできないまま——あの頃に。

『三国議員の娘——』

称賛も、あるいは非難さえ、父の名前がついて回った。

『織莉子』など存在せず、父の延長線上に『三国久臣の娘』が存在しただけ。

己の立脚点がなく、『何のために生きているのか識りたい』と願い震えていたあの日々に。

『三国さんはなんでも良くお出来になるわね——』

『優秀なのは当然でしょ。三国だもの——』

『さすが三国先生の娘さんだ——』

『三国議員の娘——』

『三国先輩——』

『三国さん——』

「織莉子っ！——」

声より早く思えるほどに迅く、刃が走った。

無数のキューブに解体されたキュウベえが、バラバラと床に転がる。

「キリカッ」

織莉子の座った椅子の後ろに立つのは、黒い魔法少女。

片腕で織莉子を守るように抱いて、もう一方の鋭い刃をキュウベえだったモノに突きつける。

「君は私を魔法少女にしてくれた恩人だけど、織莉子を傷つけるの

は許さないよ。ってまあ、もう聞こえてないか」

「いいや、聞こえているよ」

変わらず脳裏に響く声に、二人が驚きを浮かべた。

がさがさと薔薇の茂みを掻き分けて、キュウベえが姿を現す。

キリカに細切れにされた体はそのままに、何事もなかったかのよう
うに、新しいキュウベえが現れたのだ。

「全く、君と言いはむらと言い、無意味に殺されると困るんだけど
ね。変わりはいくらでもあるけど、勿体無いだろう？」

そんなことを言いながら、キュウベえは、自分の死体を食べ始めた。
た。

あつという間に肉片はキュウベえの中に収まり、キュウベえが殺
されたという痕跡は最早何も残っていない。

キュウベえはその無感情な目にキリカを映す。

「なるほど、魔法少女狩りは君か。となると、魔法少女狩りの方も
僕の目をごまかす罠ということだね」

「——っ」

「待って、キリカ」

飛び出そうとするキリカを、織莉子が止める。

キュウベえを殺しても、意味はない。

何度、どうやって殺したところで、殺せる未来は見えなかった。

ろくでもない状況。救いがあるとすれば、織莉子がその判断が
出る程度には冷静さを取り戻していることか。

キリカがいるというそれだけで、織莉子の心は不思議と落ち着い
ていた。

テーブルを挟んで向かい合う、二人と一匹。

状況はほぼ膠着していると言っている。

キュウベえを害することに意味はなく、キュウベえは言葉を使う
ことしかできないからだ。

「君たちは上手くやったよ。まどかとマミが友達にならなかったら、
もしかすると見つけれなかったかもしれない。」

でも、残念だったね。僕は、見つけたよ」
言って、キュウベえはにやりと笑った。
「鹿目まどかを、見つけたよ」

次回、第10話「奇跡も、魔法もあるんだよ」

第9話「僕は、見つけたよ」（後書き）

今回は少し短めです。

基本的に一日で起こることは一話にまとめてきたのですが、原作でもタイトルだった「奇跡も、魔法もあるんだよ」をタイトルに使いたかったので、今回は織莉子ルートとまどかルートで分割しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8653u/>

魔法少女まどか マギカ～銀の海辺～

2011年11月6日08時13分発行